
パンチョウ！

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バンチョウ！

【NZコード】

N9271C

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

この物語の主人公、高倉ケン太はごく普通の十五才の高校一年生。ところがひょんなことで”伝説のバンチョウ”と思われ、身につけた”伝説のガクラン”をめぐって不良たちにつけねらわれる羽目に。ケン太は本当の”伝説のバンチョウ”になれるのか？

ケン太（前書き）

「スケバン」の世界観とは関係ありません。もともと 1998 の “blogツクール” で造ったゲームのノベライズとして書いています。いずれ、ブログなどでゲームを公開したいと思っていますが……。

ケン太

ぱちりと目を覚ました高倉ケン太はうん、とベッドの中で身体をのばした。

天井を見上げると、朝の光が机のつややかな板に反射してほんのり明るい。

ちりりり……。

目覚ましが鳴り出した。

ケン太は手を伸ばし、目覚ましのベルを止めた。時刻を見ると午前六時半。ケン太は今まで目覚ましで起こされたことはない。いつも目覚ましのなる前に目覚めるから、本當は必要ないのだが、習慣になつてるので夜寝る前にはかならず目覚ましをセットする。起き上がるとじぶんの部屋の壁からぶらさがつて、ハンガーにかけられている高校の制服を見つめた。

いまだき珍しい、詰襟の学生服である。

今日からケン太は高校生なのだ。

赤星高校。

それが今日からかよう、ケン太の高校だ。

どんな高校なんだろう。

ケン太の想像はふくらんだ。

じつを言うと、ケン太は今日の今日までその赤星高校といふところへ足を運んだことはない。

両親がすべて手続きをして、入学試験は中学校ですませた。簡単なテストで、ほぼ無試験といってよかつた。だから実際に高校に行くのは今日が初めてだ。

それまで着ていたパジャマを脱ぎ、学生服に着替える。

制服は新しく、まだ着慣れていないからちょっとじごわごわする。

それがまた新鮮な気分で、嬉しい。

机の上には今日から使うことになる教科書がきちんと背を並べて

揃えられている。

もつとも今日は入学式だけなので、教科書を持つていく必要はない、明日から正式な授業が始まる予定である。

ケン太の部屋は一階にある。

部屋を出て、階段をどんどんとリズムよく降り、一階のキッチンへ向かう。

「おはよう」

キッチンには父親のブン太と母親の純子が卓袱台をかこんでケン太を待っていた。

キッチンとはいえ、洋間の一部に畳を敷き便宜的に和室にしている。そこに卓袱台と水屋をあてているのだ。

ケン太の挨拶に、新聞を読んでいたブン太が顔をあげた。

「おお、さつそく制服を着てきたか！ 似合つぞケン太！」

そう言うと顔をほころばせた。

ブン太はがつしりとした身体つきで、頭は角刈りにしてねじり鉢巻をしている。身につけているのは大工の法被と、どんぶり腹巻といつまるで「天才バカボン」のパパみたいな格好である。だが、これでも建設会社の社長なのだ。

「なあ、母さん。似合だろ？」

同意を求められた母親の純子は細面の顔をうなずかせ、につっこりと笑みを浮かべた。

母親のほうは和服を身につけ、しろい割烹着をつけている。

「本当に……。まるでお父さんの若いころみたいですよ」

「さあさあ、飯だ！ 腹が減つては戦ができぬ、といつじやないか」
ばさばさと音を立て、ブン太は新聞をたたみ背を伸ばした。

母親の純子がてきぱきと朝食の用意をする。

「ご飯に納豆、焼き魚、そして漬物と豆腐の味噌汁。

ケン太はきちんと正座して朝食を食べた。

食べ終わると「馳走様」と言って、自分の分の食器を持って立ち上がる。そして洗う。自分のことは自分でする、というのが高倉家の

家訓である。

そのケン太にブン太が声をかけた。

「おい、ケン太。昨日も言つたが、入学式にはお前だけで行くんだぞ。おれたちはついて行かないからそのつもりでな」

「うん」

「世間では親が入学式についていくみたいだが、この家では違う。お前ももう十五才。昔で言えば元服の年だ。いつまでおれたちに甘えてばかりじやいられないだろ。判るな」

「うん、大丈夫だよ。ぼく、ひとりで行けるから心配しないで」

ケン太の答えにブン太はちょっと涙ぐんだみたいだつた。母親の純子はふと袖で目頭をおさえ、顔をそむけた。

「それじゃ行つてこい！」

「行つてきます！」

ブン太は怒つたような顔でケン太を見送つた。

玄関でケン太は靴をはき、ドアを開いた。

ひろびろとした庭がひろがる。

庭にはあおあおとした芝生が敷きつめられ、正門まで敷石の道がつづいている。

ケン太の住むのは高級住宅街で、その敷地はかるく百坪をこえる。土地代だけで億、という金額にならうかという豪邸である。

父親の高倉ブン太は若くして建設業界にはいり、独立して高倉建設を創業した。

事業はとんとん拍子で発展し、ケン太の生まれる前にはすでに業界で十の指にはいる規模の会社に成長していた。

俗な言葉で言うとケン太はお坊ちゃまということになる。

が、ケン太は自分がお坊ちゃまであるという自覚はない。いままで通つた中学は公立だし、お小遣いだってほかの同級生とおなじかすくないくらいだ。贅沢な暮らしなどしたことない。なにしろ父親のブン太はいまだに自宅から会社へ電車通勤をしているし、自家用車もないのだ。その暮らしさは中小企業のサラリーマンとおなじよう

なものである。

そのことに疑問を感じたことはなかった。

なにしろおなじような社長や金持の友達というものを持つたことがなかつたし、比較することもなかつたからだ。

ケン太は軽い足取りで正門を出た。

両親に繰り返し教えられたとおり赤星高校へ向かつ道を歩く。
どん！

いきなりぶつかつた相手がいた。

「わ！」

思わず声をあげてしまった。

「気をつけな！」

しゃがれた押し殺した声にケン太はぎくりとなつた。

ぶつかつた相手を見る。

髪の毛を真つ赤に染め、ちりちりパー／マにしている小柄な男子生徒だ。

詰襟をわざと開き、だぼつとひろがり裾で急に縮まつたズボンを穿いている。あとでそれがボンタンとよばれるズボンであることをケン太は知る。

顔はまるで野球のホームベースのような形をしている。えらがはつて、目はちいさくその両目がケン太をねめつけていた。

「おめえ……そこの中倉つて家から出てきただろう。おれ、見ていたんだぜ」

相手は肩をそびやかし、じろりとケン太の足もとから頭のてっぺんまで視線を送った。

「は、はい……」

「うむ」もるケン太に相手はにやりと笑いかけた。好意のかけらもない、悪意だけの笑いというのがあるのをケン太はいま知つた。

「おれは千石高校で番を張つていてるケイスケつてもんだ。以後、よろしくな」

ケイスケ、という相手の言つことはよく判らなかつた。『番を張

る”とはどういうことだろ？「ほんやりとしていたケン太に、ケイスクはいらだつたような声で話しかけた。

「おい！ 人にぶつかつといてそのままってことはないだろ？ それにおれが自己紹介したってのに、なんにも言わなねえのか」

はつとケン太は我に返った。

「あ、『』『』免なさい……ぼく、ケン太っていいます

「それだけか？」

ずい、とケイスケは身を乗り出した。

ケン太は身を反らせた。

なにしろケイスケというやつ、身体からやすっぽいコロンの香りを漂わせ、さらになにか大蒜の料理を食べてきたばかりなのか、ひどい匂いがするのだ。

「治療費がいるな。な、そう思つだろ」

「え、治療費……ですか？」

思いがけない相手の言葉にケン太は目を白黒させた。

「そうさ。お前がぶつかつたからな。もしかしたら、おれの肩が骨折しているかもしないじゃないか。もしそうなら、入院だ。だから治療費。当然だろ？」

ケン太はものも言えなかつた。

ちょっとぶつかつただけで骨折？

そんな馬鹿な！

「おい、ちょっと飛んでみな」

ケイスケはわざやいた。

「え？」

「飛んでみろって言つてんだ！ そこでぴょんぴょん跳ねるんだよ！」

言われたとおりケン太はその場で飛び上がって見せた。

ケイスケはがっかりしたような顔になつた。

「ちえ、金持つてないのか」

どうやらケン太に飛び跳ねさせ、ポケットで硬貨が触れ合つ音を

聞きたかったようだ。

「ま、いいや。どうせお前の家は金持ちだろ？ いまから家へ帰つて、金をもつてこい。なに、家に帰れば金庫とか、あるんだろう？ にしろこんな高級住宅街にあるんだからなあ」

ケン太は驚いた。

どうしてそんなことしなくてはならないのか、判らなかつた。立ちすくむケン太に、ケイスケは拳を握り締めて見せた。

「痛い想いをしたくなかったら、さつさと行け！」

「は、はいっ！」

思わずケン太は家を目指して走り出した。

心臓はどきどきしていた。

人生初めてのカツアゲにあつたのだ。

そろりと玄関のドアを開け、靴脱ぎ場を確認する。

母親の草履と、父親の白木の下駄がきちんとならんでいる。まだ両親は家にいるようだ。

金、金……。

ケイスケの示唆した金庫は家にはない。

しかしキッチンの水屋にはいつも金がおいてあつた。こまかに買い物をするさい、母親の純子や父親のブン太が必要なぶんを使うためである。

水屋の引き出しを開くと、こじりおぼえの場所に数枚の一万円札があつた。

それを手にする。

と、いきなり母親の純子の悲鳴のよくな声がした。

「ケン太！ なにをしているのっ！」

その声にケン太はびくりと飛び上がつた。

札束を握りしめたままふり返る。

母親が真つ青な顔で立ちすくんでいた。

彼女の視線はケン太の顔と、ケン太の握っている一万円札を往復

した。

「どうした？」

そこへ父親のブン太もやってきた。

母親の顔色と、ケン太の表情を見てすべて察したようだつた。

「金か……どうしてそんな金が必要なんだ。言つてみろ」

ケン太はぼつりぼつり話し出した。

家を出たとたん、ケイスケに会つたこと、そしてカツアゲを受けたこと。

すべてを語つた後、ブン太はふーんと唸つて腕を組んだ。

母親は肩を落としていた。

「ちょっとこい」

父親のブン太はそう言つと、ケン太をじぶんの部屋へ連れて行つた。母親の純子もその後に続く。

六畳の和室。そつけない、といつていい飾り氣のない部屋にはわざかな家具があるだけで建設会社の社長とは思えない質素な調度である。

「そこに座れ」

正座するケン太の前に父親のブン太と、母親の純子がそろつて正座した。

しばらく沈黙が続いた。

「なあ、母さん。こんなことになると、おれたちケン太の教育を間違つたかもしれないな」

母親は黙つて頷いた。

「カツアゲされて、そのまま金を渡すために家をあさるなんて、男の風上にもおけねえ。なあ、そう思うだろ？」

ふたたび母親は黙つて頷く。

父親の口調が微妙に変わつたのをケン太は気づいた。今まで父親のこんな口調は聞いたことはなかつた。なんだかあのケイスケの喋り方にちょっと似ている。

ブン太は立ち上がると、和室の桐箪笥の前に立ち、引き出しを開

けた。

なにか衣類を取り出し、ケン太の前にひろげる。

真つ赤な色彩が目に飛び込む。

そして金色の刺繡。

”男”の文字が金色で刺繡されている真つ赤な学生服とそろいのズボン。いや、ガクランだ。

ぼう然とするケン太にブン太は話しかけた。

「これを着ろ」

そう言つてそれまでの学生服を脱がせ、あたらしい真つ赤なガクランを着せ掛ける。

「後は髪型ですね」

母親の純子が口を開いた。

ブン太は頷いた。

「お前、頼む。こいつにぴたりな髪型にしてやつてくれ」

はい、と頷き純子はケン太の腕をとり風呂場へ連れて行った。そこへ座らせると、純子は口を開いた。

「目を閉じていなさい」

ケン太が目を閉じると、なにかつーん、とする匂いのする液体が頭にふりかけられた。

純子の手がなにか動いている。

髪の毛が梳かされ、ドライヤーの音がぶーんと唸つている。

やがて純子の声がした。

「はい、もういいわ。目を開けて」

目を開けると鏡があつた。

そのむこうの自分の髪型を見て、ケン太はびっくりした。

金髪。

ケン太の髪は金髪になつていた。

しかもその髪型はリーゼントになつてている。

母親を見あがると、純子はにっこりとほほ笑んだ。

「とても似合つわ。お父さんの若いころみたい」

「ええつ！」

金髪リーゼント、そして真っ赤なガクランを着たケン太をふたたび自室に連れ、父親は説明した。

「これはおれが若いころ着ていた伝説のガクランだ。これでもおれはお前の年頃には伝説のバンチョウって呼ばれていてな」

そう言うとブン太は照れたような顔を見せた。

「そうよ、お父さん。とっても喧嘩が強くてかつこよかつたのよ」「よせよ」

両親はケン太の目の前でいちやついて見せた。ケン太の視線に気づき、ブン太はおほんと咳払いした。

「とにかく、おれはカツアゲなんてものには負けなかつたぞ。お前も男だ。そのガクランを着ていれば、そこらのヤンキーなんかにや負けるもんじやねえ！ 行つてこい！ そしてそのケイスケつて三下と勝負しろ！ お前なら出来る！」

「そうよ、ケン太なら負けないわ！」

純子も同意した。

ケン太はあっけにとられた。

正門から出てくるケン太にケイスケが声をかけた。

「よお、遅かつたな。金は出来たのか……」

途中で言葉がつまる。

ケン太の格好にケイスケは目を剥いた。

「な、なんだその格好は……確かに前さつきの……」

思わず逃げ腰になるケイスケの態度に、ケン太のなにかがむくりと目を覚ましたようだつた。

こいつ……見かけだけのツッパリなんだ。

どういうわけかそんなことが瞬間的に悟つていた。ケイスケを無視してそのまま歩き出す。

「お、お前、金はどうした？」

「ないよ」

短く答えるケン太に、ケイスケは怒りの表情を見せた。

「そうか、そういう態度に出るってのか。へつ、なんでえそんなガクランを着たからって……」

じろじろとケン太の着ているガクランを見る。

と、背中の”男”の文字に気づいた。

「そ、その背中の”男”の縫い取り……、ま、まさかそれは伝説のガクラン？」

ケイスケの言葉にケン太は驚いた。

そうなのか？ 伝説のガクランと言うのは本当にあるのか？

ケイスケはにやりと笑つた。

「そのガクラン、お前なんかが着るのはもつたいねえ。もつと似合う男がいる……。おい、それをよこしな」

そういうながら伸ばしたケイスケの手をケン太はふりはらつた。ケイスケの顔色が変わった。

「野郎……さからおうつてのか」

拳が握り締められる。

ふりまわされる拳を、ケン太は手を挙げて受け止めた。

ばしつ、という乾いた音がする。

同時に空いた右拳をケイスケの鳩尾にたたきこむ。

ぐえつ、といううめき声をあげ、ケイスケは身を折り曲げた。さがつたケイスケの顎を、ケン太の膝頭が突き上げる。わあ、という悲鳴をあげケイスケは吹っ飛んだ。

驚愕の表情になつていた。

「お、お前……ほんとうにさつきのケン太か？」

田はさきほどまでの勢いはなく、すっかり負け犬のそれになつていた。

ようようと立ち上がり、逃げ腰になる。そのまま駆け出した。遠ざかるケイスケの姿にケン太はあらたな衝動を感じていた。おれは男だ。

おれは男だ！

ふつふつと闘志が湧き上がってきた。

その衝動に、ケン太はいつまでも立ち尽くしていた。

がらりと戸が開く音にキヨシは顔をあげた。それまで読んでいたマンガをそばに置く。入ってきたのはケイスケである。

顔色が真っ青になっていた。

「キヨシさん！」

じりがるような態勢でケイスケはキヨシの前に座り込んだ。

「どうしたんだな？　おめえ、怪我してるみたいなんだな」

キヨシはのんびりとした声をあげた。

身長一メートル近く、体重は百キロをこえる巨体である。着ているのは学生服だが、ぼろぼろに着古し、あちこち接ぎがあててある。学生服のボタンはすべて外し、その下から薄汚れたランニングシャツが覗いている。ぼりぼりと首筋をかい、手近においてある煎餅をかじった。ひとつつまみ、ケイスケに差し出した。

「おめえ、ひとつ食うか？　ん？」

そう言つとつと笑つた。前歯がほとんど抜け落ちたその顔は、凶悪と言つよりどこか知能の低さを思わせる。

その部屋はひどい有様だつた。

壁は煙草のヤード黒く変色し、床にはカツブ麵やらコンビニ弁当の容器が散乱し、食べ残しの食材にはカビが繁殖している。その他、マンガ、スポーツ紙、メードばかりのアダルト雑誌が山になり、脱ぎ捨てられた下着が汗臭い匂いを発散させていた。

キヨシはその中にソファを持ち込み、一日の大半をテレビをつけっぱなしにしてすごしている。

普通の神経の持ち主だったら、一秒だつていたくないはずだ。

それが証拠に、ケイスケはこの部屋の中にはいるとき決して靴を脱がない。キヨシもそれを見てもなにも言わない。うつかり靴を脱いで上がり込んだら、床に散らばっているカビの生えた食材に足を

突つ込みそうになるからだ。

差し出された煎餅を辞退して、ケイスケは口を開いた。

「た、大変なんですよ、キヨシさん」

「だからなにが大変なんだな？」

「おれ、見たんです。伝説のガクラン」

「なにを見たつていうのや？」

「伝説のガクランですよ！」

「なんだ、そりや？」

ケイスケはがっくりとなつた。

「キヨシさん、伝説のガクランを」存じないんですか？」

ふるふるとキヨシは首をふつた。頬の肉が首を動かすたびたぶたふとおよぐ。

「伝説のガクランってのはね、それを着たものは最強のバンチョウであると証明されるつていうガクランなんですよ！」

「はあ、そうけえ」

キヨシはまるで関心をしみさず、今度は餡子のたつぷりはいった大福もちに興味をしめした。ひとつつかみ、あんぐりと口を開けほおばる。もぐもぐと咀嚼し、口の端についた餡子を舐めた。

ケイスケはいらいらして叫んだ。

「ねえ、キヨシさん。あんたこの千石高校の最強のバンチョウでしょう？ もしそいつがほかのバンチョウに渡つたら、どうします」「どうなるのかや？」

「そいつが最強のバンチョウって言われますよ」

「ほかのやつが最強のバンチョウ？」

じょじょに理解をしてきたらしく、キヨシの首筋が赤く染まった。

「そうですよ！ それで平氣なんですか？」

「もう……とキヨシの顔が赤く染まつた。

ようやく怒りが脳にたつしたようだ。

ごくりと大福もちを呑みこみ、ケイスケを見る。

「ケイスケ！」

「はーっー。」

「どうすべえ?」

ふたたびケイスケはがくつとずつ口けた。

「しようがないなあ…… とりあえず、お兄さんと相談するってのはどうですか?」

「アキラ兄ちゃん? おお、そりやええ考えだわ」

そうだ、そうだと贊意を示しどうじりしうとかけ声をかけてキヨシは立ち上がった。

「いやつ…… キヨシの足が床に落ちていた菓子パンのつみを踏んづけた。

それに返づか、皿体を折り曲げて捨つ。

つみは破れていないうだ。

「もつてえねえ……」

そうつぶやくと、包みを破りパンを頬張つた。くちゅくちゅと歯みながら歩き出す。

「それじゃおー、アキラ兄ちゃんここへこに行へからみ…… お前は……」

…

「はい?」

「なんか食い物買つて来いや」

ケイスケはずつ口けた。

入学式（前書き）

赤星高校は大変なことになっていた！ なんと、ここは不良の溜まり場になっていたのだ。なぜ、こんなことに？ ケン太はこの赤星高校を立て直せるのか？

入学式

ここが赤星高校か……？

ケン太は高校の正門で眉をひそめた。

とても今日が入学式を迎える高校とは思えなかつた。

高校の堀は一面に落書きでうまり、校庭にはゴミが散乱している。正門のまわりにはべつたりとうんこ座りをした男女が、道行く通行人を鋭い視線で眺めている。男女とも学生服を着ているからには高校生だろうが、その学生服は誰一人としてまともなスタイルの者はいない。

数人にいたつては、学生服すがたで煙草をふかしていた。

もつとも学生服についてはケン太はあまりその連中におおきな顔はできない。

金髪リーゼント、真っ赤な学生服の背中には金の縫いとりで”男”の文字が踊っている。

もしかしてここで一番派手な格好をしているのはケン太かもしない。

ゆっくりと正門に近づいた。

「待ちな

ひとりの男子生徒がゆらりと立ち上がり、ケン太の行く手をふさいだ。

じろじろとケン太の足もとから頭へと視線を動かしていく。

その男子生徒はひょろりと背が高く、頭の毛は染めていないがケン太とおなじようなリーゼントだった。近づくと安っぽい整髪料のにおいが漂つてくる。

「おめえ、ずいぶん格好いいじゃねえか？　どこの生徒だ？」

「ぼくはこの赤星高校の一年生で高倉ケン太といいます。きょうから入学しにきました。どうぞよろしく」

丁寧に挨拶すると、相手は眉をひそめた。とはいへ、そいつの眉

は剃つているのかほとんど見えないから眉間に皺がよる程度しか表情は読めない。

「ふーっ、としゃがみこんでいた女子生徒がふきだす。

「ぼくちゃん、一年生なんだ。可愛いねえ！」

そう言つとげらげらと笑い出した。

身長より横幅がひろそうな、でつぱりと太つた女子であった。頭は真つ赤にそめ、ポニーtailにしている。

最初にケン太に言葉をかけた男子生徒がいらついて叫んだ。

「黙つてろい！ アケミ。おれが話しているんじゃねえか」

アケミ、と呼ばれた女はふんと肩をすくめた。

「ふうん、ケン太つていうのか。それでなんの用だ？」

ケン太はあっけにとられた。

「ですから入学しに……」

「そうかい。まあ勝手にしな。しかし、この校門を通りたければ通行料が必要なんだ。料金は…… そうだな、いまおめえが持っている有り金全部だ！」

そう言つとんちやりと笑つた。

ケン太はゆつくりと首をふつた。

「そんなものは持つていません」

「なにい？」

男子は氣色ばんだ。

その気配に、それまで座り込んでいた数人の男子生徒が立ち上がつた。

最初の男子生徒は振り返り叫んだ。

「このぼくちゃん、通行料は払えねえそだつてよー！」

ぱきぱきと指の関節をならしながらかれらは近寄つてくる。

最初の男がぐいっ、と近寄つた。

「痛い想いはしたくないだろ？」

ささやきながらケン太の胸倉をつかむ。

「いつもケイスケと同じようなことを言つなあ、とケン太はあき

れていた。

するりと手を挙げると、胸倉を掴む相手の手をひねりあげる。

「いてててて！」

悲鳴をあげた。

思ったより甲高い声だった。

ぐいっ、と力をいれ相手をくるりと廻して、とーんと背中を押す。わっ、わっ、わっと両手をぐるぐる振り回し、男子生徒はたたらを踏んで近寄つてくるほかの男子生徒に突っ込んでいく。わあ、と数人がひとかたまりになつてすつころんだ。

ケン太は歩き出した。

奇妙だ……。

ケン太は自分におきた突然な豹変にわれながら呆れていた。中学卒業まで、喧嘩など一度もしたことがないのに、いまでは何のためらいもなく相手を倒すことが出来る。

これもいま着ている伝説のガクランのせいだらうか？

「待て！」

かれらはなんとか立ち上がり、ケン太の背中に声をかけた。と、その中の一人がつぶやいた。

「伝説のガクラン……！」

「なに？」

全員、ケン太の背中に刺繡されている”男”の文字に気づいたようだつた。

かれらの顔がまっしろになつた。

「てことは、あいつは伝説のバンチョウ……？」

そう言つと顔を見合せた。

ケン太はさつさと校庭へ足を踏み入れた。かれらは何も言わず、見送つた。

噂はケン太の歩く速度より校内にひろまつたようだつた。

ケン太が歩くと、そこらでたむろしている男女の生徒たちはいつ

せいに注目し、ある者は目をそらし、ある者は敵意ある視線を送つてくる。だが思い切つてケン太の行く手をふさげよう相手は現れなかつた。

ケン太は校長室をさがしていた。

「ここが本当に赤星高校なのか。もしそうなら、この有様はどうとか尋ねてみたいと思つたからだ。

高校でも中学でも、学校のつくりといつのはそう変わるものではない。

教員室を見つけ、中をのぞいてみたがあいにく教員はひとりもない。

校長室の看板は見当たらなかつた。

ケン太は手近の生徒に声をかけた。

「ちょっと……」

声をかけたのは小柄で、ふくふくと肥満した男子生徒だつた。頭はくりくりに坊主にして、目は油断なくあたりに気を配つていて、どうやらケン太と同じくらいの年頃だ。

ケン太に声をかけられ、かれは揉み手をして近づいた。

「へい、なんでやしよう？」

この相手も妙な言葉使いをするなあ、とケン太はあきれた。しかしそまだまともに話せそうだ。

「ええと、校長室を探しているんだけど」

「校長室！」

かれは頗狂な声をあげた。

ほん、と額をたたきうなずいた。

「はい、校長室ね、判ります。旦那はそこをお探しで？」

「ぼく、旦那、なんてよばれる年じやありません。それにぼくの名は高倉ケン太といいます」

「こいつは失礼をば……つい癖でね。だれでも旦那つて言つてしまふんでご簡便を。高倉ケン太さんと仰るんですね。あたしはイッパチと申します。以後、お見知りおきを」

イッパチと名乗った相手は満面の笑みになつた。

「ああ、校長室をお探しでしたね。ご案内いたしやしょう。」
「でげすよ」

腰をかがめ、ひょこひょことした足取りでケン太の先を歩く。

イッパチの向かつた先を見てケン太は声をかけた。

「イッパチさん、それじゃ外に出てしまうけど……」

イッパチはくるりと振り向き、ふたたび自分の額をぽん、と叩いた。

「イッパチさん、とは恐れ入りやす。どうか、イッパチ……と呼び捨てに願います。それに校長室は校舎の外にあるんで、こちらでげすよ」

ふたりは校舎の外へ出て、ぐるりと裏側にまわった。

「これが校長室でやんす」

ケン太はぼうぜんとその建物を見上げた。

草がぼうぼうと生い茂っている裏側に、その建物はあつた。

もとはなにかの倉庫として使われていたのか、鉄骨がむきだしの簡易住居だった。壁は薄汚れ、屋根のトタンはあちこちサビが浮き出でている。

「本当にこれが？」

「やつでやんすよ。こじが赤星高校の校長室つてわけで。それじゃこじで失礼しやす」

ペコリと頭を下げ、イッパチは背をむけた。

歩き出す寸前、思い出したといつもふり向くと口を開いた。

「ケン太さん。あたしはこの高校で便利屋みたいなことをしているんでげす。まあ他の連中にはそのたび、ちょっとびりお小遣いみたいなもの戴いておりやすが、ケン太の旦那にや特別口ハでサービスいたしやすよ。どうかこれからも、このイッパチをご贔屓に！」

えへへへ、とイッパチは揉み手をしながらあとずさつた。
かれが校舎の向こうに見えなくなると、ケン太はほつとため息をついて建物に目をやつた。

「どうやうにここで間違いないよ」
「失礼します」

「どう断り、ドアをノックする。

「どなた？」

ドアを開けた相手を見て、ケン太は首をかしげた。

「あの、ここは校長室ですよね？」

「はい、そうです」

ドアを開けたのはケン太とおなじくらいいの年頃の女子生徒であった。

髪の毛を両側にまとめ、前髪をたらしている。身につけている制服は、ここでケン太が見た中では一番まともだ。セーラー服の上下で、ソックスもきちんとしていた。

「校長に会いたいんですが」

そう言つと、彼女は困ったよつた表情になつた。

「ゴミちゃん。どなた？」

おくからゴミ、とよばれた女子生徒とそつくりの女子の声がする。

「ゴミはふりかえつて答えた。

「ゴミねえちゃん、校長先生にお密さんなの」
ぱたぱたと足音がして、もうひとりの女子生徒が姿をあらわした。
それを見て、ケン太はちょっと驚いた。
ふたりともそつくりだったからだ。

双子だ……。

ケン太はなぜ校長室に女子生徒がいるんだろうと思つた。
ゴミとよばれた女子生徒はすまなそうな顔になつた。

「あのう、校長先生はいま……」

ゴミ……と、おくからか細い声が聞こえた。

こんどは老人の声だった。

「お密さんならお通ししない。かまわないから……」

はい、とコリコリのふたりは声をそろえて返事をした。

「ひちりくじりや」

中へ入ると想像とはまるで違っていた。

校長室はこんなところだとぼんやりイメージしていたのは、どうしりとしたテーブル、額にかかる歴代校長の肖像、各種のトロフィー、書類をとじたバインダーをいれた戸棚、といったものだつたが、ここはまるで時代劇の長屋の中、といった雰囲気だつた。

はいつたすぐが三土和になつていて、ちいさなかもどがあつて火がついている。かまどには鍋がかかり、ぐつぐつとなにかお粥のようものが煮えていた。

靴を脱ぎ、障子を開くとそこは二畳ほどの和室となつていて、和室には布団がのべられ、ひとりの老人があおむけに寝ていた。老人はケン太を見てかすかに表情を動かした。

どこからか、かすかに哀しげなメロディーが流れてきた。昭和を思わせる、甘つたるく湿っぽい旋律であつた。

ケン太は老人のそばに正座した。

「わたしが赤星高校の校長です……どのような用件ですかな?」「ぼく高倉ケン太といいます。今日、入学のため来たんですが、入学式らしきものは見当たらなかつたですね。どうしてですか?」

「高倉……ケン太……入学式……?」

校長と自己紹介した老人は、ケン太の言葉にぱくぱくと口を動かし、どんよりと濁つた目をあちこちさまよわせた。なにかを必死に思い出そうとしているようだつた。

「校長先生、お粥が煮えました」

その時、あの双子が鍋をかかえ入つてきた。校長はぐずぐずと鼻をすすりあげ、わびた。

「いつもすまないなあ……わしがこんな体でなかつたらお前たちに苦労はかけないのに……」

双子はかぶりをふつた。

「校長先生、それは言わない約束でしょ」

「あのひ……入学式のことなんですが」
ケン太はたまらず声をかけた。

校長はきょとんとした表情になつた。

音楽がとまつた。

「ああ、ああ、入学式ね……もひ、そんなことは数年やつていな
なあ……」

「どうしてですか？ それにこの高校の有様はどうなつているんです
？」

校長の顔がくしゃくしゃと歪んだ。

田じりに涙がたまる。

「それを言つてくださいな……。判つていても、いまの赤星高校
は高校とは名ばかり、実態は不良の溜まり場でな……この双子、コ
ミとエミだけがわしを世話してくれてなんとか生き恥をさらしてい
る始末ですわい」

くすん、と鍋をかかえていた双子が涙をぬぐつた。

ふたたび哀しげなメロディーが流れる。

「この高校がなぜこんな状態になつたかといつお尋ねでしたな。お
話しあましょ。ふたりとも、あれを……」

はい、と返事してエミとコミの双子は立ち上がりどこからか液晶
テレビとゲーム機を持つてくる。ゲーム機をテレビに接続し、スイ
ッチを入れた。

ゲーム画面が立ち上がつた。

タイトルは「バンチョウ」とある。

双子はケン太にゲーム機のコントローラーを渡した。

スタートを選択させると、ゲームが始まつた。

どうやらショミレーション・ゲームのようであつた。

ゲーム画面にさつきの双子をアニメ化したキャラがあらわれ、ゲ
ームの目的や操作方法を要領よく説明していく。

ゲームはプレイヤーが高校の生徒となり、喧嘩や取り引き、駆け
引きを駆使して高校の番長となつていくものだつた。

ケン太はすぐにゲームに熱中した。

画面には赤星高校を思わせる高校が舞台で、赤星高校に隣接する地区の高校同士が縄張りをめぐつて赤星高校に配下の生徒を送り込み、支配権を確立する様子が示されていた。

赤星高校にはふたつの高校、千石高校と万石高校のふたつの生徒たちがおしよせ、校舎の中で喧嘩をくりひろげる。そのため赤星高校の生徒はつきつきと嫌気をさして転校し、高校の中は殺伐としていった。

「お判りですか。この高校は千石高校と万石高校のふたつの高校の番長による縄張り争いに巻き込まれてしまつたのです」

ケン太はゲームを切り上げ、校長に向き直つた。

「それで生徒は？」

「このエミとヨミのふたりだけになりました。ふたりは実を言つてわしの孫でして、それで赤星高校の生徒でいてくれるのです」

ふたりは胸の前で手を握りしめ、目に一杯涙を浮かベケン太に話しかけた。

「お願いですケン太さん。あたしたち、ひとりでも多く赤星高校の生徒を増やしたいんです。どうかほかの高校に行かないで、赤星高校の生徒になつてください。いまの高校には本物の赤星高校の生徒はあたしたちしかいないんです」

ケン太はうなずいた。

「もちろんです。今日、ぼくが校長先生をお尋ねしたのも、入学式を執り行つて欲しいからですから」

「おお……！」

校長の顔に赤みがさした。

起き上がろうともがく。それを双子がそつと背後にまわつて背中をささえた。

「なんだか元気が出できましたぞ。それではさつそく入学の手続きを……おい、ふたりとも頼むよ」

はあい、と双子はこんどは明るい声をあげ物入れから新しい生徒

手帳を持ち出した。今まで流れていた物悲しいメロディーは「」んどは明るい、テンポの良いものに変わった。

校長は生徒手帳にケン太の名前を書き込むため、万年筆を胸のポケットから取り出した。

「ええと高倉ケン太さん、と仰いましたな……はて高倉、高倉……どこかで聞いたような……それにあなたのその学生服……見覚えがあるような……。おおそつだ、高倉ブン太といつ名前に聞き覚えはありませんか?」

「ぼくの父です」

校長は仰天した。

「なんですと! そうでしたか。やはりブン太の……あの子にはずいぶん助けられました。かれがうちの生徒だったころ、やはり同じようなことがありましたな、そのとき立ち上がって高校を救つてくれたのが高倉ブン太くんでした。かれはそのときの活躍で、伝説のバンチヨウと呼ばれるようになつたのです」

「こんどはケン太が驚く番だつた。

そうか、父親がこの高校で。それで進学のときあれほどこの赤星高校へ入学しろと言つたのか。

双子はデジタル・カメラでケン太の顔を撮影し、それをパソコンにとりこみプリンターで生徒手帳に顔写真を印刷した。

あらたな生徒手帳をもらい、ケン太は立ち上がつた。

三上和で靴をはくケン太に双子は話しかけた。

「ケン太さん。あたしたち、この赤星高校が元通りになるならなんでもします。なにかあたしたちにしてもらいたいことがあつたら、なんでも仰つてください!」

ケン太はうなずき、ドアを開け外へ出た。

校舎を見上げ、ため息をついた。

どうすればこの高校を立て直すことができるんだろう。

千石高校……。

ふとその名前が浮かんだ。

ケイスケとかいうやつが、自分は千石高校で番を張っている、とか
言つたな。

アキラ（前書き）

キヨシの兄、アキラは千石高校を支配する番長である。伝説のガクランの存在を知ったアキラであるが……。

アキラ

千石高校の校長室で、アキラは壁に貼られた町の地図に見入っていた。

町のさまざまな箇所には青いピンと赤いピンでしるしがつけられている。青いピンは千石高校の影響下にある番長やスケバンをあらわし、赤いピンが万石高校の影響下の番長や、スケバンである。ピンの数はほぼ同数で、それぞれの高校の近くにもっとも同じ色が集中している。だが配置はすこし差があり、万石高校のピンが一箇所に固まる傾向があるのにたいし、千石高校のピンは万石高校を外から覆うような配置になっている。

その地図の真ん中に位置しているのが赤星高校だ。

「赤星高校を制するもの、すべてを制す」

アキラはそうつぶやいた。

真っ白な軍服に似た学生服。ボタンが外に見えないネイビー・タープのものである。

細面のやや酷薄な印象をあたえる顔。髪型は五分刈りにして、それがますます旧海軍の士官のような印象を与えている。

「タツラのやつ……いつか勝負してやる！」

そうつぶやくとアキラの額に怒りの血管がういた。爆発しそうな感情を必死に抑えているといった感じだ。

がちやり、とドアが開きアキラはふり向いた。

入ってきたのはキヨシとケイスケである。

ちら、とアキラの顔に嫌悪に似た表情が浮かんだ。が、すぐそれを押し殺しマホガニーのテーブルの向こうにまわり椅子にこしかけた。

細い指を組み合わせ、じつとふたりを見つめた。

一言も口をきかないまま、そのまま数十秒がすぎた。

やがて沈黙に耐えかね、ケイスケがべらべらと喋りだした。

「あ……あの、大変なんです！　おれ、伝説のガクランを見たんですよ！」

「伝説のガクラン？」

アキラはつぶやいた。ちょっと小首をかしげ、ケイスケに続ける

よううつながす。ケイスケはこことどばかりに身を乗り出した。

「そなんすよ！　かつて伝説の番長が着ていたというガクランが、いま現れたんですよ！」

ケイスケは興奮し、唾をとばした。

アキラは少しばかり眉間に皺をよせ、かすかに顎をひいた。

はつとケイスケは身を引いた。

アキラに会うときは、かれのこの僅かなシグナルを読み取らなければならぬので、じつに気疲れする。

「それは本物なのか？」

「本物に違いないですよ、背中に金の縫いとりで”男”ってでかでかとありますね、色は血のような真紅！」

「ふむ、それで着ていたのはなんてやつだ？」

「ええと、たしか高倉ケン太とかいつたつけ……」

「なにつ、高倉？　本当に高倉と言つ苗字なのか？」

ケイスケはいきなりのアキラの興奮ぶりにびっくりした。

「へ、へい……高倉つて家から出てきたし、本人も高倉ケン太つて言つてました」

「そうか……ご苦労」

アキラはふたたび氷のような冷静さを取り戻した。
きつ、とキヨシを見る。

「キヨシ！　こいでものを食べるんじゃないと何度も言つたら判るんだ」

ケイスケの横で、ポケットからバナナを取り出し頬張っていたキヨシはあわてて皮を投げ棄てた。アキラに睨まれ、たちまち真っ赤になつてうなだれる。

アキラはやさしくキヨシに話しかけた。

「なあ、キヨシ。お前もこの千石高校の番長なんだ。おれに恥をかかせるな。頼むよ」

「う……うん。御免、兄ちゃん」

そう言つと照れたように首筋をぼりぼりと搔いた。首筋のところから、ふけがぱらぱらと飛び散り、床に落ちていく。アキラの眉間にふかい皺が刻まれる。それを見て、あわててキヨシは搔くのをやめた。

アキラはケイスケを見た。

「ケイスケ、キヨシに風呂に入るよつて言つけておいた筈だな。いつたい何日、入つていないんだ?」

「す、すいやせん~!」

ケイスケは青ざめ、震えだした。

アキラの清潔好きはいまにはじまつたことではない。それが証拠に、いまこる校長室には「ミ」ひとつ、塵ひとつ落ちてはいなかつた。すくなくとも二人が入つてくる前は。

「もういい、あとのことはおれが処理する。もう帰れ」

すっかり恐縮して、ふたりは室内を後にした。キヨシの後に続こうとするケイスケに、アキラが声をかける。

「まで、ケイスケ。その高倉ケン太といつやつ、どんなやつか徹底的に調査しろ。いいか、おれが徹底的といつたら、どんなことか判るな?」

「も……もちろんで……」

そういうながらあとずたる。

と、ケイスケの足がキヨシの投げ棄てたバナナを踏んだ。

すつてーん! と、ケイスケは派手にすつころんだ。

あ、すいません、すいませんと連発して、ケイスケはあわててバナナの皮をひろい、部屋を後にする。

アキラはまるで表情を変えなかつた。

「ずっとこけかたも古典的なやつだ……」

ふん、と鼻をならすとテーブルの上のボタンを押した。

すぐ足音が近づき、掃除用具を持った老人がドアを開けた。

「お呼びで……」

「うん、これから全校生徒に訓示をする。放送で呼びかけてくれ」

判りましたと、老人は頭を下げた。

実を語つと、この老人こそ千石高校の校長室の真の主、校長であつた。

アキラが千石高校の実権を握り、支配するようになつて校長は用務員の仕事をするだけの閑職にあいやられてしまつた。

校長が退去すると、アキラは立ち上がり廊下に出た。

廊下の床はぴかぴかに磨かれ、壁もつややかな白さを保つていて、窓ガラスには曇りひとつなく、すべてが清潔だつた。

廊下から校庭へ急ぐアキラの前に、数人の生徒がたむろしていたが、近づくアキラに気づきたちまち背筋をぴん、と伸ばし四十五度の角度で敬礼する。

それらに目もくれず、アキラは校庭へと急いだ。

校長の放送がはじまつた。

「これよりアキラ様より重要なお話しがあります。全校生徒は、校庭へ集まつてください……」

ばたばたと駆け足の足音が轟き、全校生徒が必死になつて校庭へ急ぐ。

その中をゆうゆうとアキラは歩いていった。

校庭の演壇に登つたとき、全校生徒は学年ごとにきつちりと整列し、アキラを迎える態勢になつていた。

かれの恐怖支配は学校のすべてに染み渡つていたのである。

演壇に登り、アキラは口を開いた。

マイクはないが、アキラの声は校庭のすみずみに届いていた。

「諸君！ いよいよ決戦のときが近づいたようだ。伝説のガクランと言つて聞いたことはないか？ それがあらわれたという情報がはいった。伝説のガクランを手に入れたものは最強の番長であるという称号を得ると語つ。それをわれらがにっこり敵、タツヲに渡し

てはならぬ！ 諸君、その伝説のガクランを手に入れるのだ。ガクランを所持しているのは、高倉ケン太という生徒らしい。いま、調査しているから、いずれその高倉ケン太という生徒のことは判明するだろう。いいか、もう一度言つ。伝説のガクランを万石高校のタツラに渡してはならぬ！ 以上だ」

アキラの演説を聴いて生徒たちの間にざわざわと私語がひろがつた。それを制止もせず、アキラはせっせと演壇を降り、校長室へ戻つていった。

まずは第一手。

このことはいずれ万石高校のタツラの耳に入るだろう。さて、タツラがどう出るか？

タツラ（前書き）

アキラと抗争を続けるタツラの登場！
が、かれにはある秘密があった。

万石高校と千石高校は町の南北両端に位置し、川辺に近いところにある千石高校に対し、万石高校は北の丘陵地帯に建つていて、したがつて万石高校への道は長い上り坂が続いていて、徒歩のものは結構辛いことになっている。

その坂道を、汗を搔きながら登つてゐるのはイッパチだった。太り気味の身体をえつちらおつちらやらしながら、イッパチは全身にびっしりと汗を搔いて登つていた。

やがて万石高校の校舎が見えてきた。レンガ積みの、古い塀と、どつしりとした校門が近づく。そこを通りうとするイッパチを、万石高校の制服を着た生徒たちが呼び止めた。

「おい、お前はなんだ？」

「へつ、とイッパチは小腰をかがめた。

「あたしですか？　へい、あたしはイッパチと申しやして、けちな三下奴でござんす。どうかご勘弁を願いまして、ここをお通しくださるよう願いたてまつります」

ひとりの生徒が鋭い声をあげた。

「嘘付け、お前の制服は千石高校のものじゃないか。さうはスパイだな！」

イッパチは真っ青になつた。

「とんでもござこません！　あたしゃ言つてみれば情報屋みたいなもんでして、ここにタツヲさんにとつても重要な情報をお知らせしようとしただけでござこます」

「タツヲさんに？　お前、タツヲさんの知り合いか？」

「いえいえ、お顔も存じ上げませんが、タツヲさんのことば皆さんの噂でよく存じ上げておりますよ。大変な才能の持ち主だそうで、あたしゃぜひお目通り願いたいと思いまして、必死の思いで参つた

しだいで……」

喋り続けるイッパチの襟首を、生徒の一人がぐいと掴めた。

イッパチはひやあ、と悲鳴をあげた。

「怪しい奴だ。そんなに会いたければ会わせてやる。ただし、タツヲさんが、お前をどう扱つか、こっちの知つたことではないがな」
ずるずると引きずられ、イッパチは校舎の中へ入つていく。

「ふーん、おれに会いたいと……そうか。判つた。そこに残して、あとはおれに任せてくれ」

万石高校のいまは廃部になつた山岳部の部室で、タツヲは窓の外を見ながら言つた。背中を見せたままのタツヲに、イッパチを連れ込んだ生徒たちはうなずき、出て行つた。

あとにタツヲと、イッパチ一人が残された。

「おはつにお目通り願います。あたしはイッパチと申しまして、是非一度お田にかかりたつてお話しをさせていただきたく……」
「よせ」

タツヲは短く言つた。

へつ？ と、イッパチは顔をあげた。

タツヲは首を向けたまま可笑しそうに話を続けた。

「そういうた卑屈な態度は、お前が馬鹿にしている相手にだけやればいい。おれにそんな態度を続けるなら、これ以上話をすることはないぞ」

「そ、そんな、あつしはタツヲさんを馬鹿になんて……」

「だからやめる、と言つているんだ」

タツヲの声が少し強まった。

イッパチは首をすくめた。

タツヲはまた口を開いた。

「お前は相手が自分より下だと思つて、そういう卑屈な態度をとるんだろう。そういう態度をとれば相手はお前を軽く見るとこいつ間違いをおかす。お前は自分の本当の姿を悟られることもなく、腹の中

で思い切り馬鹿にすることができるからな。だが、おれには通用しないぞ」

ふつとイッパチの肩から力が抜けた。

肩をすくめ、立ち上ると部室の隅におかれているパイプ椅子に腰掛ける。

「まいったね、どうも。あんたにや、なんでもお見通しのようだ」
ポケットから棒つきのキャンティーを取り出し、口に咥えた。

タツヲは尋ねた。

「それで何の用なんだ？」

「伝説のガクラン、つて『存知ですか？』

ぴくり、とタツヲの背が動いた。

「伝説のガクラン……」

つぶやく。

「『存知のようですね。それを着た奴があらわれたんだ』
「どこでだ？」

タツヲはぐるりとふり向き、イッパチの顔を見つめた。
はじめてタツヲの顔を見て、イッパチの顔に驚きの表情が浮かんだ。

それを見て、タツヲは眉をひそめた。

「どうした、なにをそんなに驚いている？」

「あ、あんたの顔……まさか、そんな！」

「おれの顔がどうした、というんだ」

「そ、そつくりだ！ いや、あたしの見た伝説のガクランを着たやつに、あんたはそつくりなんですよ！」

「なに？ なんて名前のやつだ」

「高倉ケン太、といいます」

「なんだと！」

タツヲの声が高くなつた。

その顔が見る見る赤く染まる。眉間によつた皺を見て、イッパチは怖れの表情を浮かべた。

ぶるぶるとタツヨの両方の拳が震え、なにかを必死に押さえ込んでいるようだつた。

くくくく……。

タツヨの唇から笑い声が洩れていた。

「そうか、高倉ケン太というのか。伝説のガクランを着てるのは……そうか、判つた！ 知らせてくれてありがとうよ、イッパチ。

それ、これが礼だ」

タツヨはポケットから数枚の万札を取り出すと、ぱらりと床にまいた。イッパチはあわてて膝まづいてそれを搔き集めた。

わはははは！

タツヨは哄笑していた。

万札を集めながら、イッパチはそれをぼう然と見上げていた。

対決！（前書き）

千石高校へ乗り込むケン太。そこでアキラと直接対決をもぐるむが
……。

対決！

朝が来た。

ベッドでぱちりと目を覚ましたケン太は、ハンガーにかかつたガクランを見上げた。

ちりりりり……。

目覚まし時計が鳴り出す。

それを無意識に止め、ケン太は起き上がった。

窓からの陽射しが、ガクランの背に刺繡された”男”の文字にあたつてまぶしく反射している。

ケン太の顔にとまどつたような表情があらわれた。じつと伝説のガクランを見つめる。

昨日の自分の行動を思い返し、まるで別人だと思った。

最初がケイスケ。

そして赤星高校の校門でたむろしていた不良たち。いつものケン太なら、声をかけられただけでびくびくして、どうにかして逃げ出したいと思うはずだ。

それが、なんと自信たっぷりに相手をして、しかも撃退してのけたのである。

学生服に手を伸ばし、袖を通す。

途端にケン太の身体のすみずみまで力があふれ、自信が蘇つてきた。

おれは男だ！

おれは強い！

おれはなんでもできる！

表情が一変し、今までの氣の弱さは一瞬で拭い去っていた。

肩の線がぐつと持ち上がり、背も高くなつた気がする。いや、実際に高くなっている。

そろいのズボンに足を通す。

さらに自信がふかまつた。

さあ、今日は手はじめに千石高校へ乗り込もう！

千石高校の手前には川が流れ、ちいさな橋がかかっている。

高校のまわりにはゴミひとつ落ちてはいなかつた。校門には千石高校の制服を着た数人の生徒が背をまつすぐのばし、あたりを警戒している。

そこにケン太は堂々と乗り込んだ。

警戒中の生徒たちの顔に驚きの表情が浮かぶ。

「伝説のガクランだ……」

「なに？！」

伝説のガクラン……といいつぶやきの中、ケン太は歩を進めていく。

「あいつを倒せば……」

ひとりが決意の表情になり、こぶしを固めて殴りかかる。

それをさつとよけ、ケン太は足を突き出して相手の足にからませた。

すてーん、とおおげさに転ぶ最初の生徒の後ろから、もうひとり今度は木刀を振りかぶつてくるやつがいた。

はつ、とケン太はその木刀を素手で振り払い、相手の手首を握つた。そのままねじりあげる。

「いてててて……！」

悲鳴をあげ、相手はぽろりと木刀を取り落とした。落ちた木刀を、こんどはケン太は爪先で蹴り上げ、ぼーんと空中に浮かせるとぱつと掴んだ。

わーっ、と喚声をあげ千石高校の校舎から数十名の生徒たちが校門めざしかけてくる。

どの生徒たちの顔にも必死の形相が浮かんでいた。

ケン太は木刀を片手にその中へと飛び込んでいく。

ばしつ！

ぱしつ！

ケン太の木刀が揮われるたび、ぐえつ、とかぎやつ、とかいう悲鳴があがつた。

たちまちあたりは戦意をうしなつた生徒たちであふれた。
ひゅんつ！

風を切る音がして、なにかがケン太の木刀にまきついた。はつ、とそれを見たケン太はぎりり……と木刀を握る手に力を込める。

巻きついたのは自転車のチエーンであった。

チエーンを飛ばしてよこしたのは、女子生徒である。

彼女の身につけてているのは一応セーラー服であるうが、そつとう改造成している。

胸元がぱっくりはだけ、胸の谷間がふかく覗いている。ウエストがぱつちり見えるほど短く、セーラー服というより水着のブラにセーラー服のリボンをつけただけ、といえる。

スカートは足もとまで達するロングであるが、脇にふかいスリットがあり、チャイナドレスの下半分だけのようだ。

「覚悟しな！」

女子生徒は真っ赤なルージュをひいた唇でにやりと笑い、叫んだ。木刀を封じたチエーンはながく、彼女の手には垂れ下がった端がぶらぶら揺れていた。それをぐるんぐるん振り回し、じりじりと近づいていく。

ケン太に向け、チエーンを飛ばした瞬間、ケン太は一気に女子生徒めがけダッシュした。

予想もつかないケン太の動きに、女子生徒は一瞬立ち止まった。

「いやあ！」

彼女の胸元に飛び込んだケン太は、ぐつと頭を下げ背負い投げをくらわした。

「きやあ！」

このときばかりは彼女は女らしい悲鳴をあげ、ずっとでんどうとひ

つくり返つた。

「痛　　い！」

腰を打つたのか、立ち上がりがないでいる。

ケン太は急ぎ足になつて校舎の中へと踏み込んだ。

校舎の中は暗い。

ケン太は脇間のあかりになれた目が、あたらしい環境に適応するまでちよつと立ち止まつた。

やがてじょじょに目が慣れてきた。

廊下の向こうに、ひとりの巨漢が立ちはだかつている。

キヨシであった。

あいかわらずポケットに食べ物を詰め込み、それを口に運んでいる。

口に運んでいるのは焼き芋だった。

もぐもぐと咀嚼し、うつろな目でケン太を見ていた。

やがて食べ終わつたのか、ごくんと喉をならして呑みこみようやく口を開いた。

「お、おまえケン太つてやつか？」

「そうだよ」

「おまえの着ているのは伝説のガクランつてやつか？」

「そうだ」

「おらキヨシつていうんだ。アキラ兄ちゃんが、そのガクラン欲しいでいうからよ、お、おまえ、それを脱いでおらにくれねえか？」

そう言うとにいつ、と笑う。

前歯が数本抜けた口があらわになる。

ケン太はゆつくりと首をふつた。

キヨシは肩をすくめた。

「そうか、やっぱ駄目か……そんじゃー！」

いきなり頭を下げ、ケン太向かつて突進してきた。

ケン太はさつとキヨシの突進を避けた。

「こつーん、とこう派手な音を立て、キヨシは壁に頭をぶつけてい

た。

キヨシは平氣な顔でふりむいた。

額が赤くなつてゐる。

手を挙げ、ちょっとそれに触ると、その手を口ににもつていきべろりと舌先で舐めあげた。唾をつけた手を額にやり、「じじ」しようとする。

おそろしいほどの石頭であつた。

だつ、とふたたび突進する。

こんどもケン太はそれを体をかわしてよけた。

が、キヨシはそれを予想していたのか、かわされた寸前さつと頭をふつた。

どん、とケン太の胸にキヨシの頭頂部がめりこんだ。

ぐつ、とケン太の息がつまる。

げひひひ……。

妙な笑い声をあげ、キヨシは両手をひろげ掴みかかつてきた。

さきほどのダメージで動きがとまつたケン太は、あつけないほどキヨシに抱きかかえられる格好になる。

めりめりめり……。

ケン太の背骨が悲鳴をあげた。

キヨシは笑いながらケン太を締め上げた。

ケン太あやうし！

ぐいっ、ぐいっともがいたケン太はなんとか片手をキヨシの抱擁から抜け出させることに成功した。

その手をキヨシの顔にもつていく。

鼻をつまみあげる。

ぐあ　！

さすがに石頭のキヨシも、これには参つたようだ。

鼻の頭はどんな格闘家でも鍛えることはできない急所といわれている。

おもわずキヨシの腕から力が抜ける。

さつと身を離したケン太は、ぜいぜいとあえいでいた。

くうーつ、と鼻の頭をこすつていたキヨシは、こんどは怒りの表情をあらわにしてふり向いた。

ふたたび頭を下げ、頭突きの態勢になつて突進した。

ケン太はそれを避ける戦術をとることなく、今回はキヨシの走る方向に自分も走り出した。

奇妙な追いかけっこがはじまつた。

どすどすという足音を立て、ケン太を追いかけるキヨシ。そのさきを短距離ランナーのように走り去るケン太。

なんとか追いつこうと、必死になるキヨシ。

ケン太は校舎内の廊下を右に走り、左に曲がりキヨシを引っ張りまわした。

階段を登り下がり、駆け抜けるふたり。

やがてキヨシの足もどがふらついてきた。

「待て……おめえ、卑怯だぞ……おらと、勝負しろ……」

とうとうキヨシの足がとまつた。

ペたりと床に座り込み、肩で息をしていた。

いっぽう、ケン太はそれを見ておおきく深呼吸をくりかえした。やがてケン太の呼吸が平靜になる。

「まだやるかい？」

そう声をかけると、キヨシは情けない顔になつて首をふつた。

「それじゃ」

片手をふつてケン太は歩き出した。

ふり返ると、キヨシは床に座り込んだまま手をふつていた。人の良い笑顔を浮かべていた。

廊下の先にいる人影を見て、ケン太は足を速めた。

「待て！」

声をかけると、相手はぎくつと立ち止まつた。

ふり向く。

ケイスケであった。

「や、やあ……」

気弱げな笑みを浮かべた。

この顔こそが、ケイスケの本質のようだった。つっぱって見せたのは虚勢であろう。

「ケイスケ、つて言つたよね、あんた」「は、はい……」

おどおどと手を前にしてひねくりかえし、目をしばしばさせる。

「この高校を仕切つているのはだれだい？　きみか？」

「ど、どんでもない！　アキラさんつていうお方で」

「ふーん、そうか。それじゃそのアキラさんつて人のところへ、ぼくを案内してくれないか？」

「あつしが？」

ケン太はじつとケイスケを見つめた。

ケイスケはぼけっとそのままを見つめ返し、やがてぶるっと首をふつた。

「わ、わかりました……」」

先に立つて歩き出す。

ケン太はその後を追つた。

やがてケイスケは千石高校の校長室の前で立ち止まつた。

「こちらで……」

「校長室じゃないか」

「へえ、アキラさんはここにいつもいらっしゃるんですねよ」

「そうか、とつぶやきケン太はドアをノックした。

どうぞ、という返事にドアを開き中へと入る。

窓際にマホガニーのテーブルを置き、その向いの皮製の椅子にアキラが座つていた。

逆光になつていて、その表情は読めない。

ケン太は目をすがめた。

「あんたがこの高校を仕切つていると聞いた。ぼくは高倉ケン太と

いつて、話しをしに来たんだ

「話し?」

「そりゃ、こんな無駄な争いやめにしないか?」

「無駄?」

アキラの返事はつねに短い。

ケン太はしだいにいらいらしてきた。

「そりゃ、無駄さ。こんな争いをして一体何になるんだ。高校同士の繩張り争いなんて馬鹿らしいと思わないか?」

「なぜ無駄なんだね」

ようやくアキラが一言以上を口にする。

それに勢いを得て、ケン太は言葉を重ねた。

「だつてそりゃないか。ぼくだつて、あんただつて学生だろ? といつことは、親に学費を出してもらつて、通つているといつことじやないか。こんなことする前に、ぼくたちにはやることがあるんじゃないか?」

「なにを?」

「勉強だよ。社会に出てなら繩張り争いだのなんだの、勝手にやればいいけど、ほかの生徒をまきこむのはやめてくれ!」

くすくすとアキラが笑い声をあげた。

ケン太は唇を噛みしめた。

ゆらり、とアキラが椅子から立ち上がる。テーブルをまわり、ケン太の目の前にやってきた。じつとケン太の顔をながめ、ゆっくりとうなずいた。

「なるほど、お前がケン太か……」

両手を後ろに組み、背中をのばして言葉を続けた。

「お前はおれたちが親に金を出してもらつて学生になつていてと言つたが、あいにくそれは間違いだ。おれたちはびた一文たりとも、親に金をだしてはもらつていない。第一、おれたちは学生ですらないのだ!」

ケン太はぽかんと口を開いた。

それを面白そうにながめ、アキラはうなずいた。

「そうさ、驚いたようだな。それにもうひとつ、ここは高校ではない。かつては千石高校という学校だったが、いまでは廃校になつて建物だけが残つてゐるのだ。それをおれが買い取り、支配しているのだ。万石高校もおなじさ。おれたちはただの建物に通つ、学生服を着た社会人というわけだ」

あまりの衝撃に、ケン太はふらりとなつてあとずさつた。

「つまり、おれたちは立派な社会人なんだよ。ここは言つてみれば千石高校という名の会社さ！ お前の言つていることはすべて間違いだ！」

アキラは机のボタンを押した。

それに応じて、ひとりの老人が姿をあらわした。

「これが千石高校のもと校長だ。千石高校が廃校になつて、失職したのをおれが拾つてやつて雑用をこなしてもらつてゐる。どうだね、これでも文句があるのか？」

ケン太ははつ、と顔をあげた。

「そ、それじゃ赤星高校は？ あそこであんたらの生徒……いや、同志……いや、つまり手下が騒いで……」

「それはおれの知つたことではない。学生服を着た社会人が、どこでなにをしようとそれは法律の範囲何のことだろ。喧嘩？ 勝手にやらせればいいじゃないか。ほかの一般人には迷惑をかけていいんだから。それに赤星高校といつたつて、おれの調べではたつたふたりの在校生がいるだけだと聞いてゐる。そのふたりには迷惑をかけていないのだから、お前に文句をつけられる筋合はない」

ケン太は足もとが崩壊する想いだつた。

呆然となつてゐるケン太に、アキラはささやいた。

「要するにお前は自分の勝手な正義感で余計なことをした、というわけさ」

ケン太はつぶやいた。

勝手な正義感……。

アキラの言葉はケン太にとどめを刺した。

思わず座り込むケン太に、アキラは声をかけた。

「さあ、判つたなら家に帰れ。お前は正真正銘、ただの学生なんだからお前の言つたとおり学生の本分を守るべきだ。つまり勉強さ。社会人になつたら、また会おうや」

ぽかん、とした顔になつて見上げるケン太にアキラはうなずいた。つかつかとデスクに近づくと、その引き出しから一組の学生服を取り出す。

赤星高校の制服だつた。

「そんな妙な学生服は脱げ。そしてこちらの、まともな制服に着替えるんだ」

言われたままにケン太は伝説のガクランを脱ぎはじめた。上着を脱ぐ。

ばさり、とリーゼントの髪型が乱れ、前髪がかかつってきた。ズボンを脱いだ。

きれいに染め上がつたケン太の金髪が見る見る黒髪になつていく。アキラに渡された赤星高校の制服に袖を通し、ズボンをはいた。ケン太は伝説のガクランを身につける前の姿に戻つていた。無言でケン太は千石高校の校長室を後にしていった。それを悲しげな顔でもと校長が見送つっていた。

流転（前書き）

ケン太から伝説のガクランを奪ったアキラ。だが伝説のガクランには秘密があった。

くくくくく……！

こみ上げる笑いに、アキラは肩を震わせていた。
窓から覗くと、ケン太がうなだれ校門を後にしていく。その足取りは重く、辛そうであった。

あはははは！

アキラは天井を見上げ、笑った。

ぽん、と手を叩くと陽気にそのあたりを跳ね回った。

「やつたぞ、ついに伝説のガクランを手に入れた！」

目をきらめかせ、脱ぎ捨てられた伝説のガクランを拾い、陽射しにかざした。

背中の金の縫い取りがまぶしい。

「伝説のガクラン……最強の番長……」

つぶやきながら自分の制服を脱ぎはじめる。

ガクランに袖を通す。

さすがのアキラもその時は興奮で手が震えた。

そこに伝説のガクランを身につけたアキラの姿があった。姿見に自分の勇姿を映し、かれはほくほく顔になっていた。その顔を見たら、ケイスケもキヨシも仰天するに違いない。ついぞ見せたことのない表情を、アキラは浮かべていた。

「ケイスケにやつを調べさせておいて役立つたな……」

満足げにつぶやいた。

ケイスケはアキラに命じられたまま、徹底的にケン太のことを調べ上げていた。中学の同級生はあるか、小学校、幼稚園と調べ上げ、ケン太の性格をアキラはすみずみまで把握していた。正直、アキラはケイスケがこれほどまでやるとは思ってはいなかつた。

正義感というのがキイになる。

アキラはそう確信した。

そこを突けばケン太は攻略できると思つたからケン太がここに乗り込んできたという報せを受けたとき、そのままさしたる罠もかげず待ち構えていたのである。

配下のものに手を出させないことも考えたが、それではケン太にこちらの意図を見抜かれる危険があつたのであえてそのままにしておいた。それも見越してのことだ。

ぐるりとふり返り、壁にかかつた地図を見上げる。

さてこれからタツヲとの決戦だが……。

作戦を考え始めたアキラだが、ふいにその表情が曇つた。

なんだ、この気持ちは？

急にこみ上げた感情に、アキラはとまどつていた。

不快感がアキラを苦しめる。

やがてそれが罪悪感であることに気づき、アキラは罵り声をあげた。

おれに罪悪感？

馬鹿な！

だがそれには間違によつはなかつた。急に自分の行いについて反省がはじまる。この高校を手に入れるためやつたことのあれこれ、卑怯な手で校長を陥れた自分の過ちについて真つ暗な罪悪感が迫る。

「いけない……こんなことはやめにしなくては……赤星学園から撤退して……」

つぶやき驚愕の表情になる。

「馬鹿な！ せっかくここまで来たというのに……くそつー！」「このガクランのせいだ！ こいつがおれに馬鹿なことを言わせているー！」

ぶるぶると全身を震わせ、アキラは伝説のガクランを脱ぎはじめた。

ようやくもとの自分の制服に着替え終わり、嫌悪の表情で脱ぎ捨てたガクランを見つめる。

「確かにこれは伝説のガクランだ……」こいつを着ると、正義感に支

配される。やつは ケン太は もともと正義感に溢れた奴だつた。だから平氣だつたんだ……！」

「そお！ と、罵り声をあげたアキラは、床にひろげたガクランを蹴り飛ばした。ガクランはふわりと宙を舞い、開け放したままのドアへ飛んでいった。

そこへキヨシが顔を出した。

「ふあつ！」

いきなり頭からガクランが降つてきて、キヨシが叫び声をあげた。滅茶苦茶に手を振り回し、頭にかぶさつたガクランを掴む。それを手にとり、不思議そうな顔になつた。

「兄ちゃん、これなんのや？」

「知らん！」

そっぽを向くアキラに、キヨシは妙な顔になつた。やがて理解をしたのか、にっこりと笑つた。

「もしかして、伝説のガクランなのかや？ すげえな、兄ちゃん。あのケン太を倒したんだ！」

「ああ」

アキラは不機嫌にこたえた。

キヨシは身をかがめ、ズボンも拾つた。

「なあ、兄ちゃん。せつかく奪つたんだから着て見せておくれよ！ おら、兄ちゃんがこれを着たところを見たい！」

「冗談じゃない」

え、とキヨシは眉をあげた。

あいかわらずアキラは不機嫌そうにそっぽを向いている。

「おれはそれを着るつもりはない。とにかく目障りだ、どこかへ持つていけ！」

キヨシはさつぱりアキラの意図が判らず、ぼんやりと立ちすくんでいた。が、その顔に狡猾そうな笑みが浮かぶ。

「そつかや？ んじや、おらがどこかへやつてしまつだよ」

そう言いながら小躍りするようにガクランをかかえ、出て行つた。

アキラはふり返り、キヨシになにか言いかけたがやめにした。キヨシがそのガクランを身につけるか、心配だったのだ。が、キヨシの体格では袖を通すことも出来まいと思い直した。

アキラの心配は当たつていた。

キヨシは自分がガクランを着るつもりだつたのである。

しかしケン太とキヨシでは体格の差がありすぎる。

キヨシは体重百キロ以上、身長は百八十はある。対してケン太のほうは、身長はようやく百七十あるかないかだし、体重も五十の前半くらいしかない。しかしそんなことはキヨシの頭には片鱗も浮かぶことはなかつた。ただ、伝説のガクランを着た、自分の姿を想像してうつとりとなつていた。

鼻歌を歌いながらキヨシは自分の住まいに近づいていった。

木造モルタル築数十年という、いまにも崩壊しそうな古アパートである。

その階段をぎしぎし軋ませ、キヨシは一階へと登つていった。がらり、とドアを開け室内に入る。

ふーん、という甘つたるい腐敗臭があたりに漂つ。部屋のあちこちにゴミが散乱し、台所には食べかけの食器が山となつていた。典型的な男所帯である。

「さてと……」

楽しそうな顔になつて、キヨシは自分の制服を脱ぎはじめた。でれんとした、しまりのない肥満体があらわになる。ガクランを日にかざす。

金の縫い取りがきらめいた。

うふうふうふ……と気持ちの悪い笑い声をあげ、キヨシはガクランの袖に腕を通した。

なんと！

伝説のガクランはキヨシの腕を通したのである。しかしそれでも相当苦しそうだ。

鼻息をあらげ、キヨシは伝説のガクランを着始めた。

ぐいっ、ぐいっと力任せに袖を通す。ガクランの生地は、キヨシの肉ではちきれんばかりだ。

それでもなんとかキヨシはガクランの上着を身につけた。さすがにボタンを前で合わせるとは諦める。

次はズボンだ。

これも力をこめて足を突っ込む。

とても入りそうになかったが、それでもズボンはキヨシの肉体を受け入れた。

すると見よ！

伝説のガクランの服地がどんどん伸びて、キヨシの体格に合わせて変化するではないか！

数分後、すっかりガクランはキヨシの体格に合わせていた。ふんふんと鼻歌を歌いながら、キヨシは自分のものになったガクランを見やつた。

と、その表情が一変した。

背筋がまっすぐになり、その目はすつきりと澄み渡る。ぐるりと自分の部屋を見まわした。

かれは唇を噛みしめた。

校長室でなにか考え込んでいたアキラだが、やがてぽんと自分の膝を叩くと立ち上がった。

「ケイスケ！ そこにいるのか？」

へいっ、と返事があってケイスケが入ってきた。どうやら校長室の近くで控えていたらしい。

「ケイスケ。キヨシが心配だ。おまえ、見に行け

「キヨシさんが？」

「そうだ。馬鹿なことをする前に、早く行くんだ」
へいっ、とケイスケは飛び出した。

夕暮れの中、なにが心配なんだかとケイスケはキヨシのアパートを指していた。

通いなれた路地をたどるケイスケに、声をかけたやつがいる。

「ケイスケの旦那……」「

ケイスケはぎくりと立ち止った。

声をかけたのはイッパチだった。

「な、なんだイッパチじゃないか……」「

目を合わせようとしないケイスケの顔を覗き込むようにして、イッパチは笑顔を見せた。

「お約束のもの、受け取りにまいりました」「

「約束?」

ケイスケは空とぼける。

「いけませんや、ケイスケさんー お金戴ける約束じゃないですか?」

「そうだつたかな?」

側を通り抜けようとするのを、イッパチは先回りした。

「とぼけちゃいけません。あたしがケイスケさんのために、ケン太のことを調べ上げたんじゃござんせんか。わ、お約束の褒美、戴きましょーか?」

「こまは持ち合わせないんだ」「

「ちつちつちつ!」

イッパチは指を一本たて、目の前でふつてみせた。

「アキラさんにこ褒美、戴いたんでしょう? ちやあんと、知つておりますよ」

ケイスケはこんどはイッパチを無視して歩き出しつとした。あくまで支払いを拒否するつもりだ。

そのケイスケにイッパチが声を張り上げた。

「よろしいんですね! それじゃアキラさんに直接お金戴きこあがつても?」

「おこ、よせよー。」「

「ケイスケさんが自分で調べず、あたしにケン太の調査をお命じになつたと知つたらアキラさんは……」

「わかつた、わかつたよ！」

しかたなくケイスケは懐から金を出し、イッパチに渡した。イッパチはほん、と額をたたき笑顔になつた。

「毎度有難うござります！ これからもござ贔屓に！」

くるり、と背を向けひょいひょいと軽い足取りで去つていく。

ケイスケはほつとため息をついた。

かれの言つたとおり、ケイスケはケン太のことをイッパチに調査させていたのである。かれだけでは、そんな調査は出来なかつたからである。

氣を取り直し、歩き出す。

やがて見慣れた景色になり、いつものアパートの階段をとんとんと登つていいく。

ドアの前に立つと、なかからふーつ、ふーつといつキヨシのつめき声が聞こえてくる。

ケイスケはびっくりした。

「キヨシさん！ どうしたんですか？」

声をかけるが返事はなかつた。

思い切つてドアを開けた。

入つたすぐがトイレになつていて。

そのトイレのドアが開き、キヨシの巨大な尻が突き出していた。

キヨシの尻は伝説のガクランのズボンに包まれている。

「キヨシさん、伝説のガクランを着たんですか？」

ふーつ、ふーつというキヨシの声。

おそるおそる、ケイスケは首を伸ばしてトイレを覗き込んだ。

！

なんとキヨシはトイレの掃除をしていたのである。

巨体を苦しそうにかがめ、便器にしゃがみこんでせつせと雑巾で磨いている。便器はすでにぴかぴかになつていた。

その作業のため、ふーつ、ふーつといつひぬき瓶をあげていった
しい。

「キヨシさん？」

よつやくキヨシは立ち上がった。

真っ赤なガクランを着ている。あの伝説のガクランだ。いまは完全にキヨシの体格にぴったりとなり、不自然なところはどこにもなかつた。

「ああ、ケイスケか……何のようだ？」

「何の用だつて、あのアキラさんがキヨシさんの様子を見に行かつて……」

そう言いながらケイスケは口もつた。

あらためてキヨシのアパートの室内に目をやる。

「キヨシさん、部屋を掃除したんですか？」

うん、とキヨシはうなずいた。

かれのアパートの部屋は変貌していた。

足の踏み場もなくゴミや、食い散らかしの食器で散乱していた部屋はいまは綺麗に片付き、いまは床が見えていた。ガラス窓は一枚残らず磨き上げられ、本や雑誌の類はきちんと分類され、本棚に収容されている。薄汚れていたソファはいまはブラシがかけられ、きれいなカバーがかけられていた。

「どうだ、いままではここは人の住むところじゃなかつたからな。思い切つて掃除したんだ。ああ、掃除をするつて気持ち良いなあ！」

「キヨシさん……」

ケイスケはぼう然となつていた。

キヨシのどこかが変わつていて。

「あ、あの、キヨシさん……、歯医者行つたんすか？」

「ん？」

キヨシはケイスケを見てにいつ、と笑つた。

なんと欠けていた前歯がいまはきれいに生えそろつていてる。

キヨシは舌先で前歯をさぐつた。

「あ、そういうえば妙な具合だと思つていたんだけど、歯があるぞー。」

「あんた、本当にキヨシさんですか？」

ケイスケは気味悪そうにキヨシの巨体を見上げた。

言葉遣いも変わっていた。

いつもの、もつりうとした言葉遣いは影をひそめ、はきはきとした明朗な物言いになつていて。

ケイスケはキヨシの外見も変化していくことに気づいた。

類の線がややシャープになり、腹がへつこんでいる。体のあちこちにあつた吹き出物のたぐいも、いまは綺麗に治つていた。

そのことをケイスケが言うと、キヨシはちょっとと考え込んだ。

「そうかな？ 自分では変わつていてることに気づかないが……」

「そのガクランのせいだ！」

ケイスケは大声をあげた。

「ガクラン？」

キヨシは自分の着ている伝説のガクランを見つめた。

ケイスケはゆるゆると首をふった。

「あのケン太も、ガクランを着る前はとても喧嘩なんか出来そうもない坊つちゃんだつたけど、着たとたん別人になつた。そしてアキラさんの前でそれを脱いだら……そうだ、それが伝説のガクランのちからなんだ」

キヨシの表情が変化した。

なにかを決意したような表情になる。

「ケイスケ！」

「は、はいっ！」

「お前、ケン太の家を知つているな？」

「え、ええ、そりや……」

「案内しろ」

「えつ？」

「おれをそこへ連れて行け！」

ケイスケは目をぱちぱちと瞬かせた。

夜。ケン太の自宅。

ケン太は暗闇の中、天井を見上げていた。
かれの勉強部屋である。

男の子の部屋にしては綺麗に片付いている。

ベッドに仰向けになり、明かりもつけずケン太はじつと天井を見
上げ身動きひとつせずにいた。

想いはつい、伝説のガクランにもどる。
伝説のガクラン……。

あれを着たときの昂揚感、そしておしよせる自信。身につけていた間は、自分が自分でなくなるような、そんな感覚にあった。

ケン太は唇を噛んだ。

あれを渡すんじゃなかつた！

後悔が真つ 暗な感情になつて押しよせる。
こん……。

「？」

こつん……。

なんだろう？

ケン太はベッドの上に起き上がつた。

かつつ！

こんどは勢いよく、小石のよくなものがガラス戸に当たる。
がらつ！

ケン太はガラス戸を開いた。

ひゅつ！

もうひとつ、小石が部屋の中に飛び込んでくる。

ころころころ、と小石は部屋の床に落ち、ころがつた。たまらず
ケン太は声をかけた。

「だれ？」

「起きたみたいですぜ」

下の方向から声がする。

窓から身を乗り出し、見下ろすとケイスケとキヨシが高倉家の庭に立っていた。

「あんたたち……」

ケン太は目を見開いた。

ケイスケの隣に立つキヨシは、なんとあの伝説のガクランを着ている。キヨシはケン太を認め、手をふった。おいで、おいでをしていた。

「おおい……出て来いよう……」

あたりを憚つてゐるのか、キヨシは手をメガホンにして小声で叫んだ。

ケン太はうなずいた。

何のようか判らないが、とりあえずふたりには敵意は見られなかつたからである。

そろりと足音を忍ばせ、二階から一階へ階段を降り、玄関へ。サンダルを履いて外へ出た。

季節は春だが、まだ気温は冬の名残を引きずつてゐた。吐く息が白い。

「やあ！」

キヨシがにやつと笑つて前に立つた。

ケン太はキヨシの姿を見て口を開いた。

「伝説のガクラン、着ているね」

キヨシはうなずいた。

「そのことで来たんだ」

ケン太は眉をひそめた。

一度会つただけだが、それでもキヨシの変貌には気づいたのである。背後にいるケイスケは、以前キヨシが着ていたぼろぼろのガクランを手に持つていた。

キヨシはいきなり伝説のガクランを脱ぎだした。

「これはお前に返すべきだ。そう思つて來たんだ。おれも着たけど、

資格がないのがわかつた。このガクランの能力を最大限引き出すのは、やつぱりケン太お前だよ」

ケイスケから自分のガクランを受け取り、手早くもとのガクランに着替えると、伝説のガクランをたたみ、ケン太に差し出した。

「さあ、受け取ってくれ」

ケン太は呆然となつてガクランを受け取つた。じつとキヨシの顔を見つめる。

「いいのか？」

「うん、とキヨシはうなずいた。

「じゃあな！」

にこにことあいかわらず人の良い笑みを浮かべつつ、キヨシは手をふりながら去つていつた。ケイスケがあわててその後を追う。ケン太はいつまでもそれを見送つていた。かれの胸に、ある疑問が湧き上がつていた。いつたい伝説のガクランとはなんだ？

高倉家の正門前、電柱の陰に隠れつつ、イッパチはたたずむケン太を見守つていた。

そしてつぶやく。

「伝説のガクランは持ち主に戻つた、かにやりと笑う。

「面白くなつてきやがつたぜ！」

ガクランの秘密（前書き）

伝説のガクランの由来があきらかに！　いつたい伝説のガクランとはなにか？

ガクランの秘密

朝食がすむと、ケン太は父親のブン太に切り出した。

「父さん、聞きたいことがある」

「なんだ、あらたまつて」

「伝説のガクランのことだ。父さん、いつたいじりやつてあれを手に入れたんだ？」

ブン太は腕を組んだ。

ケン太はまだ伝説のガクランに袖を通していない。髪の毛も黒く、もとのままだ。父親からガクランについて詳しい話を聞くまでは、身につける気にならなかつた。

ブン太は腕組みを解くと、口を開いた。

母親の純子が側に来て、そつとふたりの前にお茶をいれた湯飲みをおく。

「やはり話しておいたほうがいいだらうな」

父親は話しだした。

ブン太が高校一年生、つまりいまのケン太と同じ年頃。

赤星高校は荒れていた。

いわゆる校内暴力、というやつである。

番長やスケ番が隠然たる勢力をもち、普通の善良な生徒を恐怖で支配していた。いや、生徒ばかりではなく教師も、だつた。

教室や廊下では、不良たちが公然と喫煙、飲酒をあたりはばかりことなく行い、女子生徒や女性教師らに性的ないやがらせ……いや、レイプまで行つていたのである。

赤星高校の荒れようは、外からでもわかるくらいだつた。校庭にはゴミが散乱し、暴走族がバイクや車を勝手に乗り回す。塀や壁にはペンキで落書きがところせましと塗られている。そのひどせに、校舎の空はいつも暗雲が垂れ込めているようだつた。

高校をすこし離れた丘の上から、ひとりの老人がじつと観察していた。ひょろりとした瘦身で、手に何かの包みを持っている。「なるほど、確かにひどい。これでは一ノコーコークのスラム街となじだ……」

老人の瞳はなにかを探しているようだつた。

と、老人がなにかに注目した。

学校の裏手、ひと気のない体育用具置き場の側で、ひとりの男子生徒が数人のあきらかに不良とわかる生徒たちに取り囲まれている。「だからおれの欲しいのはこんな甘つたるい炭酸飲料じゃなくて、ほかのやつだつて！」

「おれのも違うじゃねえか。おれは別冊の月刊誌を買つて来いと言つたんだ。お前の買つてきたのは週刊誌じゃねえか！」

買い物の袋を手に提げ、ひとりの男子生徒が身を固くしてじつと不良たちの暴言に耐えている。

「それに煙草はどうした？ 酒も買つて来いと言つた筈だぞ」「で、でも……！」

男子生徒は顔を上げた。

今のケン太そつくりの顔。

ブン太だつた。

お？ と不良たちは面白そうな顔つきをして見せた。こいつ、反抗する気か？

「煙草や酒は学生服じゃ買えないから……」

「自販機があるじゃねえか！ まつたくつかえねえな、このパシリ」「でもあんたの指定した銘柄、自販機じや売つてないよ！」

「あんた、だと？ おめえ、誰にもの言つていい？」

ブン太は身をふるわせた。

不良たちはじりつ、と距離を縮めた。

「こりゃあ、罰が必要だな……」

「うん、そうだ。罰が必要だ」

ブン太の顔に怯えが浮かんだ。

「罰はなににしようか?」

「そうだなあ……」

不良たちの目にサディスティックなきりめきが浮かぶ。獲物をいたぶる残忍な表情だ。

「よし、スクワットを百回だ!」

「そうだ、スクワットだ!」

「さあ、始めるぞ、いーち……」

ブン太はスクワットを始めた。両手を後頭部にあて、ゆっくりと膝をまげる。そしてまた身体を伸ばす。

「ふたーつ……」

「みつつ……」

不良たちはわざとゆっくり数をかぞえている。これはきつい。スクワットできついのは、ゆっくりな動きである。

「とお……じゅういち……じゅうに……」

ブン太の額に汗がふきだした。顔はすでに真っ赤になつている。

「にじゅうに……どうした? 身体がふらふらしてるぞ!」

「そうだ、真面目にやれ!」

普通の体力の持ち主で、スクワットを真剣に十回以上やつてみればその苦しさがわかる。ブン太はすでに体力の限界をこえていた。

「さんじゅう……」

ついに倒れこんだ。

わつ、と不良たちが喚声をあげた。

「こりや罰が追加だな」

「そうだ、あと百回追加だ。三十までやつたから、百七十やるんだぞ!」

ブン太は目に一杯涙をためていた。

ようやく不良たちから解放されたとき、ブン太はふらふらになつていた。腿の筋肉はぱんぱんに腫れあがり、背中の筋肉も傷めている。這うように校舎をあとにし、帰宅路をとぼとぼと歩いていた。

「待ちなさい」

老人の声がして、ブン太は立ち止まつた。

夕暮れの中、ひとりの老人がたたずんでいる。夕日をバックに真つ黒な影になり、表情は読めない。

「なんですか？」

ブン太は目を細めた。老人はうなずいた。

「さつきから見ておつたが、お前さんそつとつやられていたのう…

…

ブン太の顔が赤くなつた。夕日がまともに当たつてゐるせいではなかつた。

くるりと背をむけ歩き出す。

「待ちなさい！」

もう一度老人は呼び止めた。さきほどより、強い調子だつた。

「ぼくに何の用なんだ！」

ブン太は怒つたような声になつた。

「きみにいいものあげようと思つてな……」れをあげよう

老人は手に提げた風呂敷包みを差し出した。

ブン太は妙な表情になつた。

老人は言葉を重ねた。

「もしこれがきみを選べば いや選ぶにきまつておるが きみは今日から生まれ変わることが出来る！ さあ、受け取れ」

そう言うと老人はじつと生徒を見つめた。その目のひかりは異様だつた。常人の目のひかりではない。

とはいへ、狂人とも思えない。

強い意志と、決意が秘められた目のひかりだつた。

その目のひかりに、ブン太はついふらふらと近づき、手をのばした。

風呂敷包みが渡された。

老人は莞爾とほほ笑んだ。

「それではお別れじゃ！ 幸運を！」

そう言つとさつと歩き出した。

ブン太はぼんやりと立つてゐるだけだつた。

名前を聞くのを忘れた、と思つた。

「それが伝説のガクランだつた……」

懐かしそうな目になつて父親は話をつづけた。

翌日、伝説のガクランをまとつたブン太に、高校は騒然となつた。

「だれだ、ありや？」

「高倉の奴らしいぞ……」

「ブン太が　まさか！」

校門でたむろしていた、昨日いたぶつていた不良たちがブン太を取り巻いた。じろじろとガクランを眺め口を開いた。
「いよ、高倉くん……ずいぶんとめかしこんでいるじゃねえか！」
へらへらとひとりの不良が近づき、ブン太の金髪のリーゼントに触ろうと手をのばした。

ブン太はさつとその手を振り払つた。

不良の目にかゝつ、と怒りが燃え上がつた。

「野郎！　すかしやがつて……」

殴りかかるその手を、ブン太がねじりあげる。

「痛てててて……！」

悲鳴をあげる。ブン太はかれの手首を掴みながらゆうゆうと歩き出した。

「こいつ！」

ひとりが殴りかかるのに、手首を掴んだ不良を押してぶつける。わつ、とふたりはもつれあつて転んだ。

立ち上がろうとするところにブン太の爪先が襲いかかつた。
ぼく！　とブン太の爪先がひとりの腹にめりこむ。

ぐえええ……！

鳩尾をまともにキックされ、その不良は身体を折り曲げて苦しだ。胃液が口もとから吐き出され、酸っぱい匂いが漂う。

ブン太の背後から襲いかかるのを、さつと身を翻し平手で頬を張り倒す。

強烈なビンタに、相手はきりきりと身を廻して倒れこんだ。顔を上げたその顔に、深甚な恐怖が浮かんでいた。

「まだやるか？」

ブン太は叫び、ひとりひとりじつと見つめていく。ブン太に見つめられ、全員目をそらした。

戦意はすでになかった。

ブン太は後を見る事もなく、さつとその場を立ち去った。

ブン太の目指したのは校長室だった。

「失礼します」

ドアをノックし、返事も待たずドアを開けた。

「きみ？」

デスクの向こうで校長が驚いて立ち上がった。やがてケン太が会うことになる赤星高校校長の若いころである。ブン太はつかつかと校長に近づいた。

「校長、お願いがあります！」

驚きのあまり、校長は口をぱくぱくさせるだけだった。

「この赤星高校はひどい状態です。ぼくはそれに怒りを感じました。それで、この際高校の大掃除をしようと思うのです。つきましては、ぼくがなにをしようと黙認するという許可を頂きたくお願ひにあがつたのです。

校長、この高校をまともな状態にするチャンスなんです！」

一気にそこまで話し終り、校長の反応を見る。

校長は奇妙な表情になっていた。

その目がブン太を通り越し、室内の別の方向へむけられている。なんだろうとブン太は背後をふり返った。

校長室の接客用のソファに、ひとりの少女がきちんと膝に手をやり、座っていた。細面の、大人しそうな美少女である。年令はブン

太とおなじくらいか。しかし赤星高校の制服ではなく、べつの高校のブレザーを着ていて。

「お客様でしたか」

「その……転校生なんだ」

「そうでしたか。それは失礼しました。ええと、きみ……ようこそ赤星高校へ」

かるく会釈し、ブン太は笑顔を見せた。

少女ははつ、とした表情になつた。

ブン太が笑顔になつたとき、その口もとの歯がきらりと光つて見えたのである。

少女と目が合つて、ブン太はワインクをして見せた。少女は真つ赤になつた。ワインクしたブン太の瞳がきらりと煌いて見えた。

彼女こそ、ブン太の運命の相手、純子であった。

その日からブン太の活躍がはじまつた。

校長の許可をえ、ブン太は高校の大掃除をはじめた。一月もたたないうち、荒れきつっていた赤星高校は立ち直り、生徒や教師は安心して登校できるようになつたのである。この活躍で、ブン太は伝説の番長の称号を得、ブン太と純子は将来を誓い合つた。

*

父親の話しされなりに興味深かつたが、ケン太の知りたいことは教えてはくれなかつた。

結局、ガクランはどこからきたのか？

ケン太は部屋に戻り、ハンガーにかかつたままのガクランを見つめた。

ガクランがケン太を見つめ返しているようだつた。たまらずケン太はガクランを手にし、袖を通した。

！

ある衝動がケン太を貫いた。

外へ……。

そしてある場所へ向かえ……ガクランがそう告げていた。胸をどきどきさせながら、ケン太は家の外へ歩いていった。

「歩」とにケン太は変身していった。髪の毛が自然にオールバックになり、リーゼントの髪型を作つていく。その色がじょじょに薄くなり、金髪になった。足取りが力強く、自信を深めていく。

ケン太は駅へ向かつた。

切符を買う。

思つたより遠い。

目的の駅は、港町だった。

電車に揺られ、ようやく到着した駅前はにぎわつていた。

その喧騒の中をケン太は裏道を探して歩いていく。いまいまして路地を右へ左へと進んでいった。ちいさな商店が立ち並ぶ中に、目的の場所があつた。

「押忍！ 有難うございました！」

だしぬけの大声に、ケン太は立ち止まつた。

ちいさな服飾屋の店先で、髪型をオールバックに決めた数人の学生が、身を折り曲げて最敬礼をしている。全員膝元まで達する長いガクラン 長ランというやつだ を着て、裾が広がつたパンタロンのようなズボンを穿いている。

かれらは最敬礼をすませると、全員足取りをそろえケン太の立つている方向へ歩き出した。ケン太の側をすり抜けるさい、全員じりりと鋭い視線を送つていった。

ケン太はその服飾屋へ近づいた。

つくりは古い。木造の、平屋建てである。

ウインドウがあり、様々な種類の学生服、セーラー服が展示してある。普通のもあつたが、大部分は改造したものだった。ウインドウのガラスに貼り紙があり

学生服、セーラー服
お仕立ていたします
オリジナルも承っております

とあつた。

ケン太はおそるおそる店のガラス戸を押して中へ入つた。

からん、とドアベルが鳴つた。

入つてすぐがカウンターになつていて、ひとりの二十代はじめころの女性が帳簿らしきものをひろげている。背が高く、憂いをおびた表情をしていたが、はつとするほどの美人だつた。彫りが深く、日本人離れをした美貌をしている。もしかしたらハーフかもしけなかつた。

なにか話しかけたかつたが、なにを話していいかわからない。

と、その時もうひとりの客が入つてきた。ばん、と勢いよくドアを開いたせいで、ドアの上のほうについているドアベルががちゃがちゃとうるさい音をたてる。

小柄な男子生徒だ。

かれは興奮しているのか、顔を真つ赤にさせ入つてくるなり大声をあげた。

「押忍！ 自分は由良高校の応援団に所属しております加藤というんです！ 今回、あたらしい応援団の制服を作つてもらいにまいりました！ どうかよろしくお願ひします！」

あまりの大声にケン太はびっくりした。

加藤と名乗つた男は背をぴんとのばし両足をぴつたりとあわせ、氣をつけの姿勢のまま動かない。

カウンターの女性はうなずくとかれに近づいた。手にメジャーを持つていて。

「それじゃ採寸するわね」

「押忍！」

彼女は手早く加藤の全身のサイズを計つていき、手元の手帳に数

字を書き込み始めた。彼女が採寸するため加藤に手を挙げなさいとか、足を開いて、というたびに相手の生徒は素直に従う。

やがて採寸がおわったのか、彼女はうなずいた。

「それじゃどんな学生服を作つてもらいたいの？」

「あ……あの……」

加藤は真っ赤になつた。

「あの……格好良いのをお願いします！」

女性はちょっと首をかしげた。

「格好良いって言つてもどんなのがいいのか……そつね、あんたちよつと背が低いから短ランなんてどうかしら。似合つと思つわよ」

「それでお願いします！」

加藤はさらに大声をあげた。

女性はメモを見て告げた。

「いま注文が重なつてゐるから、そうねえ仮縫いは来週でどうかしら？ 来週の木曜、学校が終わつたらいらつしゃい。どう？」

「押忍！ 窺わせていただきます！」

ぐるりと回れ右をして、加藤と名乗つた生徒は出て行つた。

あつけにとられたケン太に、女性は笑いかけた。

「ここじやあんなのが多いのよ。近くに由良高校つてのがあつて、そこの応援団の団員がお得意さんなの。あの加藤つて人、今年応援団に入つたばかりで、格好良いガクランが欲しくなつたのね」

そう言つてケン太のガクランを眺める。

「あんた……」

彼女の視線が厳しいものになつた。

「そのガクラン、うちで逃えたものね……そのラインは見覚えがある。きっとお祖父ちゃんの手になつたものだわ」

ケン太は驚いた。

彼女はまじめな顔になり、さつとビデオに近づくと「開店中」の札を裏返しにし「閉店中」に変えた。

「そのガクラン、詳しく見せてもらえる？」

ケン太は頷いた。それこそ望むところである。

彼女はくすりと笑つた。

「『免なさいね、つい夢中になつて。あたし、ヨーロッパで言つての。この辺じやハマのヨーロッパで通つてる』

「高倉ケン太です」

おたがい自己紹介があわり、ヨーロッパは真剣な目になつてケン太のガクランを仔細に点検はじめた。

彼女の顔が間近にあり、香水の匂いがケン太の鼻腔を擦る。ヨーロッパはガクランの生地をつまみ、考え込んだ。

やがて得心が行つたのか、うなずいて口を開いた。

「確かにお祖父ちゃんの作品に間違いないわ。たぶん、最後に仕立てたガクランかもしだれない。最近、このガクランあなた以外の人間によつて袖を通されているでしょ、う？」

「そんなこと判るんですか？」

「ええ、それもふたりにね。ひとりはガクランによつて拒否されたみたい。もうひとりはあなたにこのガクランを返したひとね。生地の纖維の乱れで判るわ」

「そうですか……実は、いろいろお尋ねしたいことがあるんです。いつたい、この伝説のガクランというのは何ですか？」

「伝説のガクラン　そう呼ばれているのね」

ケン太がうなずくと、ヨーロッパは腰に手を当てた。

「それじゃこつちへいらつしゃい。長い話になるからお茶でもいかが？」

ヨーロッパはケン太をカウンターの裏に案内した。カウンターを回ると、そこは家の中に続いていて、ちいさなキッチンと、ダイニングになつっていた。テーブルについたケン太に、ヨーロッパはコーヒーを出してくれた。インスタントではない、ドリップ式の本格的なやつだつた。

「あたしのお祖父ちゃんが死んだのはもう、十年前になるかしら。にしろそのとき百を越していたから、大往生ね。でも死ぬ前に、

あたしにこの店を継いで貰いたいと遺言したので、それでこうしているわけ。当時はあたしまだ高校生だったから、こんな店の番をするのなんか厭だつたけど、それでも十年たつたら愛着みたいなのがしてきたわ

ヨーロはくすりと笑つた。

「あら、つい自分のことばかり……そつそつお祖父ちゃんのガクランのことよね。お祖父ちゃん、戦争中陸軍にいたの。そこで軍服のデザインみたいなことしていたの」

ケン太の表情を見てヨーロは肩をすくめた。

「陸軍って言つても判らないでしょうね。いまから何十年も前、日本は世界を相手に戦争していたのよ。当時は自衛隊ではなく、陸軍と海軍というのがあって……まあ、とにかくお祖父ちゃんはその陸軍で新しいデザインの軍服を作るよう、依頼を受けていたのね。なぜそんなこと陸軍が依頼したかと云うと、格好良い軍服を兵士に着せて、士気を高めようという作戦だつたの」

ケン太は自分のガクランを見た。

「そうよ、そのガクランはそのときの研究の成果でもあるのよ。知つてる？ 日本の学生服のルーツは軍服だつて」

「なんですか？」

「そうよ、セーラー服だつて、もともと海軍の制服だつたわ。お祖父ちゃんはその研究に心血を注いでとうとう新しい軍服を完成させたの。でも結局陸軍はその軍服の採用を見送つたの」

「どうしてですか？」

ヨーロは笑つた。

「お祖父ちゃんはその軍服に理想的な兵士の性格を付与させたのね。その性格が陸軍の統制にあわなくなつたと言われている。理想的な兵士の性格つてなにかしら？」

さあ、とケン太は首をかしげた。

ヨーロはさきを続けた。

「勇気、正義感、不正に対する怒り……そんな性格が兵士に与えら

れただけど、当時の陸軍の上部にいたひとは、そんな性格をあたえられた兵士にとつては我慢ならない状態だったというわ。お祖父ちゃんの軍服を着た兵士は「こと」とく上官に反抗するようになつて、結局お祖父ちゃんの軍服は闇に葬られた……そのときの経験で、お祖父ちゃんはそのガクランを仕立てたつてわけ

「ぼくの父親に、あなたのお祖父さんがガクランを呉れたそうです。なぜ、そんなことしたんでしょう?」

ヨーロはまた肩をすくめた。

「軍服は闇に葬られたけど、お祖父ちゃんは自分の研究の成果を世に問いたいと願つていたそうよ。そのガクランを着た人間は、強い正義感を持つようになる……その結果、世の中が少しでも変われば自分の研究も無駄ではない、そんなこと考えていたのかもしれないわね」

ケン太はぽつりぽつり語りだした。

「ぼくはこのガクランを着る前は喧嘩なんかしたことないんです。でもこのガクランを着るようになつて、自分でも思わなかつたことを次々としでかすようになつて……なんだかどんどん自分が変わるもので怖いんです」

ヨーロは首をふつた。髪の毛がふわりと動いて目を隠した。

「ガクランに人を変えるちからはないわ。その人の隠された性格や、もともと持つっていた属性を表に出すだけなの。あなた、もしかしてガクランで自分が強くなつたなんて思つてない?」

「違うんですか?」

「ガクランが引き出すのはその人のもともと持つている決断力とか、行動力のようなものだけなの。喧嘩するには、そういうものが必要だから、あなたが平氣で喧嘩できるのも、そういうことじゃないかしら? 要はあなたがガクランに支配されるか、するかね」

「ぼくがガクランに支配される……」

ケン太はつぶやいた。

ヨーロはそんなケン太の目をじつと見つめた。

「ガクランに支配されるというのは、目的がないときよ。ただ強くなりたい、喧嘩に強くなりたいなんて考えでガクランを着れば、それはガクランを着るのではなく、ガクランに支配されることそのもの。あなたにガクランを支配するだけの目的があつて？」

ケン太は顔を上げた。

「あります！ ぼくには目的が！」

ヨーロは笑つた。

「そう、それは良かった。いくらガクランがあなたに決断力を与えてくれても、一生着つづけるわけにはいかないものね」

疑問が顔に出たのだろう、ヨーロはにやりと笑つた。

「だつてあなた、学生でしょ？ 卒業してもガクランを着つづけるの？」

あ、そうか、とケン太は思つた。

ケン太は自分の目的を再確認した。そうだ、その目的も自分が学生であることに理由があるんだ。

ケン太は立ち上がつた。

「いろいろ有難うございました。ぼく、帰ります」

「あ、待つて！」

ヨーロはあわてて店へ戻ると、カウンターの引き出しを捲し始めた。

「あつた！」

叫ぶと、手に何かを持つてケン太の前に走つてきた。

「これを使って！」

ヨーロはケン太の前のテーブルにじゅらじゅらとボタンを並べた。

いまガクランについているボタンに比べると一回り大きく、ごつい。

「そのガクランを仕立てたとき、お祖父ちゃんはボタンも『デザイン』していたのよ。だけどその当時、ボタンを作つてくれるところがなくてね……しかたなく既製品を使うほかなかつたんだけど、お祖父ちゃんは死ぬ前までそのことを後悔していたわ。あたしはお祖父ちゃんのデザイン帳からこのボタンのスケッチを見つけて、ようやく

「そろい製作してもらつたの。いつかそのガクランが生まれ故郷を訪ねるだろうと思ってね。作つておいてよかつたわ」

ケン太はじつとそのボタンを見つめた。

ボタンの表面にはなにも刻まれておらず、つややかな真鍮の表面が鏡のようになつてまわりの景色を映している。

ボタンに映る自分の顔を見つめ、ケン太は考えた。

ガクランに支配されるか、されるか。それは着る人間によるのだろう。

自分はどうだらう？

店を出たケン太はまっすぐ家を目指した。
その顔には決意の表情が浮かんでいた。

展開（前書き）

ケン太の活動が開始される。その目的とは……。

翌朝、千石高校の校長室にアキラの怒声が響き、キヨシとケイスケはうへえ、と首をすくめた。

「ガクランを返してきた、だとおー！」

アキラは激昂していた。

珍しいことである。かれが感情を人前であらわにするのは、年に何度もあるだひつ。

「馬鹿つ！ お前はなんて馬鹿者なんだー！」

キヨシは不服そうに口をまげ、上目がちにアキラを見ていた。その態度がさらにアキラをいらいらさせていた。

「なんでそんなことしたんだ。言つてみろー！」

「おひ……」

もぐもぐとキヨシは口を動かした。

「あのガクラン、着る資格はないと思つて、やつぱり持ち主に返すほうがいい……そつ思つたんだ……」

キヨシはうつむき、腹のところに両手を組み合せもじもじしていた。

「お前、あれを着たのか？」

アキラの口調が一変して穢やかなものになつた。キヨシはにこり、と笑いうなずいた。

「うん、おら着てみた」

「よく腕が通つたな。お前には小さすぎはしなかつたか？」

「そんなことないでや。最初小さいかなつて思つたけど、着ているうち身体にあつてきたんだ」

アキラはケイスケを見た。

「ケイスケ、お前キヨシがガクランを着たところを見たのか？」

ケイスケは点頭した。

「へい、キヨシさんがガクランを着たところを見ました。サイズはぴ

つたりでしたよ」

アキラは考え込んだ。

「妙だな……ケン太とキヨシでは体型に違いがありすぎる。それなのにぴつたりサイズが合つとは」

「兄ちゃん、おら……」

アキラはきっとキヨシを睨んだ。キヨシはまた首をすくめた。
「もういい！ 部屋へ帰つてろ。おれはひとりになりたいんだ」

キヨシとケイスケの田が合つた。

うなずきあい、そろそろと退出する。

ひとりになつたアキラは立ち上がつた。

窓際に歩み寄ると、じつと外を眺めた。

校庭では、千石高校の生徒たちが整列し、密集隊形をとつて行進の練習をしている。手足をいつせいに動かし、まるで軍隊である。アキラにとつては、これは軍事訓練であつた。

いつの日か、かれはこの私製の軍隊で世の中をひたすら走る氣でいる。

かれは本氣で日本を征服する氣でいた。それが政治的な結社を通じてか、あるいはクーデーターを起こしてか、いまは判然としないがアキラは権力を握る氣でいる。

「いつの日か……」

つぶやき肩をすくめる。

と、背後の気配にアキラはぐるっとふり向いた。

開けつ放しのドアから、イッパチの顔が覗いていた。

「お前は……？」

「へへっ、イッパチでござります。こんな、『機嫌をつかがいにまいました』

アキラはうなずいた。

「そ、うか、なにやら情報屋みたいなことしているやつがいると聞いたが、お前か」

イッパチはひょいひょいと軽い足取りで室内に入り込むと、ぽん

と額をたたいた。

「へいお察しの通り、みなさまのためにいろいろ噂あつめ、調べもの、なんでもやつております！」

アキラはどっかりと「スクの向」の椅子に腰をおろした。

「なにか情報があるか？」

「へい、伝説のガクランについて新しい情報が入りましたんで「なにつ！」

アキラは身を乗り出した。

「へへっ、お知りになりたそうで「ぞこますな。お話ししますか？」

「喋つてみる。気に入つたら情報料を払つてやる」

「それでは……あのガクランの素性がわかりましたんで……」

「素性？ あれはケン太が父親から譲り受けたと聞いているぞ」

「そうで「ぞいましょう？ しかし、その父親はどこからガクランを手に入れたつことは知つておりますか？」

アキラが首をゆつくりふると、イッパチはしてやつたりといつた顔になつた。その顔を見て、アキラは苦い顔になつた。どんな相手でも、劣勢になることは好まないのだ。

イッパチはケン太を尾行して、ある服飾屋にたどり着いたことを話した。

「どうやらその先代の主人が伝説のガクランの製作者らしく思えますな。主人はどうに死んで、いまはその孫娘が店を継いであります。そこでケン太はガクランの秘密を聞いたようです」

「お前、聞いたのか」

「へい、いまはこんなものがありまして……」

イッパチは懐から盗聴器のよつなものを取り出した。

「なにしろこいつは壁を通して向こうの会話を聞き取ることができるという優れものです。ばつちり聞きましたよ。それによりますとですね……」

そう言つと店での会話を繰り返した。

アキラはうなずいた。

「ふむ面白い。その店のことは噂で聞いたことがある。なんでも港町で、応援団とか番長、スケ番に絶大な人気がある店があるとか。」

「そうか、その店が伝説のガクランの生まれた場所か……」

「いかがでございましょう? お気に入りになりましたでしょうか?」

「気に入った。情報料は払ってやる」

アキラは立ち上がり、ポケットから金を出してイッパチに近づいた。

イッパチは両手を出して、それを受け取る姿勢になつた。
そのイッパチの手を捻りあげ、アキラは無理やり自分の方へ顔を向けさせた。

アキラの顔がイッパチの間近にある。

その目の物凄さに、イッパチの顔に冷や汗が噴き出した。

「確かにお前は役に立ちそうだ。だがおれに役に立つ者は、たいがいおれの敵にも役に立つことがあるものだ」

「な、なんでござります? あ……あっしは……」

「判つているだろ? タツラのことだ! おい、目をそらしたな。お前はタツラにも情報を持つていくつもりだろ? そうすれば、おれとタツラ、ふたりから金をせびることができるからな。お前はおれたちふたりを手玉にとつていい気になつていいが、そういう幸運が続くとはだれにも言えないぞ!」

アキラは荒々しくイッパチの身体を離した。

イッパチはよろよろとなつて、床に座り込んだ。その前にアキラは金をばらまいた。

「どれ! 約束だ。金は払つてやる」

「有難うございます……それでもイッパチはつぶやいた。

アキラはもうイッパチから関心をなくした、という様子でさつと廊下に出ると外へ向かつた。

取り残されたイッパチの表情に憎々しげな感情があらわになつた。いつもこやかなかれには似合わず、猛々しいといつていい表情だ

つた。

イッパチはつぶやいた。

「へつ、いまに見てる……いつかお前の尻尾を掴んでやるからな……」

さつと立ち上がるといつもの柔軟な表情に戻り、校長室を出て行つた。その顔からはだれにも内心の動きを知ることは出来ずについた。

そのじぶん……。

赤星高校の校長室では双子の姉妹の喚声があがつていた。

「赤星高校を元通りにするんですつてえ！」

双子は目をきらきらさせケン太を見上げた。

ケン太はうなずいた。

「ううむ、ぼくときみら二人だけが赤星高校の生徒だなんて、少なすぎる。なんとか生徒を集めよう

うんうん、と双子はうなずいた。

隣りでは校長が布団に寝たままになつてゐるが、その会話を耳にして目を見開いた。

ケン太は校長に向き直つた。

「校長先生、赤星高校の生徒名簿なんて残つてますか？」

校長はうなずいた。

「もちろんじやとも。しかしそんなもの、どうするのかね？」

「赤星高校を辞めた生徒がほかの高校に転入したら連絡がきますよね。その高校から

「そりや、まあ……」

「しかし転入しない今までいたらどうでしょ？ その転入手続きをしなかつた生徒を尋ね、復学を薦めるんです」

校長は「ほ！」といつよつと口をすぼめた。

双子は顔を見合せた。

「でも復学したくない、って言われたらどうします？ いま赤星高校は……」

赤星高校は千石高校によつて占拠されたも同様になつてゐる。そのため本来の生徒は学校に来る気をなくし、辞めてしまつた。

ケン太は笑つた。

「そのことはぼくがなんとかする。いざれやつらをたたき出すつもりだが、そのあと生徒を受け入れるため、訪ね歩こつといつわけさ！」

ふうん、と双子は顔を見合せうなずいた。
そしてにっこりと笑つた。

「素敵！　またみんなと一緒に登校できるのね！　エミリちゃん！」
それを受け、エミが嬉しそうにうなずいた。

ああ、じつちがエミか……。

ケン太はいまだにユミとエミの区別がつかない。

「あたし、もとの女友達に話してみます！」

エミは手をたたいた。

ユミが立ち上がり、パソコンの前にすわり画面を立ち上げた。
ファイルから生徒名簿を選び、プリンターで印字する。

「できました。これが生徒名簿です！」

ユミから出来立ての生徒名簿を受け取り、ケン太は立ち上がつた。
さあ、赤星高校の再生第一歩である。

これがケン太の目的だつた。

ケン太とユミ、エミのふたご三人は連れ立つて外へ出て行つた。
それを見送る校長の目に嬉し涙がひかつていた。

セイントカイン（前書き）

赤星高校を立て直すという計画のため、ケン太はもと生徒会長を尋ねる。その生徒会長は……。

セイントカイン

三人は電車に乗つて移動した。

車内でケン太は生徒名簿に見入り、ある名前に注目した。
「この比呂英雄というのは生徒会長つてなつているけど、まだほかの高校に転入していないのかい？」

ケン太の両側にユミとエミが座り、名簿を覗き込んだうなずいた。ユミが口を開く。

「千石高校の生徒がやつてくる前は、いろいろ生徒会長として活躍していました。とても熱心で……」

エミがそれを受けた。

「ええ、生徒たちからの信頼も厚かつたですわ！」

「ふうん、とケン太は顎を撫でた。

「それじゃ最初にこの比呂という生徒に話をしよう。生徒会長をしてたくらいだから、高校を元に戻すということには賛成してくれるんじゃないかな」

そうですね、とふたごは賛成した。

やがて目的の駅に電車は到着し、三人はホームに降り立つた。駅前の案内板で住所を確認して歩き出す。

住所によると駅からはそんなに遠くはなかつたが、坂道を登つていく必要があった。比呂英雄の家は丘陵を造成した新興住宅街にあつたのである。

てくてくと歩いていくとようやく目的の住所にたどり着く。

造成したばかりらしく、丘陵は土がむきだしで、植えられた芝生もまだ根付いてはいないようだつた。背後の山に何本か照葉樹が植えられているがまだ林を形成するほどは育つてはいなかつた。家と家の間隔はひろく、やや閑散とした印象だ。

比呂 と書かれた表札の下にインタホンがあり、ケン太はボタンを押した。

すぐ応答があり、女の声がした。

「どなた？」

声の調子から母親だろう。ケン太はインタホンに話しかけた。
「赤星高校の生徒で高倉ケン太といいます。比呂英雄さんにお目にかかりたいのですが……」

「……」

インタホンの向こうで沈黙している気配がした。

「赤星高校……あの子はいません」

「そうですか……」

どちらへと問い合わせる前に玄関のドアが開かれた。

ケン太の母親とほぼ同じ年令だろう。

やや太り気味の、地味なセーターを着た女がケン太たちを怪訝そうに見やっていた。

ケン太たちはあわてて頭をさげた。

やがて彼女はなにか決心したのか口を開いた。

「あの子……またお友達と山へ行つてしまつているんです。なにか特訓とか言つて……」

「特訓？」

ケン太は首をかしげた。

もと生徒会長が特訓？

なんのことだろう。

母親は裏手にある山を指差した。

「あそこに行つているんです。なにか危険なことしているんじゃないかと心配なんです。一度、どこへ行くのか後をつけたんですけど見失つて お願い、なにをしているのか確かめて下さいませんか？」

わかりました、とケン太はうなずいた。

踵を返し歩き出す。

ふり返ると、英雄の母親は心配そうな表情で三人を見送っていた。

山は造成に取り残されたらしく、雑木林がひろがり道はついてはいたがほとんど踏み分け道といつてよく、した生えが生い茂つて歩きにくかった。その中をがさがさと登つていくると、やがて「立ち入り禁止」と書かれた看板があった。文字は手書きで、看板 자체も手製のものらしい。ケン太はゴミとエミを見た。ふたりはうなずいた。なにかありそうだ。

看板を通りすぎるとコンクリートの建物があつた。

廃墟らしい。

窓のガラスはすべて抜け落ち、長年の雨風にさらされ、白茶けたコンクリートが建物の骸骨のようである。足もとには散乱したコンクリートの破片がうず高く積もり、侵入者を拒否しているようだ。そのとき建物の上部から声が降りかかった。

「だれだ！ ここはセイントカインの秘密基地だぞ！」

はつ、と見上げると建物の屋上部分からひとりの男がこちらを見下ろしている。赤星高校の制服を着ていた。

ケン太は声を張り上げた。

「ぼくは赤星高校の高倉ケン太。比呂英雄さんに話をしにきた！ あんたが比呂英雄さんか？」

男の顔に驚きの表情があらわれた。

「赤星高校？ まだそんなのがあつたのか」

そう言つとケン太の背後にひかえているゴミとエミに視線をやつた。

「そのふたりには見覚えがあるな。校長の孫と聞いているが」

「あたしエミです！」

「あたしエミです！ 英雄さん、一緒に赤星高校を元通りにしませんか？」

「英雄さん、なにがあつたんだ？」

英雄の背後から声がして、四人の生徒が姿をあらわした。男が三人、女がひとり。みな赤星高校の制服を着ていた。

英雄は中肉中背で、ハンサムといつていいほど整つた顔立ちをし

ている。あとから現れたのはやや肥満体の男がひとり、小柄な油断なさそうな顔つきの男子生徒、皮肉そうな笑みを浮かべている長身の生徒。それにアイドル並みの美貌の美少女だつた。

四人は英雄を中心にざらりと屋上に勢ぞろいしてじつとケン太たちを窺つていた。

「そちらへ行つて良いですか？」

ケン太が呼びかけると英雄はうなずいた。

「ああ、とにかく話しだけは聞こう」

三人は建物の中へ入り込んだ。

内部は外と同様に荒廃している。

天井からコンクリートが落下したのか、床は足の踏み場もない。それでも英雄たちが時々来ている証拠に、わずかな道が出来ている。階段を登り、屋上へと移動した。

屋上では五人が待つていた。

「赤星高校を元通りにするんだつて？」

まず英雄が口火を切つた。

ケン太はうなずいた。

英雄はちょっと眉をひそめた。

「判らないな、なんでいまごろ赤星高校なんだ。あの高校は千石高校と万石高校というふたつの高校の勢力争いにまきこまれ、事实上機能していないじゃないか。生徒もそのふたりだけと聞いている」「ぼくが今年入学して三人です」

くくっ、と皮肉そうな笑みを浮かべていた長身の男子生徒が声をあげて笑つた。

「面白いな！ たつた三人でなにが出来る？」

ケン太はその男を見た。

「いまは三人でもいざれ生徒がもどれば四人になるかもしれない。四人集まればもっと集まるかもしね。そうして、千石高校の連中を追い出すことができれば、元に戻る……そうじゃないですか？」

まともに反論をつけ、男子生徒は目を白黒させた。

小柄な生徒が口を開いた。

「英雄さん、こんなやつら相手にすることないですよ。赤星高校がどうなるうと、おれたちセイントカインの活動は変わらない。そういうじゃないですか？」

ケン太は英雄に尋ねた。

「そのセイントカインってなんですか？」

五人の間にすばやい目配せが交わされた。

英雄の口もとにうずうずとした笑いが浮かぶ。どうやらだれかに話したくてたまらなかつたようだ。それがケン太たちがあらわれたので、機会がおとずれたというわけだ。

「それじゃ教えよう。みんな！」

おう！ と、五人は声をあわせた。

ぱたぱたと足音をたて、五人はケン太を無視して階下へ消えた。あつにとられていたところ、急にあたりに音楽が鳴り響いた。最初はトランペットの序奏がはじまり、ついでティンパニーの力強いリズムがはいる。シンセサイザーがさまざまな主旋律をかなで、混声合唱の歌声が響いた。

セイントカイン！
セイントカイン！

学園の正義はぼくらの手で守るんだ！

番長、スケ番追い出して、静かな高校生活取り戻そう！
勇気をふりしほれ、顔をあげよう！
さあ立ち上がり、セイントカイン！

だだだっ、と階下から足音が近づき、五人のあらたな顔ぶれが姿をあらわした。

みな色分けされたユニホームを身につけ、顔はマスクで覆つている。

「セイント・レッド！」

「セイント・ブルー！」

「セイント・イエロー！」

「セイント・ブラック！」

「そしてセイント・ピンクよ…」

五人はケン太たちの前に勢ぞろいするとさつとポーズを決めた。言葉どおり、五人はそれぞれ色づけされたコニホームを身につけている。全員が被っているマスクはすっぽりと顔を覆つもので、表情が読めない。

五人がポーズを決めた瞬間、ちゅどーん！ といつ派手な音がして、建物の前の空き地に爆発があきた。

ぱらぱらと砂煙が降りかかり、ケン太は髪についた砂粒をあわてて振り払った。

煙がはれあがると、五人はさつとそれまでのポーズを解き、ぽーんと飛び上がつて位置を変え、人間ピラミッドをつくつた。さつとそれを崩すと、ふたたびポーズを決める。

が、かれらのスタミナはそれで切れたのか、ぜいぜいといつ喘ぎ声がマスク越しに聞こえてくる。

「ぼくら生徒会は……千石高校の生徒たちが校舎を占拠したとき……なにもできなかつた……。ちからなき正義は……無力だ！」

セイント・レッドと名乗つた赤いユニホームの人物からマスク越しにくぐもつた声が聞こえてくる。

英雄の声だつた。

一息入れてふたたび話しだしたとき、よつやくなめらかな口調になつた。

「ぼくらはいつか赤星高校が元通りになることを願つていた。だからこつしてセイントカインというグループを結成し、訓練を続けていたんだ！ ケン太といったな、あんた本氣で千石高校の連中をたき出すつもりがあるのか？」

ケン太はうなずいた。

レッドは手を差し出した。

「協力しよう！ きみが見事千石高校の連中を追い出したら連絡をよこしてくれ。まだ赤星高校に戻りたいと思っている生徒は沢山いる。ぼくらがかれらを復学させるよ。約束だ！」

ケン太とレッドは固い握手を交わした。

山から降りてケン太とヨミ、ヒミの三人は駅へと歩いていった。坂道の向こうにケン太はある人物を認め声をかけた。

「イッパチさんじゃないですか？」

相手はぎくりと立ち止まつた。

いけねえ、という表情が瞬間浮かぶ。

が、すぐいつもの愛想良い笑顔になり手をすりあわせた。

「イッパチさんなんぞ他人行儀じゃないですか！ イッパチ、と呼び捨てに願います。これはこれは偶然ですねえ！」

えへへへ……と腰をかがめ近づいた。

ケン太の側に来て歩き出す。

「ええ、こんちどんな御用で？」

ケン太は比呂英雄とセイントカインたちのことを話した。

イッパチは大げさに仰け反つて驚いて見せた。

「そりやあ、たいしたものだ！ 赤星高校を立て直そうつてケン太さんの意気にイッパチ正直感服しましたよ！ いや偉い！ 見上げたもんだ！」

ヨミとヒミはケン太にささやいた。

「ねえ、ケン太さん。このイッパチってひとの着てているのは千石高校の制服よ。気をつけなきや！」

イッパチはへへつ、と笑つて額をぽんとたたいた。

「おそれいりやの鬼子母神でやんす！ たしかにあつしは千石高校の生徒で」「ざんすが、ケン太さんの敵じやございませんですよ。いや、むしろケン太さんをひそかに応援してんで……」「どうして？」

ケン太が問うとイッパチは顔を上げた。

「千石高校のアキラは高校を恐怖で支配しています。あたしゃそれが我慢あらんんですよ！ 生徒も口には出さないけど、いつかあいつを追い出したいと思っているとあたしゃ睨んでいるんです」

「でも千石高校はいまはないってアキラが言つていたけど…… あそこにいるのは学生じゃなくて社会人だと……」

イッパチはくすりと笑つた。

「ケン太さんは人が良いですね！ アキラがなんと言おうと千石高校はちゃんとありますよ。あいつが真実を言つていたとどうして思うんです？」

ケン太はあっけにとられた。

ではあれは嘘だったのか！

じぶんはアキラの嘘に躍らせられ、ガクランを手放すはめになつたということになる。

「じゃ、アキラも同じなのか？ あいつもおなじ学生……？」

イッパチはうなずいた。

「あたりまえださあ！ もつともアキラの親は大金持ちでね、それでアキラもふんだんな資金を動かせて千石高校をじぶんのものにしたと言われておりやす。親はアキラのしていることを黙認しているようで、ま、道楽と思つてているんでしょう」

話しているうち駅に着いた。

切符を買うケン太たちをイッパチはそれではこれでお別れですと改札で見送つた。

電車に乗り込むのを確認したイッパチの顔はなにかを考え込んでいるものだった。

始動（前書き）

とうとうケン太は赤星高校から千石高校の生徒を追い出しにかかる。一気に決着をつけるため、イッパチに伝言を頼むのだが……。

その学生服を着た客が入店してきたのを見たヨーロは、なにかひやりとする予感をおぼえた。

冷酷さが顔に出ているその客は、ほかの客などヨーロに入らぬ様子で、まっすぐカウンターに近づき、口を開いた。

「ガクランをつくりて欲しい」

そう言つと無言で手を後ろに組み、背筋をのばした。

「どのような」注文でしょうか

それでも客は客だ。ヨーロは丁寧な口調になつた。

「最高のをだ！ デザインはいま着ているものを踏襲して欲しい。ただし、戦闘用で頑丈なものがいる」

ヨーロは眉をひそめた。

「そのようなご注文は……」

「高倉ケン太にはタダで渡したと言つのに、おれには作れないといふのか？」

「あなた、どなた」

彼女の眉間にかけわしくなつた。

ケン太の来訪はヨーロの記憶に新しいものだつた。この店にやつてくる客は、たいてい話しの内容は格好良いか、悪いか。ガクランは似合うか、似合わないかくらいしかなく、偏差値の低さが如実にあらわれた喋り方しかできないのに対し、ケン太はごく普通の会話が出来た。

だが、この客ときたらじつに横柄だ。高々と顔をあげたその客を見ているうち、ヨーロはだんだん腹が立つてきた。

彼女のそんな気配をさとつたのか、その場にいた客たちが近寄ってきた。店内にぴんと張り詰めた緊張感が漂つ。

「おれは千石高校のアキラ、といつものだ」

ヨーロの顔に理解の色がうかぶ。千石高校のことは噂で聞いてい

る。なんでも万石高校と勢力争いを繰り広げているとか。あのケン太もそんなこと言つていたような……。

その名前を聞いた客たちはあきらかにひるんだ様子だった。

アキラと名乗った客は、じろりとかれらを見た。他の客はアキラの視線にびくつとなつてそそくさと退却していった。店内にはもう他に誰もいない。アキラとヨーロ、二きりになつた。アキラはまた話しあげた。

「いざれケン太とは勝負しなくてはならない。その時のために、戦闘用のガクランが欲しいのだ。作つてくれるな？」

ヨーロは首をふつた。

「いやです！ この店のガクランは喧嘩のためのものではありません」

「ケン太のガクランは違つといつのか？」

言われてヨーロはぐつとつまつた。

アキラはにやつと笑つた。

「聞いたところによると、ケン太のガクランはあんたの祖父が造つたものらしいな。そこで孫娘のあんたが店を引き継いでいる。ガクランもじぶんで仕立てていると云つ。なあ、祖父さんの腕をじぶんが越えることができたらどんな気分かね？」

ヨーロの顔につと胸を突かれた、という表情がうかぶ。

そうだ、そうなればじぶんが祖父の作品と勝負することになる。

この店を引き継いで十年あまり、客の注文でいろいろなデザインのガクランを仕立ててきた。その間、つねに頭の隅にあつたのは祖父のデザインであった。じぶんの作品は祖父のものにくくらべてどうなのか、劣つているのか、勝つているのか、いつも考えていた気がする。

その表情を読んだのか、アキラがふたたび口を開いた。

「どうだ、やるかね？」

ヨーロは顔をあげた。

「やります！」

言つてみて自分で驚いた。

そう、自分はやる気になつていてる。

「ただし戦闘用といづれ注文はお引き受けできませんわ」

「なぜだね？」

「あの伝説のガクランも戦闘用などではないからです。あのガクランは着用者の特性を引き出す一助になりますけど、決して力を増したり、ましてや喧嘩に強くなると言つ機能は持つていません」

「しかしケン太はあれを着てから明らかに性格が変わつたぞ。喧嘩だつてやつたことがなかつたのに、着てからは驚くほどの喧嘩上手になつたというではないか」

「正義感、義務感、決断力を引き出したに過ぎません。ケン太さんにはもともとそういう素地が備わつていたのです。それが表に出なかつただけで、ガクランはそれを引き出したのです。お間違いなきよう」

アキラはふん、と肩をすくめた。

「正義感はともかく、おれには決断力は充分備わつてゐるつもりだ」

「そうでしょうね、とヨーロはうなずいた。

かれには決断力はふんだんにありそつた。むしろありすがるへういだ。

アキラは妥協した。

「それならいい。無理は言わない。それなら打撃などに耐えれるような生地で仕立ててくれ。ただし外からはつきり判るようなサポーターとか、防具はつけるな。あくまでノーマルなガクランに見えるよう工夫してくれ」

難しい注文だった。

しかし注文は難しいほどやりがいがある。ヨーロはうなずいた。

アキラの採寸をおわり、かれが帰つてからヨーロは作業場にもどつた。店先に「閉店」の看板をさげ、じにじにこもるつもりでいる。棚にガクランのための生地や、針と糸、アイロン台、そしてミシン

ンが置いてある。ミシンはふつう、電動を使うのだが、彼女は手縫いの味を出すため、昔の足踏み式のものをわざわざアンティーク・ショップで探し出して使っている。

作業場にはほかに仮縫いのためのマネキン、刺繡のための糸、生地を染めるための染料、そのほかこまごまとした道具がところせましと置かれていた。

いまでもどこになにがあるか、目を瞑つていっても判るほどだ。なにしろ小学生のころから仕立ての仕事は祖父に仕込まれたのである。小さな本棚にはその祖父が残したデザイン・ノートが並んでいた。ヨーコはその中の一枚を取り出し、中を開いた。

様々なスケッチのなかに、あきらかに伝説のガクランの原型とおぼしきデザインがあつた。

そのラインは今見ても革新的で、彼女のよく訓練された目でやつと識別できるような微妙なカットが施されている。

他の棚に詰め込まれているのは型紙である。
これも祖父の自筆だ。

それらをひろげ、一枚一枚丁寧に田を通していく。

型紙の最後に伝説のガクランの型紙があつた。祖父はこの型紙に心血をそいだのだろう、小さな字でいろんな心覚えのメモが書かれていた。

懐かしい直筆の字を見ていらうか、作業場にいまはなき祖父の息吹が蘇つてくるようだつた。

「やるわ、お祖父ちゃん。あたし、お祖父ちゃんの伝説のガクランを越えるようなガクランを仕立ててみせる！」

ヨーコはつぶやくとやにわに生地をひろげ、鋏を取り出すと田こもとまらぬ速さで裁断をはじめた。

「どうどうおつ始めやがつたな……」

赤星高校の屋上から校庭を見下ろし、イッパチはにやにや笑いを浮かべつぶやいた。

校庭からは派手な叫び声、ものがぶつかる音、ばたばたと慌てる
ような足音が交錯していた。

どどっ、と一階の玄関から数十人の学生服の男女が吐き出され、
その後を真っ赤なガクランを着用したケン太が追つていく。

たちまちケン太は男女に取り巻かれた。

輪になつたかれらはケン太を中心に、野郎……とか、手前……とか
しきりに叫び興奮している。

「やだねえ、あいつらのボキヤブラーは貧困で……もうちょっと、
気の利いたセリフは言えないものかね？」

野郎、手前……かれらの口にするのはたつた一語である。おそらく
それ以外の語彙は持つていないに違ひなかつた。

取り巻いている連中は手に手にいろんな武器を持っている。バッ
ト、チエーン、ヌンチャクなど。

対するにケン太は何も持つていない。

ヌンチャクを持つ男がその手を振り上げ、喚き声をあげ襲いか
かつた。

ぶん、と音をたてるヌンチャクをケン太はさつと身を沈めよける。
ぎりぎりでよけたりーゼントの髪の毛が数本、吹き飛ばされた。
身を沈めたその勢いでケン太はどん、と肩から体当たりをくれた。
男子生徒はわつ、と叫びながらすつ転んだ。
手からヌンチャクが離れて飛んだ。

それを空中で受け止めたケン太は、きりきりと振り回す。めまぐ
るしい速さでヌンチャクはケン太の身体のまわりを動き回つた。
それをあつけにとられ、取り巻いた男女は見つめていた。

ばしつ、と音を立てケン太はヌンチャクを脇に挟み込み、ポーズ
を決めた。

くいくい、と手の平を使つておいでおいでをする。

「くそお……！」

挑発され、男子のひとりが顔を真っ赤に染め、襲いかかつた。手
にはバットを持っている。

そのバットを両手で掴み、横薙ぎに振り払った。

かん、と乾いた音をたてバットとヌンチャクが空中で噛みあつた。ケン太はヌンチャクを振り下ろした。

「ぎゅっ！」

バットを握った男子生徒の膝に命中していた。

両手で向こう脛をかかえ、転げまわる。

「痛え……痛えよお！」

そりや痛いだろう。俗に弁慶の泣き所という神経の集まつた場所である。

それを見ていたほかの生徒たちはあきらかにひるんでいた。

セーラー服の女子生徒は叫んだ。

「なにしてんだよ！ あんたら男じゃないのかい？ ひとりになに愚図愚図してんだ」

そう言われてなにもしないわけにはいかない。

かれらは素早く田配せを交し合い、同時に襲いかかる」とに決めたようだ。

わあ、と一斉に声をあげケン太めがけて殺到していく。

ぶん、ぶん、ぶん！

ケン太はヌンチャクを振り回した。

がつ、じきっ！

たちまち額をおさえる者、手首をおさえる者、あちこち打たれたところをおさえ、うめき声をあげた。

ひいひいと泣き声があがり、すっかりかれらからは戦意が喪失されていた。

それを見て女子生徒はすっかり狼狽していた。

からん、とケン太はヌンチャクを手から放した。

「女相手には喧嘩はするつもりはない。そいつらに手当してやつてくれ。骨はおれていないから」

畜生……とかなんとかつぶやきながら、女子生徒は倒れている男子生徒の肩を引き起こし、なんとかそこから逃げていった。それに

ケン太は声をかけた。

「ここは赤星高校だ。きみらの本来の高校に戻つてもうここには来るんじゃない！」

ケン太に倒された生徒たちは恨めしげな目になつて逃げていつた。ぱちぱちぱち……。

ケン太は上を見上げた。

イッパチが拍手していた。

「いよう！ やりますねえ！ あつという間に片付けておしまいになつた…… さすがケン太さん！ いやあ、お強いですねあ！」

「そんなこと言って、アキラに叱られないのかい？」

ケン太の言葉にイッパチはぺちん、と額を叩いて見せた。

「あたしなんぞ、アキラさんなんか問題にするもんですかね。あつしはただの情報屋で、便利屋で」「ざんすからね。ただあたしや、強いお方が好きつてだけのお調子者で」「ざんすよー！」

へへつ、と笑い屋上から消えた。

ほじなくイッパチは一階の出入口に姿をあらわした。

「どうします？ これから。あいつらはここからたたき出したとはいえ、アキラさんはそうそうあきらめるとは思えませんよ」

「きみはやつがどう出ると思うんだ」

「さてね、いつなるとアキラさん自ら乗り込んでくる…… つてこともありますなあ」

「そうか、それなら」ひからいの望むところだ。ぼくも一気に勝負をつけたいからな」

「勝てるおつもりで？」

イッパチは上目がちになつた。

ケン太は首をふつた。

「わからない…… でもやらないかぎり、この赤星高校は元に戻らないだろう。だからやるしかないんだ」

そう言つとケン太はイッパチを見つめた。

「イッパチ！ 賴みがある」

へっ、とイッパチは小腰をかがめた。

いつの間にかケン太はイッパチを呼び捨てにしている。そのことに気づいてさえいないうだ。

「アキラに伝えてくれ。正々堂々、勝負をしよう。決着をつけるんだ

へいっ、とイッパチは返事をした。

ケン太の伝言を受け取り、アキラはテスクの向こうから鋭い目でイッパチを睨んだ。

「決着をつけたい、とケン太が言つたのか？」

「へい、その通りで……」

ふうん、とアキラは立ち上がると窓に向き直つた。

「一対一の勝負か。いかにもケン太らしい真つ正直な伝言だ……」

ぐるりとふり返り叫んだ。

「いいだろう、勝負に応じよう。場所、時間はお前に任せる」「あっしに？」

イッパチはぽかんとした顔になり、自分の鼻を指さした。

アキラとの戦い（前書き）

とうとうアキラと決闘することになったケン太。しかし勝てるのだ
ら？

アキラとの戦い

「アキラと一対一の勝負？ 危険ですわ！」

「そうよ、きっと腰をしかけてきますよ！」

ユミとエミのふたりはかかるがわるケン太にアキラとの勝負をやめるよう忠告した。しかしケン太の決意は変わらない。

いつもの校長室である。ケン太は上がりかまちに腰をおろし、ユミとエミはかれの両側に座つて話をしている。

「これはぼくが言い出したことなんだ。それにこれで赤星高校から千石高校の侵入を防ぐことが出来る。ぼくが勝つたら、もう赤星には手を出すなとアキラに言いつつもりだ」

「約束を守るかしら？」

ユミは疑わしそうに言った。

それを校長は天井を見上げ、黙つて聞いている。

ケン太はユミとエミを振り切るように立ち上がった。

「それじゃ、行つてくる

「ケン太さん！」

ユミはたまらずケン太の肩をつかんだ。

ふりむくケン太にユミはポケットから火打石を取り出した。かちつ、かちつと火打石を擦つて切り火を熾す。

「ご武運を」

「有難う」

ケン太はがらりと障子を開けると校長室から外へ出て行つた。ほつとユミはため息をつき、つぶやく。

「どうしよう……あたしたち、なにもしなくていいのかしら？」

「お姉ちゃん、じつそりケン太さんの後についていかない？」

「そうねえ……」

ユミは寝ている校長をそつと見やつた。

校長は目だけ動かし、口を開いた。

「行きなさい。わたしはいいから。……」

「校長先生。……」

ふたごは田に一杯涙をつかべ、なにか言いかけた。

が、決意したように立ち上るとケン太の後を追つて出口へと向かう。

があーつ、と轟音をたて陸橋を電車が通過していく。その陸橋のたもと、干上がった川原にケン太とアキラが対峙している。

「本当に、これで最期だな？　ぼくが勝てばもう赤星高校には手を出さないと誓うんだな？」

ケン太は叫んだ。

アキラはにやつと笑い、うなずいた。

「ああ、約束する。が、お前が負けたらどうする？　貴様はなにを約束するんだ？」

言われてケン太はぐつと詰まった。

黙つているケン太に、アキラはおいがぶせるように声をかけた。
「そうだな……もしおれが勝てば、お前はおれの部下になる、とい
うのはどうだ？　お前はなかなか見所がある。いずれおれが社会で
ことを起こす際、幹部としてとりたててやつてもいいと思っている
んだ」

「なにをするつもりなんだ？」

アキラは肩をすくめた。

「それは決まつていい。政治家になるか、会社を興すか……それ
とも革命家になるのも面白いかもしれん。お前はどうなんだ。この
まま大人になつて、社会の歯車になるのが望みなのか？
「それのどこがいけない？」

「お前は男じゃないか。男と生まれたからには、なにか自分の生き
た証しを打ち立てたいとは思わないのか？　よく言つじやないか。
失敗した革命家は犯罪者であり、成功した革命家こそが社会の改革
者と呼ばれると。おれはどっちでもいい。この社会をひっくり返し

てやるのがおれの望みだ」

「そんなの断る！」

「おやおや……、ヒアキラは首をふった。

「まつたく話しの合はない男だな、お前は。しかし、少々痛い田にあつてもらわないといけないようだ」

と、アキラはふり返った。

「だれだ！ そこにいるのは？ 出て来い」

陸橋の陰からのつそりと姿を現したのはキヨシだつた。あいかわらずケイスケをかたわらに引き連れている。

ケン太はアキラを見た。

「ひとりつていう約束だつたら」

アキラはふるつと首を横にした。

「馬鹿な！ おれがあいつらの手助けなど必要とするわけがない！ キヨシ、なぜ来たんだ？」

「お、おひ……」

決まり悪そにキヨシはもじもじとしている。

「こんな喧嘩、やめて貰いたいって思つたんだ……」「なにい？」

キヨシはにやつと笑つた。

きれいに生えそろつた前歯がきらりと光つた。

「キヨシ……いつ歯医者にいつたんだ？」

「行かねえよ。そのガクラン着て、生えてきたんだ。そのガクランはすぐえよ。おれ、生まれ変わつたんだ！」

アキラは田を細めた。

「なるほど、それで恩に感じたというわけか？ おれたちの決着をつける戦いを止めて、お前はどうしたいんだ？」

「わ、わからねえ……でも、兄ちゃんは間違つてゐる……と、思つふん、とアキラは鼻で笑つた。

「お前は考へるな！ 考えるのはおれの役目だ。いいか、そこで立つていろ。余計なことはするんじゃないつ！」

そう言つてアキラは向き直り、だしぬけにケン太めがけて走り出した。

ケン太は身構えた。

瞬間、アキラの長身が宙を舞つた。
はあーっ！

裂帛の気合がアキラの口から鋭くはなたれ、空中をつたいケン太に殺到した。

その気合と共にアキラは空中で前蹴りを放つた。
まるで機関銃の弾丸のようにアキラの前蹴りは構えたケン太の前腕部を何度も蹴つた。

その勢いに、ケン太はぐらつとよろめき数歩、あとずさつた。
が、ガードしただけではなかつた。

とん、と地上に降り立つたアキラにケン太は廻し蹴りをくらわしたものである。

ばしつ！

ケン太の爪先がアキラの腹部に命中した。
鳩尾に完全に決まつている。

本来なら、アキラは身をおりまげているはずだつた。

その動きを予想してケン太はつぎの攻撃に移るつもりだつたのである。

が、かれは平然としていた。

ケン太の表情が一瞬こわばつていた。

「どうした、それだけか？」

せせら笑いを浮かべたアキラは、腕をふつてケン太の頬を張り飛ばした。

がくん、とケン太の膝が折れた。
アキラのビンタは強烈だつた。

目の前に星が飛び、ケン太の視界が暗くなる。
ばしん！

もう一度アキラのビンタが反対側の頬を張り飛ばした。

きーん、とケン太は耳鳴りがして気が遠くなる。

必死に建て直し、ケン太は猛烈なラッシュでパンチをアキラの胸板、わき腹へと叩き込む。

まるで岩を叩いているかのようだ。

アキラは仁王立ちになつてケン太の攻撃を受け止めている。

「まるで効かないぞ！ それがお前のパンチなのか？ 無駄無駄無駄あーーー！」

がくん！

アキラのフックがケン太の顎をとらえていた。

どぞ……！

ケン太は仰向けに倒れていた。

その顔を覗き込んだアキラはゆっくりと首をふつて肩をすくめた。

「所詮、喧嘩は素人だ……ふつ、つまらん！」

ケン太は完全に意識を失っている。

アキラはほつとため息をついた。

やはりヨーコにガクランを仕立ててもらつてよかつた。

彼女はアキラに戦闘のためのガクランは作らないと言つたにかかわらず、彼女の仕立てたのは見かけは学生服であるが、中身は完全に戦闘服といつてよかつた。

アキラの着ているガクランの裏地には、衝撃を吸収する新素材の層が縫いこまれていたのである。そのため、ケン太の攻撃がいかに鋭かろうとも、アキラにまったくダメージがなかつた。

さらにガクランにはもうひとつ仕掛けがあつた。

アキラの筋力を増幅するため、ガクランには伸び縮みする素材で出来ていたのである。これにより、一種のスプリングのちからでアキラのちからは強められていた。

これで勝負あつた……。

もうケン太はおれに挑もうなどと考へることはないだろう。

やるなら徹底して相手を叩きのめす。それがアキラの身上である。立ち去ろうとするアキラは、倒れたケン太が身動きするのを認め

た。

!

まさか、まだ動けるのか？

ふらり と、ケン太は立ち上がりつていた。

アキラの眉がひそめられる。

やつは完全に意識を失つていたはずだ。そんなに早く意識を取り戻すはずはないのだが……？

ふらふら、とケン太はアキラにむかつて歩いてくる。

まるで戦いの態勢をとつてはいない。

が、アキラは本能的に危険を感じとつていた。

防御の態勢をとりかけたアキラに、ケン太はいきなり飛び掛けた。

その動きは出し抜けであり、かつ異様なものだった。

がくん、とまるで操り人形が動くようにケン太は両腕をのばし、
防御の構えをとるアキラの腕をかいくぐりその首を締め上げていた
のである。

「ぐ……！」

アキラの息が詰まつた。

おそろしいほどの腕力であつた。

ケン太の両手の指先には信じられないくらいのちからがかかつて
いた。

アキラは必死に振りほどこうとしたのだったが、まるで万力が締
まるようにケン太の指は縮まつていく。

ケン太の目はアキラを見てはいない。といつより、なにも見てい
ないものの目だった。

意思のない操り人形と化したケン太にアキラはぎりぎりと首を絞
められていく。

それをキヨシとケイスケはぽかんとした顔で見守つていた。

ケイスケがキヨシのわき腹をつついた。

「キヨシさん、どうします？ あのままじゃアキラさん殺されちま
いますよー。」

「だ……だつて、おら兄ちゃんになにもするなつて言われて……」

「そうよ！ 止めるべきよ！」

女の声にふたりは顔をあげた。

川原の、土手にふたごの姉妹が立つていた。

「ミミとヒミのふたりである。

「ミミが叫ぶ。

「早く！ 止めないとケン太さん、人殺しになつちやう！」

その声でキヨシとケイスケは弾かれたように飛び出した。

背後からケン太にキヨシは抱きつくと、その腕を離さうともがく。

「す……すげえ、ちからだ！」

キヨシの顔が真赤に染まつた。

が、やはりキヨシは馬鹿力の持ち主だつた。

締め付けていたケン太の腕が、ゆるゆるとアキラの首からはなれていく。

ほつ、とアキラは息を吸い込んだ。

ひいーっ、ひいーっと笛のよつな音をたて、なんども息を吸い込んで。

けほけほ……と、ようやく咳き込み、身をそらせた。

ケン太はキヨシに背後から抱きかかえられつつも、アキラのほつを向いて飛び掛ろうともがいている。

「いまのうち、お帰りなさい。戦いはドロー、それでいいじゃない」

アキラの顔色がじょじょに平静になつた。

首周りをこすり、脂汗を浮かべている。

ちら、とキヨシとケイスケを見る。

「くそ……お前ら、ただじやおかないからなー、覚えておけ！」

捨て台詞を吐くと、後を見ずに土手を登つていつた。アキラの姿が完全に見えなくなると、ふたごはキヨシのほつを見て口を開いた。

「もういいわ、キヨシさん」

ヒミがそう言つと、キヨシは掴まえていたケン太の腕を離した。

ぱつとケン太はふり向きざま、戦おうという姿勢をとつた。

あいかわらず田はうつむくなまだ。

「ケン太さん！」

「ケン太さん、田を覚まして…」

「コミとヒミはかわるがわる叫ぶ。

と、ようやくケン太の田に表情が戻ってきた。

視線がはつきりし、田の前の現実がわかつてきたようだ。

「コミ、ヒミ……それにキヨシさんとケイスケ……」

がくり、と膝をあつた。

せいぜいと荒い息をつく。

「ぼくはどうなったんだろ？……アキラに殴られて、それで気が遠くなつて……」

四人がケン太のしたことを説明すると、信じられないといった表情になる。

「そんな、ぼくがアキラを殺そうとしたんだなんて……」

「ガクランのせいだよ！ ガクランがケン太さんを守りうとしたんだつペ！」

キヨシが叫んだ。

ケン太はじぶんのガクランを見おろした。

「ガクランが……？」

伝説のガクランはあれほど戦いのあつたあとだとこゝのに汚れも、裂けもせざまるでクリーニングが済んだすぐ後のように綺麗なままだ。

ふらふらとケン太は歩き出した。

「ヒミが声をかけた。

「ケン太さん、どこへ行くつもり？」

ケン太はふり返った。

薄い、気弱げな笑いを浮かべている。

「ぼくには判つたことがある。この戦いはじぶんひとりの戦いだと思つていた。が、違うんだ。ひとりではできない……いや、やってはいけない戦いなんだ」

ケン太の長広舌をみなはほんやりと聞き入っていた。
ケイスケがおそるおそる口を出した。

「て言いますと？」

「仲間が必要だ……ぼくと一緒に、赤星高校を蘇らせる戦いに参加する仲間が！」

ふたごは一步、前に出た。

「あたしたちがいるわ！ あたしたち、最初からケン太さんの仲間じゃない？」

うん、とケン太はうなずいた。

「だが、まだ三人だ。もつと必要なんだ」

キヨシとケイスケは顔を見合わせた。

「あ、あのう……おら……その戦いに参加してもいい……なんて思つてるんだな……」

そう言うと真っ赤になつた。

ケイスケは肩をすくめた。

「しょうがねえ……キヨシさんがそう言つならおれも一緒になりますよ」

ケン太は笑つた。

「有難う……それじゃ行こうか

「どこへ？」

「会いたい仲間がいるんだ。もし仲間になつてくれるんならね」
そう言つと歩き出す。

四人は顔を見合させ、その後を追つた。

イッパチ（前書き）

仲間をもとめてケン太は再びセイントカインと顔をあわせる。一方
アキラは……。

「アキラと一対一の勝負？ 危険ですか！」

「そうよ、きっと腰をしかけてきますよ！」

ユミとエミのふたりはかかるがわるケン太にアキラとの勝負をやめるよう忠告した。しかしケン太の決意は変わらない。

いつもの校長室である。ケン太は上がりかまちに腰をおろし、ユミとエミはかれの両側に座つて話をしている。

「これはぼくが言い出したことなんだ。それにこれで赤星高校から千石高校の侵入を防ぐことが出来る。ぼくが勝つたら、もう赤星には手を出すなとアキラに言いつつもりだ」

「約束を守るかしら？」

ユミは疑わしそうに言った。

それを校長は天井を見上げ、黙つて聞いている。

ケン太はユミとエミを振り切るように立ち上がった。

「それじゃ、行つてくる

「ケン太さん！」

ユミはたまらずケン太の肩をつかんだ。

ふりむくケン太にユミはポケットから火打石を取り出した。かちつ、かちつと火打石を擦つて切り火を熾す。

「ご武運を」

「有難う」

ケン太はがらりと障子を開けると校長室から外へ出て行つた。

ほつとユミはため息をつき、つぶやく。

「どうしよう……あたしたち、なにもしなくていいのかしら？」

「お姉ちゃん、じつそりケン太さんの後についていかない？」

「そうねえ……」

ユミは寝ている校長をそつと見やつた。

校長は目だけ動かし、口を開いた。

「行きなさい。わたしはいいから。……」

「校長先生。……」

ふたごは田に一杯涙をつかべ、なにか言いかけた。

が、決意したように立ち上るとケン太の後を追つて出口へと向かう。

があーつ、と轟音をたて陸橋を電車が通過していく。その陸橋のたもと、干上がった川原にケン太とアキラが対峙している。

「本当に、これで最期だな？　ぼくが勝てばもう赤星高校には手を出さないと誓うんだな？」

ケン太は叫んだ。

アキラはにやつと笑い、うなずいた。

「ああ、約束する。が、お前が負けたらどうする？　貴様はなにを約束するんだ？」

言われてケン太はぐつと詰まつた。

黙つているケン太に、アキラはおいがぶせるように声をかけた。
「そうだな……もしおれが勝てば、お前はおれの部下になる、とい
うのはどうだ？　お前はなかなか見所がある。いずれおれが社会で
ことを起こす際、幹部としてとりたててやつてもいいと思つて
いるんだ」

「なにをするつもりなんだ？」

アキラは肩をすくめた。

「それは決まつていい。政治家になるか、会社を興すか……それ
とも革命家になるのも面白いかもしれん。お前はどうなんだ。この
まま大人になつて、社会の歯車になるのが望みなのか？
「それのどこがいけない？」

「お前は男じやないか。男と生れたからには、なにか自分の生き
た証しを打ち立てたいとは思わないのか？　よく言つじやないか。
失敗した革命家は犯罪者であり、成功した革命家こそが社会の改革
者と呼ばれると。おれはどっちでもいい。この社会をひっくり返し

てやるのがおれの理みや」

「そんなの断る！」

「おやおや……、ヒアキラは首をふった。

「まつたく話しの合はない男だな、お前は。しかたない、少々痛い田にあつてもらわないといけないようだ」

と、アキラはふり返った。

「だれだ！ そこにいるのは？ 出て来い」

陸橋の陰からのつそりと姿を現したのはキヨシだつた。あいかわらずケイスケをかたわらに引き連れている。

ケン太はアキラを見た。

「ひとりつていう約束だつたら」

アキラはふるつと首を横にした。

「馬鹿な！ おれがあいつらの手助けなど必要とするわけがない！ キヨシ、なぜ来たんだ？」

「お、おひ……」

決まり悪そにキヨシはもじもじとしている。

「こんな喧嘩、やめて貰いたいって思つたんだ……」「なにい？」

キヨシはにやつと笑つた。

きれいに生えそろつた前歯がきらりと光つた。

「キヨシ……いつ歯医者にいつたんだ？」

「行かねえよ。そのガクラン着て、生えてきたんだ。そのガクランはすぐえよ。おれ、生まれ変わつたんだ！」

アキラは田を細めた。

「なるほど、それで恩に感じたというわけか？ おれたちの決着をつける戦いを止めて、お前はどうしたいんだ？」

「わ、わからねえ……でも、兄ちゃんは間違つている……と、思つふん、とアキラは鼻で笑つた。

「お前は考えるな！ 考えるのはおれの役目だ。いいか、そこで立つていろ。余計なことはするんじゃないつ！」

そう言つてアキラは向き直り、だしぬけにケン太めがけて走り出した。

ケン太は身構えた。

瞬間、アキラの長身が宙を舞つた。
はあーっ！

裂帛の気合がアキラの口から鋭くはなたれ、空中をつたいケン太に殺到した。

その気合と共にアキラは空中で前蹴りを放つた。
まるで機関銃の弾丸のようにアキラの前蹴りは構えたケン太の前腕部を何度も蹴つた。

その勢いに、ケン太はぐらつとよろめき数歩、あとずさつた。
が、ガードしただけではなかつた。

とん、と地上に降り立つたアキラにケン太は廻し蹴りをくらわしたものである。

ばしつ！

ケン太の爪先がアキラの腹部に命中した。
鳩尾に完全に決まつている。

本来なら、アキラは身をおりまげているはずだつた。

その動きを予想してケン太はつぎの攻撃に移るつもりだつたのである。

が、かれは平然としていた。

ケン太の表情が一瞬こわばつていた。

「どうした、それだけか？」

せせら笑いを浮かべたアキラは、腕をふつてケン太の頬を張り飛ばした。

がくん、とケン太の膝が折れた。

アキラのビンタは強烈だつた。

目の前に星が飛び、ケン太の視界が暗くなる。
ばしん！

もう一度アキラのビンタが反対側の頬を張り飛ばした。

きーん、とケン太は耳鳴りがして気が遠くなる。

必死に建て直し、ケン太は猛烈なラッシュでパンチをアキラの胸板、わき腹へと叩き込む。

まるで岩を叩いているかのようだ。

アキラは仁王立ちになつてケン太の攻撃を受け止めている。

「まるで効かないぞ！ それがお前のパンチなのか？ 無駄無駄無駄あーーー！」

がくん！

アキラのフックがケン太の顎をとらえていた。

どさ……！

ケン太は仰向けに倒れていた。

その顔を覗き込んだアキラはゆっくりと首をふつて肩をすくめた。

「所詮、喧嘩は素人だ……ふつ、つまらん！」

ケン太は完全に意識を失っている。

アキラはほつとため息をついた。

やはりヨーコにガクランを仕立ててもらつてよかつた。

彼女はアキラに戦闘のためのガクランは作らないと言つたにかかわらず、彼女の仕立てたのは見かけは学生服であるが、中身は完全に戦闘服といつてよかつた。

アキラの着ているガクランの裏地には、衝撃を吸収する新素材の層が縫いこまれていたのである。そのため、ケン太の攻撃がいかに鋭かろうとも、アキラにまったくダメージがなかつた。

さらにガクランにはもうひとつ仕掛けがあつた。

アキラの筋力を増幅するため、ガクランには伸び縮みする素材で出来ていたのである。これにより、一種のスプリングのちからでアキラのちからは強められていた。

これで勝負あつた……。

もうケン太はおれに挑もうなどと考へることはないだろう。

やるなら徹底して相手を叩きのめす。それがアキラの身上である。立ち去ろうとするアキラは、倒れたケン太が身動きするのを認め

た。

！

まさか、まだ動けるのか？

ふらり と、ケン太は立ち上がりつていた。

アキラの眉がひそめられる。

やつは完全に意識を失つていたはずだ。そんなに早く意識を取り戻すはずはないのだが……？

ふらふら、とケン太はアキラにむかつて歩いてくる。

まるで戦いの態勢をとつてはいない。

が、アキラは本能的に危険を感じとつていた。

防御の態勢をとりかけたアキラに、ケン太はいきなり飛び掛けた。

その動きは出し抜けであり、かつ異様なものだった。

がくん、とまるで操り人形が動くようにケン太は両腕をのばし、
防御の構えをとるアキラの腕をかいくぐりその首を締め上げていた
のである。

「ぐ……！」

アキラの息が詰まつた。

おそろしいほどの腕力であつた。

ケン太の両手の指先には信じられないくらいのちからがかかつて
いた。

アキラは必死に振りほどこうとしたのだったが、まるで万力が締
まるようにケン太の指は縮まつていく。

ケン太の目はアキラを見てはいない。といつより、なにも見てい
ないものの目だった。

意思のない操り人形と化したケン太にアキラはぎりぎりと首を絞
められていく。

それをキヨシとケイスケはぽかんとした顔で見守つていた。

ケイスケがキヨシのわき腹をつついた。

「キヨシさん、どうします？ あのままじゃアキラさん殺されちま
いますよー。」

「だ……だつて、おら兄ちゃんになにもするなつて言われて……」

「そうよ！ 止めるべきよ！」

女の声にふたりは顔をあげた。

川原の、土手にふたごの姉妹が立つていた。

「ミミとヒミのふたりである。

「ミミが叫ぶ。

「早く！ 止めないとケン太さん、人殺しになつちやう！」

その声でキヨシとケイスケは弾かれたように飛び出した。

背後からケン太にキヨシは抱きつくと、その腕を離さうともがく。

「す……すげえ、ちからだ！」

キヨシの顔が真赤に染まつた。

が、やはりキヨシは馬鹿力の持ち主だつた。

締め付けていたケン太の腕が、ゆるゆるとアキラの首からはなれていく。

ほつ、とアキラは息を吸い込んだ。

ひいーっ、ひいーっと笛のよつな音をたて、なんども息を吸い込んで。

けほけほ……と、ようやく咳き込み、身をそらせた。

ケン太はキヨシに背後から抱きかかえられつつも、アキラのほつを向いて飛び掛ろうともがいている。

「いまのうち、お帰りなさい。戦いはドロー、それでいいじゃない」

アキラの顔色がじょじょに平静になつた。

首周りをこすり、脂汗を浮かべている。

ちら、とキヨシとケイスケを見る。

「くそ……お前ら、ただじやおかないからなー、覚えておけ！」

捨て台詞を吐くと、後を見ずに土手を登つていつた。アキラの姿が完全に見えなくなると、ふたごはキヨシのほつを見て口を開いた。

「もういいわ、キヨシさん」

ヒミがそう言つと、キヨシは掴まえていたケン太の腕を離した。

ぱつとケン太はふり向きざま、戦おうという姿勢をとつた。

あいかわらず田はうつむくなまだ。

「ケン太さん！」

「ケン太さん、田を覚まして…」

「コミとヒミはかわるがわる叫ぶ。

と、ようやくケン太の田に表情が戻ってきた。

視線がはつきりし、田の前の現実がわかつてきたようだ。

「コミ、ヒミ……それにキヨシさんとケイスケ……」

がくり、と膝をあつた。

せいぜいと荒い息をつく。

「ぼくはどうなったんだろ？……アキラに殴られて、それで気が遠くなつて……」

四人がケン太のしたことを説明すると、信じられないといった表情になる。

「そんな、ぼくがアキラを殺そうとしたんだなんて……」

「ガクランのせいだよ！ ガクランがケン太さんを守りうとしたんだつペ！」

キヨシが叫んだ。

ケン太はじぶんのガクランを見おろした。

「ガクランが……？」

伝説のガクランはあれほど戦いのあつたあとだとこゝのに汚れも、裂けもせざまるでクリーニングが済んだすぐ後のように綺麗なままだ。

ふらふらとケン太は歩き出した。

「ヒミが声をかけた。

「ケン太さん、どこへ行くつもり？」

ケン太はふり返った。

薄い、気弱げな笑いを浮かべている。

「ぼくには判つたことがある。この戦いはじぶんひとりの戦いだと思つていた。が、違うんだ。ひとりではできない……いや、やってはいけない戦いなんだ」

ケン太の長広舌をみなはほんやりと聞き入っていた。
ケイスケがおそるおそる口を出した。

「て言いますと？」

「仲間が必要だ……ぼくと一緒に、赤星高校を蘇らせる戦いに参加する仲間が！」

ふたごは一步、前に出た。

「あたしたちがいるわ！ あたしたち、最初からケン太さんの仲間じゃない？」

うん、とケン太はうなずいた。

「だが、まだ三人だ。もつと必要なんだ」

キヨシとケイスケは顔を見合させた。

「あ、あのう……おら……その戦いに参加してもいい……なんて思つてるんだな……」

そう言うと真っ赤になつた。

ケイスケは肩をすくめた。

「しょうがねえ……キヨシさんがそう言つならおれも一緒になりますよ」

ケン太は笑つた。

「有難う……それじゃ行こうか

「どこへ？」

「会いたい仲間がいるんだ。もし仲間になつてくれるんならね」

そう言つと歩き出す。

四人は顔を見合させ、その後を追つた。

ケン太の向かつたのは例の廃屋だつた。

荒れ果てた建物の前で、声を張り上げる。

「セイントカインのみんな！ 出てきてくれないか？ 高倉ケン太です」

その声が終わらないうちに、大音量でセイントカインのテーマソングが流れ出した。

初めてここにきたキヨシとケイスケはあっけにとられ、きょときょとあたりを落ち着きなく見回している。

「セイントレッド！」
「セイントブルー！」
「セイントイエロー！」
「セイントグリーン！」
「セイントピンク！」

廃屋の屋上に五人の戦隊が現れた。

あいかわらずポーズを決め、おたがいの手をとると人間ピラミッドをつくる。

さつと離れると、ちゅ~どーん……といつ音とともに廃屋のちかくで爆発がおきる。

わつ、とキヨシとケイスケは驚いて首をすくめた。

爆発がおさまると、五人は屋上から消えていた。

気がつくといつの中にかケン太の目の前に到着していた。

「何のようだ？ まだ赤星高校は元通りになつていらないんだろう？」レッドの仮面をつけた比呂英雄が仮面越しにくぐもつた声で話しかけた。

ケン太はうなずいた。

「そのことなんだが、今までぼくは間違いを犯していたことに気づいたんだ。高校を元通りにするにはぼくひとりのちからではできない。みんなの協力が必要なんだ。だから、ぼくの戦いに参加してくれないか？」

「ぼくたち？」

五人はあきらかに戸惑っている様子だった。

「ぼくら戦いは苦手なんだ」

それを聞いてふたごが叫んだ。

「でもあなたたち戦隊なんでしょう？ セイントカインってグループ、

作っているんでしょう？ それなのに戦いたくないなんて「

ケイスケが口を挟んだ。

「さつきの爆発。すごかつたなあ。あんたらあれ使つたらどうなんだ？ だれだつて爆弾だつたらビビるぜ」

レッドは首をふつた。

「あれは爆弾じゃないよ。爆発に見せかけた演出なんだ」「へえ？ と、不審顔なケイスケにレッドは腰のベルトのボタンを押した。

ちゅどーん！

爆発音が派手に鳴り響いた。

「本当の爆発音はこんなもんじやない。たいてい”ぱんつ”って大きな音が鳴るだけだ。この音は……」

ふたたび「ちゅどーん」という音。

「テレビや映画の効果音係りがひねりだした音だよ。それらしく聞こえて、迫力があるということを使われているけど。それにあわせてエア・コンプレッサーから空気を送り込んで土ぼこりを巻き上げているんだ。第一、爆薬を使うには免許がいる。ぼくたちそんなの持つていなからな」

ケイスケはがっかりしたようだつた。

「なんでえ、つまんねえの。でも、なんでいちいち爆発するんだ？」「かれらは仮面のおくで顔を赤らめ ケン太にはそう思えた

ようだつた。

「だつてそりや、戦隊ものには爆発がつきものだからな！」

「それじゃあ、協力はしてもらえないのか……」

ケン太がつぶやくと、ケイスケが相槌をうつた。

「そりやあ、そうさね。なにしろ伝説のガクランを着ているわけじやねえからなあ」

それを聞いたケン太の瞳がきらりときらめいた。

「そりやあ、その手があつたか！」

全員に向け、話しかけた。

「みんな、今日のところはこれで解散だ。ぼくは行くところがあるから、これで失礼する。あとでまた会おう！」

そう言って、早足になつてさつさと立ち去つた。

後に残されたみんなは、あっけにとられていた。

「なにか思いついたみたいね」

「なにを思いついたのかしら？」

ヨミとヒミは顔を見合させた。

ケン太はふたたびヨーロの店を訪れていた。

かれを招き入れたヨーロは、ダイニングで向かい合い、ケン太の申し入れに目を丸くした。

「伝説のガクランを大量注文したい、ですって？」

ケン太はうなずいた。

「そうです。この伝説のガクランは着るものに勇気と、不正に負けない正義感を引き起こす効果がある。ぼくひとりでは高校を元に戻す戦いは続けていられないけど、ガクランをみんなに着せれば、全員で戦える。そうじゃないですか？」

「でも、でも……」

ヨーロは言葉を失つていた。

思いもかけないことである。

ぽつりとつぶやいた。

「そりやあ、型紙は残つてやれないことはないけど

……」

「できるんですね！」

ケン太は身を乗り出した。

ヨーロは首をふつた。

「でも大量生産したからつて、他の人にもおなじような効果があるとは思えないわ。なにしろあたしのお祖父さん手すから縫つたものですからね。微妙なラインとか、縫製の加減とか……きっとそのどちらは失われてしまうかもよ」

ケン太は笑つた。

「そうですね。それは判っています。でも、着る人間に、そのことは黙つていれば済むことです。要は気持ちの持ちよつ、そういうじやないですか」

まあ……、とヨーロは苦笑した。

「あなたも悪い人になつたみたいね。そのガクランのせいしから？」

どうですかね、とケン太は肩をすくめた。

ヨーロは立ち上がつた。

「いいわ。あなたの提案、呑みましょつ。さつそく明日から知り合いの縫製工場に頼んでみる。一週間くらいしたら、またおいでなさい。そのころになつたら、お渡しできる品物ができるから」

有難うございましたと、ケン太は頭をさげた。

そのじゆ……。

アキラは疲労困憊した身体で、千石高校に向かつっていた。

あの戦いはアキラからすべての体力を奪つていた。

おそらくヨーロの仕立てたこの学生服のせいだ。

アキラのちからを限界まで引き出す効果があるかわり、すべての体力を榨り出したのである。傍田には堂々とした歩き振りを見せていても、おそらくいまのアキラには、三才の幼児すら脅威となつていただろう。

高校の建物が見えてきて、アキラは眉をひそめた。

なにかが違う。

やがてそれに思い当たり、かれは愕然となつた。

いつも校門前に立つて千石高校の制服を着て歩哨係がいる。いつも立つてるのは万石高校の制服をきた数人の生徒である。

アキラのこめかみにふつふつと血管が浮いた。

おれのいない間に万石のやつらが攻めてきたのだ！

それにしても千石高校の生徒たちはどうしたというのだろう？

こんなときのために訓練を重ねてきたはずなのに。まさか！

タツヲが自ら指揮をとったというのか？

それなら納得できる。

アキラは疲れた身体に鞭打ち、一步一步進んでいった。

万石高校の制服を着た生徒は、アキラを認めじろりと睨んだ。が、手を出そうとはしなかった。

かれらの痛いほどに凝視を浴びながら、アキラは校庭に足を踏み入れた。

そこでかれは再び信じられない光景を目にした。

かきーん！

澄んだ音が空に響き、白球が宙に舞つた。

それを追つて野球部の制服を着た生徒がグラブを手に駆けていく。惜しいところで白球はグラウンドに転々とした。それを見たランナーは全速力でダイヤモンドを一周し、ホームに滑り込んだ。

「セーフ！」

わあ！ という喚声が響く。

なんと野球の試合だった。

きりきりきり……！

アキラの歯が軋んでいる音だった。

かれは千石高校を手中に収めてからというもの、クラブ活動の全面禁止を打ち出していた。かれの目的にクラブ活動など無用だからだ。

無言でアキラは校舎に向かった。

通路を歩くと、いたるところ談笑している生徒たちの姿が目に入ってきた。中にはふたりきりで熱心に話し合っている男女のカップルもあった。無論、アキラは男女交際も禁止していた。かれらはアキラの姿を見てぎょっとなったようだが、それでも談笑はやめようとしなかった。

アキラは校長室を目指していた。

そこにタツラの姿を求めて。

「やあ、アキラさん。お帰りなさい」

アキラを迎えたのはイッパチだつた。かれはいつもアキラが座つているはずの、デスクの向こうに腰をすえている。

「きさま！ こんなところでなにをしている？」

アキラが怒号すると、イッパチはポケットから棒つきのキャンパンを取り出し、口に咥えた。

「なあに、現在この千石高校はあたしが管理することになったんですね。タツラさんとの約束でね」

「裏切つたな！」

「裏切つたとは人聞きが悪い。あつしがいつ、アキラさんの部下になつたというんです？ あたしやただの便利屋。アキラさんもそのおつもりだつたでしょ？」

「貴様、タツラと密約を結んだろう。それが裏切りといつんだ！ この千石高校はおれの高校だ！」

「いまではそうではないですね」

のんびりとつぶやき、イッパチは外をながめた。

校庭では野球部、サッカー部、テニス部らの部員が熱心に練習を重ねている。それを眺め、イッパチはつぶやいた。

「ねえ、アキラさん。こういう景色が本来の高校の姿じゃないですか？ あんたの軍事訓練なんて喜んでいるやつは誰一人いなかつた。これからはああしたことはすべてご破算といきましようや」

飛び掛ろうとしたアキラだつたが、だしうけに隣の部屋のドアが開いたのに気づき、そちらにふり向くと、屈強な男子生徒が数人入ってきたところだつた。

「こんなこともあるうかと、柔道部と空手部、それに相撲部のキヤブテンを呼んでおいたんだぞ。もしアキラさんがあたしに飛びかかるとしたら、この人たちがあたしを守ってくれるってえ寸法なんで」

アキラは悔しさのあまり手を開いたり握ったりして必死に怒りに耐えていた。

「あんたが禁止したことはずべて元通りにしちゃました。みんな大喜びですよ。これからは、あっしが生徒会長となつて、千石高校を当たり前の高校にしていくつもりです。ということで……」

イッパチはぱちりと指を鳴らした。

すると運動部のキャプテンたちが入ってきたところから千石高校の校長が入ってきた。

校長はアキラの凝視にぎくじとなつたようだが、それでもひるまず背を伸ばし口を開いた。

「アキラくん。わたしは万石高校のタツヨくんの協力でふたたび校長を続けることとなつた。そして最初にやることとはわが校長生活で一度もやつたことのないことだ」

決意が高まつたのか、息を吸い込んだ。

「それはきみの退学だ！ きみは本日これから、この瞬間に千石高校の生徒でなくなつた！ わたしは無念だ……。生徒に退学を命じるなんて教育者として恥ずかしい。しかしこうしなくては、高校を元に戻すことはできないからな」

イッパチは立ち上がつた。

「そういうわけで、あんたはこの高校の生徒でもなんでもなくなつたつてことだ。もし、再びこの高校に来たときは、部外者の侵入つてことで警察を呼ぶことになりますからあしからず」

アキラは物も言えないほど怒りに震えていた。

唇を噛みしめると、くるりと背を向け大股に校長室を出て行く。荒々しい足音が遠ざかると、イッパチはほつとため息をついた。校長にうなずくと、席を譲つた。

「校長先生。これからは先生がここのあるじでいじれなす。よろしく

……」「有難う……。わたしはなんと言つたらいいか……」

校長の椅子を撫でさすりながら、かれは感極まつっていた。

それを見て、イッパチは校長室を出た。
出たところにタツヲが待っていた。

「アキラは行つたかい？」

「へい、とイッパチはうなずいた。

「このままじゃ済まないだらうな」

タツヲがそう言つと、イッパチはくくつ、と笑つた。

「まあね、アキラさんの性格だ。絶対あきらめたりはしないでしょ
うね」

「どうするつもりだ？」

イッパチはびしゃりと額を叩いた。

「お任せを！ あつしにま計略がいざるす。アキラさんのことまと
うに調べがついておりやして、弱みを握つていてるんでげす」

ふうん、とタツヲは顔をあげた。

「さすがだな……そのままで、おれのことも調べててるんだらう?
おなじことをおれにするつもりか？」

イッパチは手をあげた。

「い冗談を！ タツヲさんにあつしがなにかしようなんて、考えた
ことも、いざとせん。あつしはこの千石高校が当たり前の高校になつ
ていてくれりやあ、それで充分でいざんすよ！」

タツヲは肩をくめた。

「怖い男だな、お前は。おれは誰よりもお前が怖ろしい。敵にはま
わしたくないもんだ」

イッパチはペロリと舌を出した。

遭遇（前書き）

タツラがケン太の前に姿をあらわす！ケン太そつくりの容姿を持つ
かれの正体とは？

翌朝、自宅の正門を出たところでケン太はアキラと顔をあわせた。思わず身構えるケン太に、アキラは片手をあげた。

「待て！ 早まるな。今日は話し合いに来た」

「なに？」

「お前に頼みがある。話を聞いてくれないか？」

「いつたい、なにを頼みたいというんだ」

アキラは千石高校がタツラの支配下におかれたことを語った。そして生徒会長にイッパチが納まつたことを。それを語るアキラの表情には悔しさが溢れていた。

「頼む！ おれはもう一度千石高校を取り戻したい。一緒に戦つてくれないか？」

ケン太は絶句した。

「こともあろうに、アキラが共闘を申し入れてきた？」

信じられなかつた。

そんなケン太の表情を見て、アキラはいきなり膝をつき両手を地面において頭を深々とさげた。土下座している。あのアキラが……！
「頼む！ お前の言うことならなんでもきく！ おれはなんとしても千石高校を取り戻したいんだ！」

ともかくケン太はアキラと一緒に千石高校に赴くことに決めた。なにがなんだか判らないが、事情を知るには行動してみることだと判断したからである。

じつはアキラはケン太に言つていことがある。

千石高校が普通の高校に戻つたことを。クラブ活動や、生徒同士の交流など、普通の高校生活が蘇つたことを語つていないので。もしそれを知れば、ケン太は決して協力すまい、というアキラの読みだつた。

千石高校の正門には、あいかわらず万石高校の制服を着た生徒が数人、登校してくる生徒たちを鋭い視線で監視している。

「あれは？」

遠くからその様子を見てケン太はアキラに質問した。

「万石高校のやつらだ。やつら、おれが近づくのを見張つてやがるんだ。こっちへこい。裏道がある」

アキラはケン太の袖を引っ張り、校舎の裏手へと案内した。裏手は住宅街になつていて、校舎の塀が長々と伸びている。その塀に切れ目があり大木が半分幹を覗かせていた。

おそらく塀を建てた当初、ここに大木があつたのを切り倒さず残すため、塀をその部分だけ周りを囲むように工事したらしい。

「ここを登れば、校庭へ出られるんだ」

そう言うとアキラはするすると大木の幹によじ登り、いろいろしたようにケン太を見おろし叫んだ。

「早く登れ！ 人が来る」

ケン太はアキラに続いて大木を登った。

すぐに目の前に校庭があつた。といつても茂みで、ふたりの姿は生徒たちからは隠れている。

校内に侵入すると、アキラは茂みに身を潜め頭を低くさせながら素早く移動した。

校舎の裏口に近づくと、あたりを素早く見回しへドアを開く。

校舎の中にはいると、アキラはほつとため息をついた。

「だれにも見られなかつたな？ よし、こっちだ」

そう言うと非常階段を登つていく。

さつと物影にかくれ、アキラは廊下を見渡した。

「あれが校長室だ。こい！」

ふたりは廊下を移動した。

校長室のドアの前に立つと、アキラはさつとそれを押し開いた。

校長のデスクのむこうにイッパチが座っていた。ふたりが入つてくると、イッパチはちょっと驚いたようだつた。

「これはこれは……アキラさんじゃないですか。それにケン太さんも一緒に、驚きがきりのこんこんしき……」

「黙れ！」

アキラは一步前へ出た。

「おつと！ それまで！」

イッパチはさつと両手を挙げて見せた。

「アキラさん、あんたに会わせたい人がいるんだ
「なに？」

どすどすどす、という足音が外の廊下から近づいてくる。アキラとケン太はふり返り、足音の方向を見た。ぬつ、とひとりの人物が校長室のドアに現れる。さつ、とアキラの顔から血の気がひいた。

「そんな、まさか……」

「アキラちゃん！」

入ってきたのは中年の女性だった。全身色彩の爆発といった感じで、上から下まで派手な原色のスースで固めている。ひどく太っていて、ケン太はキヨシを思い出した。彼女が入ってきた瞬間、強い香水のにおいがケン太の鼻を襲っていた。

彼女はじろりと室内で立ちすくんでいるアキラを睨んだ。

「アキラちゃん。一体、こんなところでなにをやっているの？」

真つ赤な口紅をひいた唇が大きく開き、あたりにきんきんするような大声をあげる。あまりの音量に、校長室のガラス戸がびりびりと震えていた。

「そんな……なんでここに……？」

アキラは首をゆるゆるとふり、呆然となっていた。

「まったくちょっと目を離したら高校で軍隊ごっこなんて、あたしはそんなこと許したおぼえはありません！」

「ママ……」

アキラは泣きそうな顔になっていた。

「ママだって……？」

ケン太はつぶやいていた。

ではこの女性がアキラの母親なのか。
そうか、キヨシは母親似なんだな、とぼんやり思っていた。

応接セツトのソファに彼女は横座りになり、バッグから細長いシガレットを取り出し、口に咥えた。

さつとイッパチが立ち上がり、彼女のもとへ近づくとライターを灯してシガレットの先端にかざす。

有難うとも言わず、彼女は当然のよつに煙草を吸いつけ、ふうーっと煙を吐き出した。

アキラといえば、ものも言わず、窓の方向に顔をむけたまま固まつている。

「アキラちゃん！」

母親が叫ぶ。

びくつ、とアキラの肩が動いた。

「なにしてるの？ いい加減、家へ帰りなさい！」

アキラは答えない。

ふん、と母親は鼻を鳴らし立ち上がった。

すかすかとアキラの側に近づくと、その耳をぐいっと掴む。

「わっ！」

そのままぐいぐいと耳を掴んだまま歩いていく。

「なにすんだ、やめろよおママ！」

「許しませんよーーーまったく下らない遊びばかり覚えて……」

やめてくれよお……。アキラの声は泣き声になっていた。そのまま耳を母親に掴まれたまま引きずられていく。

ふたりの言い争う声が遠ざかる。

ふつ、とイッパチは肩をくめた。

「アキラさんの唯一の弱点がお母さんだつてことで、あつしがお呼びしておいたんでげすよ」

「イッパチさん……」

「おっと、イッパチと呼び捨てにお願いしたはずですよ…」
「へへへ、といッパチは笑つた。

「まあこれでアキラさんは一度とこの千石高校に顔を出す」とは叶いませんまい。この高校にも平和が来たつてことですねえ」

「平和？ それじゃ千石高校は赤星に？」

「あはっ！ そんなことでござんすか？ ご心配なく。あつしはアキラさんのような、繩張り争いなんてまつぴら御免こいつむります。当たり前の高校生活、これがあつしの望みでやんすよ」

「そうか……」

ケン太は気が抜けたような表情になつていていた。

こんな形で決着がつくとは思つてもいなかつた。

これで赤星高校はもとにもどるだらう。ケン太の役目は終わつたのである。

すくなくともケン太はそう思つていていた。

が、それが間違いであることをやがてかれは思い知ることになる。

イッパチが上目がちになり、話しかけた。

「ところで……ケン太さんに会わせたい人がいるんですね」

「ぼくに？」

「へい、ケン太さんまで一緒に来るとは思つていなかつたのでそのお人にはなにも言つていませんが、なあに勘の鋭い人だ。いまごろ、この屋上でケン太さんをお待ちになつていなさることでしそう」

「屋上？」

ケン太は天井を見上げた。

「さようでござんす。ケン太さんさえよろしければ、会いに行つたらいががです？」

イッパチの顔を見て、ケン太は決意した。

「いいよ、会つてみよう」

うなずくと校長室を出て行つた。

屋上への階段を登つて外へ出る。

空はからりと晴れ上がり、まぶしい陽射しが屋上を照らしていた。屋上のぐるりを取り巻いているフェンスの側に、こちらに背を向けひとりの生徒が立っていた。

「ようこそ、高倉ケン太くん。イッパチがここに案内したんだね」ケン太は立ち止まつた。

眉をひそめる。

背中を見せた生徒はくくつ、と肩で笑つて見せた。

「おつと自己紹介がまだだつたね。ぼくはタツラといつて、万石高校の生徒だ」

「タツラ？」

ケン太は思い出していた。そういうえばそんな名前の生徒が万石高校を支配しているとか聞いた。

「きみは万石高校の……えーとなんていうのかな……番長なのか？」

「人からはそう言われているよ。ぼく自身とは言つど、そんなこと気にしてはいなきどね」

ケン太はその背中に話しかけた。

「ぼくを待つっていた、と言つたな。なぜイッパチがぼくをここに寄越すか判つたんだ？」

「簡単なことさ。きみとアキラのふたりが校舎の裏手から侵入していくのが見えた。アキラが来ることは予想していたが、きみまでついてくることは予想外だつた。その後の展開は予想がつく。アキラは母親に連れられて自宅へ帰つていくだらう。きみはと言つともともと今回の件については部外者だ。そこでイッパチがきみとぼくを出会わせるよう画策することは考え付く。だからここで待つことにしたのさ」

「顔を見せろよ」

ケン太はいかわらず背中を見せたままのタツラに苛々していた。

第一、これでは話しづらいではないか。

タツラはゆっくりとふり返つた。

その顔を目にし、ケン太は目を見開いた。

そのケン太の表情を見て、タツヲはにやりと笑った。

「ようこそ、高倉ケン太くん」

タツヲの顔はケン太に瓜二つだった。

ゆつくりとタツヲが歩き、ケン太の目の前に来ると立ち止まった。ふたりがこうして並ぶと、まるで鏡に映したようにそつくりであった。

「きみは……誰だ！」

絞り出すような声をたて、ケン太はタツヲの顔を見つめて質問した。

「ぼくかい？　ぼくはただの万石高校の生徒さ。それ以外、なにがあるというんだ」

タツヲの反間に、ケン太はぐつと詰まった。

あらためてそう返されると、なにも言つことが思いつかなかつた。

ただタツヲの顔がケン太そつくりなことを別にして。

かれは髪の毛を真っ赤に染め、ケン太と同じようにリーゼントにしている。学生服はカラーが高く、裾が長く、ちょっとケン太の着ている伝説のガクランに似ていた。色合いは黒に近いブルーで、刺繡などの飾りはない。

たしかにタツヲの顔はケン太そつくりだが、目鼻立ちの道具立てが似ているだけで、その表情はかなり違つていて。

タツヲの顔はどちらかと言うと狡猾そうな印象をあたえている。いつも油断なく目が動き、口もとには薄ら笑いがつねに浮かんでいた。

タツヲはすこし前かがみになつた姿勢で、それは常に獲物を狙うなにかの獣のような印象を与えていた。ゆつくりとケン太の顔を眺めたタツヲはうなずいた。

「なるほど、確かに似ている。イッパチが驚いたのも無理はない」

「きみはここで何をしているんだ」

ケン太は鋭く尋ねた。

「ぼくかい？　なに、イッパチに頼まれてね、千石高校の平和にす

「しだけかかわりを持つたと言つ次第だ」

「きみが？」

「そうだ、とタツヲはうなずいた。

「万石の生徒たち、数人がここに来ている。アキラのような勘違いをするやつがないとも限らないんでね。まあ、用心棒のような役割かな」

ケン太の胸にじょじょに闘志がわいてきた。

嘘だ！

タツヲの言つことは、一から十まで嘘だ。

かれが千石高校の平和にこれっぽっちも急身があるわけがない。

おーい、そちらへ行つたぞー！

校庭のほうから玉をおつて野球部の生徒たちが声を掛け合つている。ぽーん、ぽーんというテニスのラリーが続き、楽しそうな笑い声が響いていた。

典型的な当たり前の高校の日常がここにはあった。

その裏側に、なにかケン太の想像もつかないような企みが隠されている。そんな直感がケン太の胸にあふれていた。

さてと、とタツヲは肩をすくめ歩き出した。

「今日のところ、もうぼくの用はない。一度、ケン太くんの顔も見たかったし顔合わせはすんだ。それではこれで、ぼくは失礼しよう」そのままケン太の横をすりぬけ、屋上からの階段口に歩いていく。階段を降りる直前、かれはケン太にふり向くと声をかけた。

「一言いつておく。多分、きみは自分の父親にぼくのことを尋ねようと思つてゐるだろうが、無駄なことだ。かれはなにも知らないよ。そんなことを聞いて、家庭に無用な混乱をひきおこすことは、あまりお勧めできかねる。いいね、ぼくのことは単純に、他人の空似としておくんだ。そういうこともありえないことではないだろう？」

「じゃ、と言つてタツヲはケン太の視界から消えた。

はつ、となつたケン太は慌てて階段に急いだ。

が、すでにタツヲは階段を降りていつて見えなくなつていた。

階段の降り口で、ケン太は金縛りにあつたよつに立ちすくんでいた。

千石高校（前書き）

タツヲは千石高校の校長に取り引きをもちかける。かれの狙いとは
なにか？

そんなことがあって数日後。

千石高校の正門を校長は急いで通り抜けた。

万石高校の制服を着た、数人の生徒が見守る中、かれは眉を険しくしかめ、校舎へと入っていく。唇は噛みしめられていた。

校長室に入ると、イッパチが出迎えた。

「ああ、どうも。先週、アキラさんが来ていたことお報せしていかつたんで……」

イッパチの言葉に校長はぎょっとなった。

「アキラが……」

「なに心配」無用で「ぜとすよ。あたしが追い返しましたから」

「きみが」

校長は手を丸くした。

「はい、さよう。もうあいつがこの千石高校にちょっとかいをだすことば」ぜとせんから、「安心を」

校長はほつとため息をついた。

デスクに向かうと、どさりとちからなく椅子に座り込む。デスクの表面上に両手を乗せ、握りしめた。

「なにか心配」とでもおありで？」

イッパチが話しかけると、校長は顔をあげ叫んだ。

「きみ！ イッパチくん。あれはなんだね？」

「あれ、と申しますと？」

校長は窓の外を指差した。指先は、校門にむけられている。

「決まっているじゃないか。校門の前にたむろしている万石高校の生徒だ。あいつら、いつになつたら元の高校へ戻るんだね？ もう、

千石高校はふつうの高校になつたんじゃないのかね？」

「さあ……てね」

イッパチは空とぼける。

校長は額に青筋をたて、怒っていた。

「きみとあのタツラの間でどんな密約がなされたか知らん。が、この千石高校はわたしの高校だ。あんな、他校の生徒がうるさうりしてもらつては困るんだ」

「なにが困るんですか？」

その声に校長は蒼白になつた。

「この声は……」

もちろんタツラのものだつた。

校長室の入り口からふらりと姿を現したタツラは、薄笑いを浮かべている。

「校長先生、この千石高校が大事なら勇気を持つて対処すべきでしたね。他校の、しかも番長などと呼ばれている生徒のちからを借りるなんて、じつに浅はかというしかない。もしこのことが教育委員会に知られたら、どう言われるでしょうね？」

「きみは……」

校長は震えだした。

顔にはじつとりと冷や汗が浮かんでいる。

「きみはわたしを脅迫する気なのか？」

「脅迫、人聞きの悪いことを言われては困りますねえ。ぼくはただ、事実を言つているだけなんです。それではぼくはここで失礼しなくては……どうもあなたは話し合いする気はなさそうだし、ぼくとしてもここは正直に事実をどこかの新聞社とか、週刊誌に話しておかないとあとで何を言われるか……」

「ど、ど、どうして新聞社とか、週刊誌なんだ！」

「いや、ぼく案外口が軽いんで、つい聞かれていないこともペラペラ喋ってしまう悪い癖があるんです。それじゃこれで……」

「ま、待つてくれ！」

校長は悲鳴のような声をあげた。

「待ちたまえ！ な、話し合いだつたかね？ きみ、なにを話し合いたいんだ？ 聞かせてくれ」

「おたがいの利益になることですよ。校長先生」

「利益？」

「そうです。あなたは千石高校を当たり前の高校にしたい。そしてぼくは高校生活を終えるまで、万石高校、千石高校ふたつの高校に対し、影響力を保持したいと思っているんです。このふたつの目的は両立します。ぼくの提案が受け入れられたらね」

「どうすればいいんだ！」

タツヲはにやりと笑うと校長のそばに立ち、耳打ちをした。校長はぼう然とタツヲを見上げた。

「そんなこと……」

「簡単ですよ。これでお互い、万々歳というわけです。あなたは荒れ果てた高校を立て直した名校長というわけだし、ぼくは表に出ることなく千石高校に影響力を行使できる。どうです？」

校長はちからなくうなずいた。

がっくり肩を落とし、両手で顔を覆つた。

「まだいるのか？」

赤星高校の校長室で、ケン太とヨミとエミのふたご。そしてキヨシとケイスケが顔をあわせていた。ケイスケは千石高校のいたるところに万石高校の生徒たちがいることを報せに来たのである。

「へい、それが妙なんだ」

「なにが妙なんだい」

ケイスケはすっかりケン太に対し、配下の口調になつていて。ケン太は校長室の上がりかまちに腰をおろし、ケイスケは入り口の土間に膝をついて見上げている姿勢をとっている。その格好は、時代劇の親分と子分といった調子だ。どうやらケイスケにとつて誰かの子分になつてているのはとても具合のいいことのようであった。

アキラが母親に連れられて千石高校から去った後、ケイスケは自動的にキヨシの子分として行動していたが、そのキヨシがケン太の配下になる構えを取ると、嬉々として自分も子分となつて収まつた

のである。

「たしかにやつら、万石高校の生徒なんですかね、どういうわけだか千石高校の制服を着込んでいるんです。傍田こは、千石高校の生徒のふりしてやがって……」

ふうん、とケン太は腕を組んだ。

「で、タツラは？」

「ええ、あいつも時々顔を出すみたいで。そんときも、万石の連中になにか指示を出していくようですがね……」

ケン太はキヨシに話しかけた。

「キヨシくん。きみのお兄さんはこまどうしている？」

ふいに自分の名前を呼ばれ、キヨシはあわてて口もとに運んでいた焼き芋を飲み込んだ。あいかわらず、なにか食べていないと落ち着かない様子だ。

「兄ちゃん、ずっと勉強部屋にこもってばかりいるんだな。母ちゃんが家庭教師の先生を呼んで、受験の準備するんだって張り切つていいけど、あれじゃ兄ちゃん可愛そうなんだな」

「受験？」

「うん、なんでも兄ちゃんには外国の学校に行かせるつもりらしい。日本の学校にやると、またいけないこと企むからって言つてたな。でもいけないことってなんだ？」

「ふたご」が口を開いた。

「連中、こんどはこの赤星高校に来るのかしら？」

「またなの……。やつと千石高校の連中がいなくなつたと思つたら今度は万石高校だなんて……いつたいつになつたらこの高校に平和がくるのかしら？」

コミとヒミは顔を見合させ首を振つた。

「守るんだ！ 生徒を集め、この学校を守る準備をしようじゃないか！」

ケン太は叫んだ。

闘志が湧き上がる。

かれらの報告で、あらたな目標を見出したケン太の顔はやる気に満ちていた。

コミが手を叩いた。

「そうよね……！ あたしらがやらなきゃ、誰がやるのよー…」

ヒミも立ち上がる。

「さつそく集めましょ。あたしたち、赤星高校に通つていた友達に声をかけるわ！」

ケン太はうなずいた。

「よし、ぼくはセイントカインの連中に会つてくる」

ケイスケが口を開いた。

「でもあの連中はしり込みしていただじやないですか。引っ張り出せますかい？」

「それはぼくに任せてくれ」

ケン太は微笑をうかべていた。

それじゃ行動に移ろうと、全員立ち上がり外へと出かけていった。ひとり残されていた赤星高校の校長は、しばらく布団のうえで仰向けになつて天井を見上げていたがなにことか決意した顔になつていた。

苦労して起き上がると、枕もとの物入れを掘んだ。

蓋を開き、中から取り出したのは携帯電話であった。

手馴れた様子でメール画面を開き、すばやい指の操作で文字を入力し始める。

複数のあて先に同時に送信するよう設定すると、送信ボタンを押した。

送信完了のメッセージに、校長はにやりと笑みを浮かべていた。なにごとか勝利を確信している表情である。

かれのメールのあて先はいったいだれであったのだろうか？

対抗（前書き）

さまざまな人間がタツヨに対し対抗策を講じる。ケン太、ユミとエミのふたごは赤星高校に生徒をとりもどすべく、奮闘する。

その部屋には十人以上の人間が座れるよう椅子が並べられていたが、実際埋まっているのは半分以下だった。

椅子に腰をおろしているのは男性、女性半数ずつだが、全員に共通しているのは年配であることと、みなどれかの高校の校長であるということである。

「こ」は「校長同盟」という集まりの場であった。

もともと付近の高校の校長同士の親睦の場として始まったのだが、やがて高校に暴力や犯罪が荒れ狂うようになつて、ただの親睦会からそういう問題を話し合い処理するための委員会へと発展した。もちろんこの場で話されることは秘密で、その処理方法も表に出せないようなことが多い。

その結果、きわめて秘匿性のある集まりとなつたのである。

「で、かれの報告は確かなのかね？」

「どうやら一座の中でもつとも年長で、発言力がありそうな老人が口を開いた。

隣に座る同年代の鶴のように痩せた老女がうなずいた。

「そのようですね。千石高校の校長にも確かめてみました。どうやら、万石高校のタツヲというのは”闇のガクラン”的持主らしいですわ」

彼女が”闇のガクラン”といつて言葉を発したとたんに全員が顔をしかめ、うなだれた。どうやらその言葉はタブーになつてゐるらしい。

「その、万石高校の校長はどうしたんだ？なぜ出席していない？」

ひとりが叫んだ。彼女はそのほうを見て、やわらかな笑みを浮かべた。

「お忘れですか？万石高校の前校長は、この委員会の意義を否定して、現校長に引継ぎを拒否したんですよ」

「年々、集まりが悪くなつていい。去年はまだ人数がいたはずだ。それが、今日はすでに半数を割つてしまつた」

「しかたないよ、みな年なんだ。身体をこわしたり、死んだのも一人や二人じゃきかない」

「なぜつぎの校長に引き継がない？ この委員会は、ちゃんと引き継がないとやつていけんだろう」

「みな忙しいのさ。それに、この委員会そのものの存在意義を疑っているものも多い」

「なぜだ！ 今度のことのようなことが持ち上がることもあるだらう」

「まあまあ、それは後にしよう。とにかく今日の議題に戻ろうや。なにしろ”闇のガクラン”が現れたのだ。ほってはおけん」

文句を言つていた男はぶつぶつとつぶやきながらそれに同意した。

「いつたい、”闇のガクラン”とはなんだね？ なぜそれが問題なんだ」

さつきの鶴のように瘦せた老女が答えた。

「”闇のガクラン”とは”伝説のガクラン”の影なんですね。学校が荒れ果て、暴力が渦巻くところ生徒、教師の願いに答え現れるのが”伝説のガクラン”。そしてその”伝説のガクラン”の影として”闇のガクラン”も出現する、と言われてあります」

「それじゃまず”闇のガクラン”のことを報告した赤星高校の校長の話を聞こう」

みなそれにはなずいた。

かれらの目の前にテレビのモニターがつながれた。モニターに、布団に上半身を起こした赤星高校の校長の姿が現れた。

「このような格好でお許し願いたい。なにしろ、長い間寝たきりなので、まだ身体がよく動いてくれないです」

校長は携帯電話のカメラ機能をつかつて会議に出席しているのだ。全員、赤星高校の校長の健康を気遣う言葉をかけ、校長はそれに

礼を言つた。

「ありがとう……。とにかくわが校のケン太くん。それに千石高校の生徒であるキヨシ、ケイスケの話から、万石高校のタツヲと言つのが、闇のガクランの持ち主でないかという疑いを生じたのです。それであとで千石高校の校長と話したさい、その印象がますます強まつた、というわけです」

「間違いない……。そのタツヲの着ているのが闇のガクランだ。なんでも闇のガクランの着用者は、おそろしいほどの知能と、罪悪感の欠如を示すと言つ。千石高校の校長を脅迫したときの手口がそれを示しているよ」

「伝説のガクランあるところ、闇のガクラン現れる……か。最初の伝説のガクランはいつ現れたのかな」

「記録によると、戦前からあるようです」

「その報告に、みな「え？」となつた。

「しかしケン太のガクランは確かに父親から譲られたと……」

「そう、ケン太の父親高倉ブン太がいまのケン太くらいの年頃のころ、町の仕立て屋の老人から貰つたとされています。しかしそれ以前にも伝説のガクランは存在しました。その時代々々にあらわれる正義の番長が着たガクランが、伝説のガクランと呼ばれたのです。が、ブン太の貰つたガクランは特別な仕立てで、着用者を怖ろしいほどの喧嘩上手に変身させてしまいます。そのちからでブン太は伝説の番長となり、着用した学生服は伝説のガクランと呼ばれました。

ですから伝説のガクランの影である闇のガクランの威力も想像もつかないほど強力です。たぶん、闇のガクランの着用者に対抗できるのは、伝説のガクランの着用者だけでしょう

「なぜ闇のガクランなど現れるのだ。われわれがそれを望むわけ、ないだろ?」

「作用、反作用という言葉があります。光あるところ影がある。光が強烈なほど、そのつくりだす闇も濃いのです」

「その者、赤き衣をまといて金色の野におりたつべし……。伝説のガクランについて昔から語られる言葉だが、それがなにを意味しているのか判らん……」

「闇のガクランを着たタツヲはいつたいこれからなにを狙つて行動するのかな？」

「たいてい、闇のガクランの着用者は、権力への志向を示すようです。際限ない支配欲。それが特徴で、そのためにどのような手段でもとることをためらいません」

「タツヲは千石高校と万石高校の支配権を握つた。つぎは赤星高校だろう。きみはどうするつもりなんだ」

これは赤星高校の校長へ向けられた言葉だった。かれは画面の向こうでうなずいた。

「そう、愚図愚図していられん。幸い、ケン太くんやコミヒミのふたりが高校に生徒を復学させるべく動いている。かれらが成功して赤星高校に生徒が戻つてくれればたぶん……」

もうひとりの校長が手をよじり合わせるようにしてうめいた。

「赤星高校がやられねばつきはうちだ！ なんとしてもタツヲの野望は摘み取らなければならない！」

となりにいたもうひとりがうなずいた。

「そうだ。赤星高校は位置的に言つて、われらのど真ん中に位置する。タツヲが赤星高校を支配下にわけば、われわれすべてが危機に瀕することになる。われらすべてちからをあわせなくてはならん！」

その場にいたすべての校長がうなずいた。

長老格の老人がすつと立ち上がり、口を開いた。

「それではこの校長同盟は非常事態であることを宣言する。万石高校のタツヲの野望を阻止するため、われらは総力をあげて赤星高校を援助する！ みなさん、これでよろしいな？」

「賛成！ 賛成！」 という声が一同からあがつていった。

委員会はタツヲに対抗する動議を採択したのである。

ヨーロの店に連れてこられたセイントカインの面々はおどおどしていた。

五人はいま普段の学生服に戻っている。そのせいもあり、なれない町に来ているといふこともあって緊張していたのかもしれない。

ケン太は一同をヨーロに紹介した。

「ヨーロさん。かれらがセイントカインというグループです。かれらのための学生服は出来ていますか？」

ヨーロはうなずいた。

「出来ているわよ。特注だつたから大変だつたけど、ま、あたしの自信作ね！」

ケン太は有難うとうなずいた。

ヨーロは引き出しから五着分の学生服を取り出した。

男性用四着、女性用のセーラー服が一着である。

男性用の学生服はそれぞれ赤、青、黄色、緑に染められていた。セーラー服の襟、スカートはもちろんピンクである。

じぶんのカラーの服を手にとつたセイントカインの面々は不思議そうにケン太を見た。

「着てみたらどう？」

言われて着替えた。

女の子はヨーロに案内され更衣室で着替えている。すっかり着替え終わり、五人はおたがいを見合つてにやにやしている。

「どうだい？」

ケン太に言われ、リーダーの比呂英雄は相好を崩した。

「うん、なんだか気分が変わったな……じぶんのカラーの学生服なんて考えもしなかった」

「裏返してみなよ」

え？ とかれらは自分の学生服の裏地を確かめた。

学生服はリバーシブルになつていて、裏返すとセイントカインのユーフォームになつていた。

凄え……と四人の男子生徒は興奮していた。

「それだつたら、いつでも変身できるだろ？」「

ただひとりの女の子のセイント・リンクは腕を組んで叫んだ。

「あたしはどうなの？ これじゃ、あたしだけのけ者じゃない？」

ヨーロは首をふって答えた。

「大丈夫、あなたのセーラー服もちゃんと変身できるから。その襟の裏側を見てごらんなさい」

言われてリンクは襟を裏返した。するするっと襟から布地がのび、リンクの制服となつていく。スカートの裏側にもタイツが隠されていて、たちまち彼女はセイント・リンクに変身した。

「これがマスクだ」

ケン太が渡したのは手の平にすっぽりとおさまるほどのハンカチほどの大きさの布地のかたまりだつた。

ひろげるとマスクになつていて、かぶるとぴつたりと顔に貼りつく。靴はふだんはスニーカーだが、これも伸びてブーツのかたちとなる。

かれらは嬉々としてセイント・カインの姿に変身していた。

「どうだい。気に入つたかい？」

かれらはもちろん！ と相槌をうつた。

「赤星高校に戻つてくれるな？」

ふたたび学生服にもどり、英雄はうなずいた。

「ああ、戻ろう。そして高校を守るための戦いに参加しよう。約束する」

そのころ……赤星高校の校長室では、ふたごが帰つてきていた。

ふたりは校長のためにお粥を用意していたのである。

「なかなか集まらないわねえ」

ゴミがぼつりとつぶやき、隣りでお粥にいれる葱を刻んでいたエミもうなずいた。

ふたりの会話を、校長は寝ながら聞いている。

「本当……やつぱり駄目みたい」

ふたごは同級生にむけ、携帯でメールを送っていたが返事の返ってきたのは半分にもみたず、復学の意思をしめした相手もほとんどいなかつた。

「どうしよう……」

「ねえ」

エミがコミのほうを見た。

「考えを変えてみない？」

「なによ」

「だから復学にこだわらないで、新入生を募集するのよ。」

「だつてもう新入学の時期は……」

「世の中には高校に入学したくても出来ない人もいるわ。年令、国籍にこだわらず、どんな人でも受け入れることにすればいいのよ」

コミの顔があかるくなつた。

「そうか、夜間の学校つてのもあるしね！ でもどうやって入学を勧誘するの？」

「それが問題なのよねえ……」

エミは腕を組んだ。

なにしろふたりはただの学生である。入学勧誘などと言つてもどうすればいいのか、途方に暮れていた。

校長がむくりと起き上がる。

その気配に、ふたごはふり返つた。

校長は口を開いた。

「それなら方法がないでもない……」

「校長先生？」

赤星高校校長の瞳はらんらんと輝いていた。

ライブ（前書き）

赤星高校の生徒募集のため、ユミとヒミのふたりに呼び出されたケン太。さて、募集のためなにをするのか？

「ケン太、電話よー。赤星高校のHIMIさんといつ女の子から」

母親の純子に呼ばれ、ケン太はなんだううと思つた。

思わせぶりな純子の表情に、ちょっとケン太は顔を赤くした。女の子から電話など、初めてのこととて母親としては浮かれているようだ。そんなんじゃないよ……と言いたいのだが、何か言つと言つてになつてしまふから、黙つてケン太は電話をとつた。

「もしもし……」

「あ、ケン太さん！ 是非あなたにお願いしたいことができたの！ 受話器のむこうからHIMIのはずんだ声が聞こえてくる。『わざわざわ』といつ人声が背後に聞こえるので外から電話しているらし。

「なに？ ぼくに頼みたいことつて」

返事をすると、HIMIにかわつた。

「もしもし、HIMIです。あのね、ちょっと出てきて欲しいんですけどお……場所は……」

HIMIの告げたのはケン太の住む町から離れた市街中心部の駅だつた。伝説のガクランを着てくるよつにと念を押され、ケン太は首をかしげた。

「なあに、デート？」

「そんなんぢやないよ」

母親の好奇の目をちよつとつむかへ感じながらケン太は二階の自室へ引き上げた。

壁にかけられた伝説のガクランを見る。

あいかわらずガクランの背中の「男」の刺繡が燦然と輝いている。ケン太はガクランを身につけた。

たちまち背筋がのび、身内にちからが満ちてくる独特の感覚。ポケットから櫛をとりだし、自分の髪の毛を梳くといつもの金髪リーゼント・スタイルになる。

玄関を出て、外へと出かける。

駅を出てすぐユミとエミの二人が出迎えた。
改札にふたりはケン太を探していたのか、姿が見えると手を勢いよくふつて差し招いている。

「なんだい、急に？」

ケン太が話しかけるとふたりはちょっとはにかんだような笑顔を見せる。

「あの、ちょっと付き合つてほしいんです」

ユミの言葉にケン太はどきんと胸が高鳴つた。

たちまち真っ赤になるケン太に、エミは手を細かくふつて否定した。

「違う、違う！ そんなんじゃなくて……あのう、赤星高校に新入学の生徒を募集するために手伝つて貰いたいんです」

なんだ……と、ケン太はがっかりするような、ほつとするような気分になつた。

「新入学の募集だつて？」

「そう、やつぱり生徒がそろわないと高校も元に戻らないでしじょう？ あたしたちとケン太さん、それにセイントカインの五人でやつと八人じや、一クラスもできやしないわ。だからなるべく多くの生徒を集めようということでここに来たの」

「それは判るけど、どうやつて集めるつもりなんだい？」

「コマーシャルをするのよ！」

「コマーシャル？」

ケン太はあっけにとられた。

と、赤、青、黄、緑、ピンクの五色の学生服が視界にはいり、ケン太はふり向いた。

セイントカインの五人である。

「やあ」

赤の学生服を着たリーダーの比呂英雄は軽く手をあげ挨拶する。

「かれらも呼んだのか」

「ええ、なにしろ正規の赤星高校生徒はあたしたちだけだから。あたしたちで宣伝しないといけないと思って」

「コミの返事にケン太はもつともだと頷いた。

「それで、どうやってコマーシャルするつもりなんだい。駅前でなにかするのか」

「うふ……、とコミとエミは意味深な微笑を浮かべた。

「あたらずとも遠からず」

エミの答えにケン太は眉をひそめた。

「なんだい？」

ケン太はセイントカインに顔を向けた。

かれらも知らされていないよつて、顔を横にふる。

「こつちよ！」

コミとエミは両側からケン太の手をとり、歩き出した。

「え……？」

いきなり女の子一人に手を握られ、ケン太は戸惑ってしまった。駅前のロータリーに、一台のおおきな車が停まっていた。

マイクロ・バスほどの大きさがあり、横開きのドアがケン太が近づくと大きく開いた。

「ども、高倉ケン太さんですね？」

中から度の強い眼鏡をかけた、三十なかばと思える男が顔を出した。髪の毛はもじやもじやで、大きな鼻とほつそりとした顎をした、蜘蛛のように痩せた手足をしている小柄な男である。

ケン太を先頭にコミとエミ、そしてセイントカインの八人が車の中にはいる。席はたつぱりとあり、どうやら十数人が座れるくらいありそうだ。

席に座られると、さつきの男が名刺を取り出しケン太に渡した。

とあつた。

「どもども、宇土と言ひます。あの、赤星高校という高校の宣伝を頼まれまして、あたくし担当になりましたんで、よろしく。あ、これ宣伝案をまとめたもんです。どうぞ読んでください」

せかせかとそれだけ喋ると、宇土と名乗った男はセカンド・バッグを取り出し中から数枚のパンフを取り出した。

渡されそれを見るケン太の眉がおおきくハの字になつた。
内容はケン太を中心に、歌と踊りのライブを行うことになつていて、そのライブで赤星高校への勧誘を織り込むことになつていて。ケン太はユミとエミを見た。

ふたりはあつけらかんとした表情で、ケン太を見つめている。

「歌と踊り、だつて？」

セイントカインの五人にもおなじものが渡されているようだ。
みな、パンフを食い入るように読んでいた。

「心配ありません。歌と踊りはちゃんと専門の方を呼んで、レッスンして貰うことになつていますし、そちらの五人とユミとエミちゃんというふたご姉妹がいれば人目を引きます。ぜつたい成功します！ 請合います」

熱心に宇土はケン太を口説いていた。

「あの……ぼくが歌うことになつてているのかい？」

「もちろん！」

というのがユミとエミの答えたつた。

ケン太はふるふると首を振つた。

「冗談じゃない。ぼくにそんなことできるもんか！」

大丈夫です、と宇土は請合つた。

「なに、だれでも最初は素人でさあ！ ケン太さんはまだ十五才でしょ？ その若さなら、あつという間に覚えますつて。それにそのガクラン、格好いいですしね。背中の刺繡にライトがあたれば、

印象的です。きっと人気がありますぜ」

ケン太の顔にどつと汗が吹きだした。

「よしてくれ……」

「ゴミとHミを見る。

ふたりはまっすぐケン太の目を見つめていた。

セイントカインたちに目をやる。

五人もまた、にやにやしながらケン太を見つめ返した。

「おい、よせよ。本当にぼくがそんなことができるわけないだらう?」

弱々しく言いながら、ケン太はゆっくりとかぶりをふつた。

じーつ、と全員がケン太の決心を待っていた。

ケン太は肩を落とした。

「まず、歌を覚えてもらわないといけません。歌詞はこれ。そしてオケはこのCDに焼きこんでいますので、今日のところは聞いてもらひだけで結構です」

音楽プロデューサーと名乗る一十代半ばの、いつも冷笑を浮かべているような細面の男が口を開いた。

薄茶色のサングラスをかけ、派手な赤と青のまだら模様のシャツを着て、わざと裂け目をつけたジーンズを履いている。最先端のファッショնなのか、それともそもそもファン・センスがないのか判断しづらい格好である。

宇土の車でケン太たちは市街のとあるレコーディング・スタジオに連れて来られていた。

そこには音楽プロデューサー、ダンスの振付師、演出家などさまざまな分野の人間が集まり「赤星高校再生プロジェクト」と名づけられたライブの計画を作成していた。

「しかしライブだなんて、こんなことになるとは思つてもみなかつた……」

ケン太はつぶやいた。

ゴミは身を乗り出した。

「でも、これが一番効果的なのよ！ 校長先生の紹介なんです」

「校長先生が？」

ケン太の問いかけにHIMIが答える。

「ええ、校長先生が、昔の赤星高校の卒業生から「う」ことをやつている人を捜し当ててくれてあたしたちに紹介してくれたんですよ」

「そうか……とケン太は覚悟をきめた。

とにかく、それしか方法がないのならしかたないじゃないか！

宇土が口を開いた。

「ケン太さんだけやらせるんじゃないですから。セイントカインの皆さんも参加してもらいます」

いきなり話題をふられ、セイントカインの五人は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔になつた。

「ぼくらが？」

「あんたたちには楽器を担当してもらいます」

「ひえーっ、とかれらは叫んだ。

セイントカイン・レッドはリード・ギター。

セイントカイン・ブルーはベース。

セイントカイン・イエローはドラム。

セイントカイン・グリーンはキーボード。

そしてセイントカイン・ピンクとHIMIはコーラス担当と決まった。

ぱんぱんと宇土は手を叩いた。

「さあ、担当が決まったところでさつそくレッスンとりますかー。かれは生き生きとしていた。

いよいよ明日。

「本当にやるのかい？」

ケン太は不安そうに尋ねた。

「なに言つてるの？ あれほどみんなで練習したでしょー。自信を持つてやるのよ」

「ミミとヒミは田をきらきらとさせていた。

全員のなかで、このふたりがもっとも熱心だった。

セイントカインたちは自分たちが前面に出るわけないのでどちらかというと気楽なものである。

結局、ライブはケン太たちの住む町の駅前でやることになった。赤星高校がすぐ近くにあるし、各駅しか電車は停車しないが利用客もわりと多いからである。

駅前に宇土は特設ステージを組み、コンサートを仕掛けていた。

”高倉ケン太とセイントカイン”それがグループ名である。自分の名前が大書きされた幟を目にし、ケン太は恥ずかしさに真っ赤になっていた。

「さあ、行きますよ！ お客様も集まっていますから」

宇土が顔を出した。

ケン太は覚悟をきめた。

全員、配置につく。

幕が開いた。

駅前のロータリー。そう広い場所ではないが、それでも客は詰め掛けていた。休日でもあり、物見高い人間はどこにでもいるものだ。

ケン太はおおきく息を吸い込んだ。

手にマイクを持ち、一步前へ出る。

「ここにちわ……」

ひと声挨拶する。

帰つてくるのは静寂である。

唇を舐め、ケン太はふたたび口を開いた。

「えーと……今日、皆さん前にぼくたちがライブをやることになつたのは、赤星高校というぼくらの高校を救うためです……」

静寂はびくともしない。無反応な観客に、ケン太の背中にじっとりと汗が流れた。

「この中で高校に入学していない人はいませんか？ もう一度、高校生活を送りたい、なんて人はいませんか？ 赤星高校はそんな皆

さんを求めています！」

観客がいらいらしあじめたのをケン太は感じていた。視線が冷たくなり、そわそわしている。

どうしよう……。

ちらりと舞台の袖で見守っている宇土亞連を見る。亞連は指先を狂ったように廻していた。はやくライブを始めろ！ そう言つていいようだった。さつとケン太はセイント・レッドを見る。うなずく。

ケン太は手を上へ突き上げた。

「ワン・ツー……ワン・ツー・スリー……」
ドラマ担当のセイント・イエローがカウントをとった。
じゃーん！

レッドのリードが鳴り響く。

ケン太は渾身のちからをこめ、唄いだした。

おいらはバンチョウ

愉快なバンチョウ

おいらが叫べば嵐を呼ぶぜ

背中の刺繡が鳴いている

”男”を見せると鳴いている

えーい、面倒だ

まとめてかかってきやがれ！

ビンタ！

蹴り！

どうした、弱虫め！

ケン太は夢中になつて唄つていた。

いつの間にか、手足を激しく動かし、田に見えない敵にむかつて格闘している自分に気づく。

袖の宇土を見ると、呆然となつている。

振り付けと違つ……。

目がそう言つている。

しまつた……。

ケン太は脣をかんだ。ついうかうかと、教えられた振り付けをすつかり忘れてしまつっていた。

はつ、と気づくと観客が目を丸くして見上げている。

気まずい沈黙。

ふつ、と息を吐きケン太はまっすぐ立ち上がつた。

「ど、どうも……失礼しました……」

そのまま観客の顔を見ることもできず、そそくさと退場した。はつ、となつた宇土がカーテンを閉めた。

その時。

津波のような拍手と喚声が幕の向こうから沸いて届いた。その迫力に、垂れた幕がふわりと波立つたくらいだった。

アンコール！

アンコール！

観客の喚声が聞こえてくる。

ケン太たちは顔を見合わせた。

ライブ（後書き）

今回ちょっと悪ノリしちゃいました。みなさん、ついてきてくれますか？

手紙（前書き）

久しぶりの更新です。なんと一月もほつておいたんですねえ。

「ぜひ、CDデビューしましょう！」

興奮した宇土はケン太に向かつて熱心に話しかけた。

その後、ライブが終わつて宇土はケン太とヨミとエミ、そしてセイントカインをファミリー・ラストランに案内して今後の計画を話し合つことにしたのだった。

宇土の顔は輝いていた。

駅前のライブで、アンコールの声があがり、しかたなくセイントカインのテーマソングでお茶をにこしたのだが、観客たちはケン太に注目していた。

「ケン太さん。あんたにはスターのオーラがあります。わたしが言うんだから間違いない。CDデビューしたらわたしがすべてプロデュースしますから、大船に乗つた気持ちで任せてください！」

「ぼくに、ですか？」

ケン太には信じられなかつた。

そばのヨミにささやきかける。

「この人の言うこと、どう思う？」

ヨミはうなずいた。

「ライブのケン太さん。素敵でした。なんだか、いままで見たことのないケン太さんがいたみたいで」

ケン太はエミを見た。

彼女も同意するように激しく頷く。

「あたしもそう思います！　あのときガクランの刺繡が眩しく光つたみたい……」

エミの言葉に、その場にいた全員が同意した。

なんと、ケン太の背中の”男”の刺繡がまぶしく光つた、というのだ。

ケン太は複雑な気分になつた。

たしかにケン太はあの時、観客を魅了したようだ。だが、それはガクランのおかげ、といつていよいよだ。

宇土は熱心に言った。

「ねえ、わたしに任せてくれば絶対ヒットしますよ！ それにこDデビューは赤星高校のためにもなるんですぜ」

え？ と、ケン太は顔をあげた。

「え、いつですか？」

気持ちが動いた、と見た宇土は身を乗り出した。

「 よ」さんですか？ 沢山の人が聞いてくれればそれはとりもなおさず、宣伝になるでしょう？ それにその収入を高校のために遣えばいいじゃないですか？ 聞くところによると、赤星高校には教師がないといっていうじゃないですか。生徒がそろつても、教師がないんじゃ高校とはいえませんでしょう？」

とケン太は胸をつかれた。

ケン太はユミとエミを見た。

ふたりとも宇土の指摘に納得している。

よし、とケン太はうなずいた。

「お任せします」

ケン太は頭を下げる。

プロジェクトが動き出した。

CDレビューにこんなに多くの人々が関わることになるとはケン太は思つてもいなかつた。

毎日ケンカとセイントカイン。それは「三とH3のノルマ」連れまわされ、さまざまなスタッフと顔合わせを続けた。そして練習の日々。

録音がすみ、ようやくこの発売日が近づいてきた。

その間、宇土は宣伝のためだと語つてテレビやラジオに一同を引張りまわし、ディレクターやプロデューサーに会わせていった。

よろしくお願ひしますと頭を下げるケン太たちを迎えるかれらはやや冷淡といつていい対応を見せた。

宇土はなに、あんなものです。あんたらの人気が出れば手の平をかえしたようになりますぜ、と元気付けた。

きつかけはあるテレビのワン・コーナーで曲を披露したあとだつた。

放映が終わった瞬間、そのテレビ局に一斉に問い合わせの電話が殺到したのである。

その反応を見て、宇土はしてやつたりといつた表情になった。

両手を擦り合わせ、満面の笑みを浮かべる。

「思つたとおりです、絶対いけますつて！」

次の日から全員田が回る忙しさに投げ込まれた。

毎日テレビやラジオに出演させられ、雑誌のインタビューを受け、写真を撮られた。

そんな日々にケン太はじょじょに苛立ちを覚え始めた。

「こんなこと続けていいのかなあ……」

ほかの七人はケン太の言葉に顔を見合わせた。

テレビ局の控え室でケン太はぐつたりと椅子によりかかりつぶやいたのである。

「こんなことつて、なんですか？」

ユミが尋ねた。

ケン太は顔をあげた。

「毎日、テレビ局やラジオ局に引張りまわされてさ、高校に通う暇もない。おれたち、高校生なんだぜ」

いつの間にかケン太は自分のことをおれと言つようになつていて。「きみら、ちかごろ赤星高校に顔をだしたかい？ 校長先生はどうしている？」

「ミミとヒミはあつ、と叫んだ。

「いけない！」

「忘れていたわ！」

ケン太は立ち上がった。

「みんな、いまからでも行かないか？」

セイント・レッドの英雄が声をあげた。

「こんな時間に？」

控え室の壁にかけられている時計を見上げる。時刻は夕方をまわっている。

「いまからなら時間があるだろ？ おれひとりでも行つてみるよ」
さつさとドアに近づいた。

あわててゴミとエミがその後に続いた。

「まつて、ケン太さん。あたしたちも！」

セイントカインたちは顔を見合せた。

「しかたないなあ……」

立ち上がる。

そこへ宇土がやつってきた。

「あれ、みなさん。どうしました？」

ケン太がこれから赤星高校へ向かうと話すと、かれはあわてた。

「ちょ、ちょっと待つてくださいよ。これから高校へつたつて、何時だと思っているんです？ それに明日はコンサートの打ち合わせがあるんですよ！」

「とにかく、今日はこれまでにしてくれ！」

ケン太が大声を出した。

宇土は絶句した。

ケン太が大声を出すとは思つてもいなかつたからだ。

ぼう然と立ち尽くす宇土を尻目に、ケン太はほかの全員を連れてテレビ局を飛び出した。

深夜の赤星高校は静まりかえつている。

校門をくぐり、校舎の裏へ。

赤星高校の校長室のあるプレハブに近づく。

「明かりがついているぞ」

プレハブの窓を見てだれかが声をあげた。

たしかに校長室があるプレハブの窓は明るい。

ケン太はプレハブのドアに手をかけた。

開いた。

すぐ入ったところが土間になつていて、へつついがあつて三土和につづく。上がりがまちの障子の向こうが明るい。

障子を開いてケン太は声をかけた。

「今は……」

ケン太は息をのんだ。

「だれもいない」

「えつ！」

ケン太の言葉にユミとエミは田をまるくした。

背後から覗き込んだふたりは顔を見合せた。

「本当……校長先生がいないわ」

三畳間はさつぱりとかたづき、布団もたたまれ押入れに入れられ

ている。ちいさな卓袱台がその代わりに置かれ、封筒があつた。

ユミとエミはケン太を押しのけ、部屋にはいりこんだ。

卓袱台の封筒をとりあげた。

ケン太を見る。

「ケン太さんにです」

「おれに？」

封筒を受け取り、ためすがえす眺めた。

おもてに「ケン太くん」と校長の手であるのか、達筆な筆さば

きで書かれてあつた。ケン太は封筒を開いた。

「読んでみてくれないか」

セイントカインのひとりが言った。

ケン太はうなずき、声を出して読み始めた。

「ケン太くん、そしてユミとエミ。セイントカインの諸君。色々有

難う。きみらのおかげで赤星高校には続々と入学希望者が願書を出してくれた。

しかし諸君も知つての通り、わが校には教師が不足している。いや、ひとりもいないと言つたほうが正しい。それでわたしはこの現状を打破するべく、教師募集することにした。が、ただの教師ではいまの赤星高校には勤まらないだろう。

なぜなら万石高校のタツラが狙つてゐるからだ。
不良生徒の脅迫にも屈せず、教育への情熱を持つた教師でなくてはならない。

そんな教師を探すため、わたしは暫く高校を離れることになる。みんなには迷惑をかけることになるが、どうか赤星高校のことを頼む

手紙を読み終わり、ケン太は顔をあげた。

ぼう然とユミとエミ、セイントカインたちが見つめている。

「入学希望者がいるつて、書いていたわね」

ユミがつぶやいた。

開いた校長の手紙の紙から、はらりともう一通の紙が床に落ちた。拾い上げたエミは叫んだ。

「これ、入学希望者のリストよ……すごい、百人以上いるわ！」

ケン太はもう一度手紙の文面に目を落とした。

「待つてくれ、追伸がある」

「追伸？」

「こうだ……いいかい、読むよ……追伸、タツラに氣をつけろ。タツラは闇のガクランの着用者である！」

「闇のガクラン？」

ユミがつぶやいた。

「なにかしら？」

エミが応じる。

わからない……とケン太はつぶやいた。

しかし気になる響きだ。

闇のガクラン……。

ケン太にはタツヲとの決戦が近づいている予感がしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9271c/>

パンチョウ！

2010年10月10日16時11分発行